

水口鹿太郎講述

西洋近世史

早稻田大學出版部藏版

目次

緒言

第一編 政治の革新

第一章	十五世紀中葉の歐洲列國	一
第二章	フランス	一二
第三章	イギリス	四五
第四章	スペイン	六五
第五章	ゼルマン及びイタリア	八五
第六章	オットマン帝國	一一三

第二編 政治革新の結果

第一章 イタリア戦争……………一二七

第二章 佛墺兩家葛藤の第一期……………一五四

第三章 佛墺兩家葛藤の第二期……………一七〇

第四章 佛墺兩家葛藤の第三期……………一八九

第三編 大陸發見と文藝宗教の革新

第一章 アメリカ及びインド通路の發見……………二〇四

第二章 文藝復興……………二四一

第三章 宗教革命……………二七四

第四編 舊教復興と宗教戦争

附スペインの權勢

第一章 トレント會議及び舊教復興……………三三三

第二章 宗教戦争……………三四二

第三章 宗教戦争の結果……………四〇二

第五編 ルイ十三、四世治下のフランス隆盛期

第一章 ルイ十三世及びリシエリユン……………四三六

第二章 三十年戦争……………四五八

第三章 スチュアート家とクロムウェル時代のイギリス……………四九二

第四章 十七世紀中葉のフランス……………五三四

附一千六百六十一年のエウロッパ

第五章	ルイ十四世の治世	五六〇
第六章	一千六百八十八年に於けるイギリス革命	五八六
第七章	十七世紀に於ける美術、文學、科學	六一七

## 目次終

### 緒言

茲に講述せんとするは、一國事を限り叙せんとする國別史にあらず、世界の全局に亘りて其の關係を詳にせんとする世界史、若くは一般史、萬國史などいふものにもあらず、題號の如く、近世に於ける歐洲列國の關係、事件の起因、變遷等を縷述せんとする一大陸史なり。然れども太古東洋の文明は當時の世界的文明なりしが如く、近世の歐洲文化はやがてまた世界發達の源流にして、事變僅に一大陸に限らるゝ如くにして、しかも世界に影響を及ぼし、人類全部の進歩發達に關する世界的史變なれば、此の一面に於てはまた世界史といふを得べし。即ち近世の歐洲史は實に世界史にして、世界史また歐洲史たるなり、要は歐洲大陸を中心として自ら世界に及ぼす波動を追ふものと、世界全局を一團として其の主腦たる歐洲史變を觀るとの別に外ならず。

近世史を講ずる史家にして中近兩世紀の界限を劃する區々にして一ならず、或はアメリカ大陸の發見を以てし、或は宗教改革を以てし、或は歐洲君主政治の確

立、即ち政變を以て紀元とし、或はフレデリック大王の即位を以てし、或は交通の開張を世界的事變なりとして新紀の首となす。諸説各、理なきにあらずと雖も、今は普通史家の例に倣ひ、紀元一千四百五十三年東帝國滅亡を以て新紀元となし、以て一千七百八十九年に至る三百五十年間に於ける歐洲列國の史的事變を述べることはするなり。更に十八世末フランス革命より今日に至るものは、十九世紀史、最近史に於て本講に繼續すべきものとす。

中世の特質は群雄暴威に誇り各城邑權勢を逞ふし、個人的發達の頂點に達したりし封建制の地方分權にあり。近世のそれは全く之に反し、中史集權となり、帝王の神聖と絶對權とを認容せる國家的時代なり。前者の分權は到る處に綜合せられ集中せられ、封建の舊制度はあらゆる方面に於て打破せられんとするに至つて、氷炭相容ざる二者の衝動はやがて革命となれり。されば國家勢力の扶植を勉むると共に、社會制度の自由個人的權利の發達を謀ること、換言せば國家と個人との調和融合こそ當代の主眼にして、將また來らんとする時代の特質ならんかな。

# 西洋近世史

水口鹿太郎述

## 第一編 政治の革新

### 第一章 十五世紀中葉の歐洲列國

中近兩世紀の區分 一千四百五十三年を以て中世の最終、近世の初年となすこと従來史家の慣例にして、そはトルコ人(オトマンズ)の爲めにコンスタンチノオブル陥落し、東ロオマ帝國滅亡せしこと、英佛間に於ける百年戰爭の終局せることとの記憶すべき二大事件ありたるを以てなり。然れども更に精密に兩期を區劃せんと欲せば、寧ろ歐洲一般の嗜好、思想、信仰等精神界の革新期たる十五世紀末より、十六世紀初期なりとせざるべからず。

一千四百九十四年、伊太利戰爭開始せられ、これと共に歐洲諸邦の反抗戰爭は始まれり。一千四百九十二年、クリストフ・コロンバ、亞米利加新大陸を發見し、後五

年パスコダガマ印度に初航せり、これ商業上の革新なり。一千五百〇八年、ラフエ  
ル及びミカエル・アンデエロ等ロオマの宮殿或は寺院に於て彼等が天才の畫筆を  
揮ひつゝあり、これ美術界の革新なり。コバルニカスが地動の新學說組織即ち科  
學界の革新期に於て、活版術の發明、古文學の勃興するありて、文學の革新は成り。  
一千五百十七年の最後に於て、ルーテルの聲は歐洲人の耳朶を震動したり、これ即  
ち宗教改革なすなり。

近世の文明は此等諸種の革新の影響を蒙りしと勿論なれども、十五世紀以後三  
四世紀間に於ては、此等に先ちて起りたる政治革新の影響最も力ありしが如し。  
十五世紀の後半に於て、フランス、イギリス、ポルトガル及びスペイン等の諸君主は  
勢力範圍の擴張を企圖して、中古時代に於ては全く否認せられたる權力、并に嘗て  
羅馬皇帝の有したりし權力までも、自己が掌中に收めんと競ひき。此の如く近世  
史の主なる特質は政治の革新にして、其の變遷の概要及び依て來りたる結果とを  
明かにすること第一歩なれども、順序として一千四百五十三年前後に於ける歐洲  
列國の状態を知るの要あれば、溯りて略叙すべし。

## 西歐羅巴

此時代にありては歐洲諸國民の風習趣味、習慣等類似共通するこ  
と今日の如くならず、甚だしきは北方國民にして南方國民の名稱をさへ知るもの  
稀なりしなり。然れども凡て此等の諸國民は基督教徒にして、希臘教の外は悉く  
羅馬法王を聖彼得の繼承者、イエスキリストの副教師として、そが宗教上の偉大な  
權利を承認することに於て一致したり。十一世紀に於てコンスタンチノオプ  
ルの變に逢ふや、等しく狂したらんが如き熱心を以て十字軍に投じたる彼等は、ま  
た十五世紀に於て歐羅巴に永久の基礎を建設せんとせる回々教に逆て強固なる  
團結をば成したり。然れども一たび眼を轉じて政治の状況を仔細に觀察したら  
んには、活氣なく狂熱なきこと宗教の如くならざるを見るに難からず。左に中世  
末列國の状態を述べん。

フランスは英國民を放逐してより確固たる國躰を建設したりしと雖も、其の政  
治上の統一に至つては未だ圓滿に實行せられたるにはあらず。依然王領は王權  
と同じく封建貴族等の權勢によりて攪亂せられたり、こは多く皇族領土の弊習に  
歸因す。されどギクトリアスの稱ある名王チャアルス七世は彼が臣僚の助力に

よりにて王國恢復の實を擧げ、且つ其の整理に勉めたり。

イギリスは微弱なる帝王ヘンリー六世及び一外國女王マアガレットの治下にあ  
りて種々の災禍に惱ませられ、やがて此れ等の災厄は恐るべき薔薇戦争の前提と  
なれり、剩さへ衆望ありしグロセスタア公爵は宮廷の毒手に罹りて變死したりき  
(一十四百四十七年)。

スコットランドは王室對貴族等の争鬭絶ゆる時なく、ゼエムス一世は一千四百  
三十七年貴族の爲めに暗殺せられ、ゼエムス二世は此等貴族の同盟を破壊せんが  
爲めに、自ら其の領首ウヰリヤム、ドオグラスを誅戮せしが、一千四百六十年サウシイ  
バアン戦争後無慘の最後を遂げたる七歳の幼兒ゼエムス三世を遺して遂に逝け  
り(一十四百四十八年)。

スペインは猶五王國より成れり。一千四百五十三年カスチール王國にては、貴  
族等の爲めにジョン二世の寵者斬殺せられ、此の悲惨の珍事は以て強大にして平  
和なる一王國の存在を疑はしむるに至れり。此の如き國狀によりてムーア人に  
對する十字軍は放棄せられ、グラナダの回々教主をしてカスチールの擾亂に關涉

せしめ、また一王國ナバアルにては父子相争鬭するの内亂を生ぜり。カスチール  
がムルシア王國を占有したりし時、アラゴンは既にムーアとの衝突を中止して諸  
王は彼等の野心を地中海及びイタリア方面に向け居たり。されどアルフォンソ五  
世セマグナニモアスの死はアラゴン、サルチニア、シ、リイ及びネエブルスを其の  
子弟に分割せしむるに至りしより、彼が偉大なる王家は自ら滅亡の境に陥りたり  
(一十四百五十八年)。

またカスチール人の爲めにコルドワア及びセヴィルを奪掠せられたる後スベ  
イのムーアとも分離したるポルトガルは全然半島に於て増大の餘地を剩さざり  
しを以て、アフリカ沿岸の發見を以て富國強兵の途を求めんとしつゝありき。

イタリアは漸く獨逸權勢の手より免かれ得たりしも、國內統一の力なく、依然數  
邦に分離せられたり。アラゴンの王アルフォンソ五世は一千四百四十二年後ネエ  
ブルスを統治し、猶彼はスフォルザの富をも獲收せん希望を以て上部イタリアに  
まで其の勢力を普及せんと勤め、ゼノアは不斷の革命によりてトルコ人に劫掠せ  
られたるコンスタンチノオブルの廓外なるキタラ及び小アジア方面の商業は全

く放棄するの非運に陥りたるが故に、獨立自由の實を失ひ、一千四百五十三年を除くの外はミラン、フランス兩國の何れにか絶えず服従せざるを得ざりき。然るに一方に於てヴェニスは大陸征服の野心を藏し、これに全力を捧げしかば、イタリア國內に於ても多くの怨惡を買ひ、トルコ人に對しては殖民地と其の貿易保護に對して有ゆる政策を施さざるべからざるの時に際し、フランススコスフォルザは皇帝及びネエブルス王に逆つて、ミランの子爵家を横領したり(一千四百四十七年)。

フエリクス五世の禪位と、新法王に對して爲したるベエセル議會の長老等が服従の告白によりて、教會の平和は恢復せられたり(一千四百四十九年)。博學なる法王はコンスタンチノオブルより逃亡せる學者等を歓迎したりしも、過去に於けるが如く異教徒に對する法王政治の勢力微弱にして、基督教を喚起する能はざりしのみか、法王暫らくロオマを去りし間に於て、法王政治は恐るべき擾亂の餌となり終れり。要するにイタリアは文藝復興の中心なりしのみならず、地中海東方の沿岸との商業貿易繁盛を極め、歐洲當時にありては最も文華燦然として光彩を放ちしが如くにして、去かも腐爛極まるものありき。

スウキッツルの八郡は一千四百五十二年フランスと同盟を結びたり。是より先モルガルテン、セムペクに於て大にアウスタリアを破りし名譽ある戰勝以來、彼等山民の武名俄に高く、爾來獨立を維持し居たり。

**北、東、及び中部歐羅巴** 西部の諸國如上の紛亂動搖の裡にあり、北方に於てもまた一千三百九十七年、デムマルクの女王マルガレットがカルマルに於て結びしデムマルク、スウキデン、ノルウェイ合同條約破れんとするや、スウキッツル人は彼等血屬の皇子チャアルス八世を立てたり(一千四百四十八年)兩國民に取りてはこれぞ百年戰爭の起因なりける。

ロシアは東ロオマ帝國の衰退によりて他國に倍したる影響を蒙り、一時活動の元氣を喪ひ、モンゴリア人抑壓の下にありてナギブラド共和國によりてバルチック海方面を隔離せられ、ポーランドによりて西方を閉塞せられたり。一千四百四十五年、モスコワの大公爵ベエシル三世はモンゴリアの捕虜となり、償金を強奪せらるゝの不幸に陥りしのみか、強奪者デミトリアスの爲めに公爵家は顛覆せられたり。幸にしてベエシルは速に恢復し、一千四百五十一年再びモンゴリア人モスコ



ヲを攻撃せし時は、望を達せしめ得ざりき、蓋しモンゴリア人の勢力既に萎靡として振はず、また患ふるに足らざりしなり。是に於てや小王国小共和國は忽ち併呑せられたり、これ實にイヴァン三世(一千四百六十二年)治下の偉蹟にして、ビイター大帝大業の基礎は當時既に已に着手せられたりといふべし。イヴァン帝はガイザル、アウガスタス兄弟の稱を得て、ペレオロキイの女と婚し、東ロオマ帝國の相續者となりて、世界を照さんが爲めに神の選び給ひし明星即ち救世者として呼號せられんことを望めり、東ロオマの旗章なりし二羽の鷲を採て自國の旗章となせしは、其の希望の一端を證するに足るべし。即ちロシアの革命はイヴァンに依りて蒙古の羈絆を脱し、始めて獨立せるに起れり。

フロシヤ及びライヴニアは一千四百三十五年ポーランドの抑制を免かれ得しと雖も、マリインヅェルダア同盟(一千四百)の下にある貴族等背反の爲め、國勢を振張する能はざりき。

一千四百四十四年、カシミル四世はポーランドとリスウニアとを再合同せり、こは甚だ不鞏固なりしとは雖も、ポーランドをしてスラヴニア各州中の首位を占領せしむるには足りたり。

歐洲大陸の中央セルマンは國民の數と尙武の精神とに於ては強大なりしが如きも、上下紛亂貴族争鬪久しく絶えず、封建の政務は中央の主權を侵害して帝國の實なく、國力殆んど地に墜んとせり。されば聖セルマン帝國とは威嚴と兵力と威入なき、名のみなる帝王を戴ける無數の小獨立國が無制度の下に、結合にあらずして聚集せられたる團躰に過ぎざりき。此の如き狀勢は皇帝の選舉に非常の困難を感ぜしむるに至りしが、遂に一千四百四十年ハプスブルグ家(アウスタリア)のフレデリック帝位に即けり、彼は皇帝なるよりも寧ろアウスタリア公爵としてその公領擴張のみを謀れり。ダニューブの谷を越えてトルコ人の來襲するを知つて勇猛なるハンガリイ王ジョン・ハンヤディを助力せんとはせず、全くハンガリイ獨力によりて防戦するを得、幸に彼もセルマンを失はざりき、其の後ハンガリイの王位に野心を抱持したりしも成らずして中止せり(一千四百三十四年)。

アウスタリア、ハンガリイ及びボヘミアの君主にしてセルマン先帝の皇子ラヂスラフス六世はトルコを防禦すべき歐洲の鐵壁たるの重鎮を以て任ぜられしと雖

も、恐るべきハザイド戦争の結果ボヘミアは有力なるエトラクリストの手中に落ち、ハンガリーに於てはアウスタリア王を見ること他國の貴顯の如く、剩さへ彼の無能は能く其の責任を全ふするに堪えざりき。

トルコはダニュープ河の南にブルガリア、セルビア、ボスニアの三王國、北にモルダビア、ウレキア二邦及びハンガリー王國の六基督教國によりて阻塞せられしも、一千四百五十三年前ブルガリアを征服し、セルビアの大部分をも服従せしめたり。ボスニアまた土帝マホメット二世の屈服する所となり、ウレキアも等しく領土として算入せられ、只モルダビア其の厄を免かれ、ハンガリアは英王ジョン・ハンヤディ能く防ぎて、トルコの侵入を遮斷し、其の子マチアス、コルギナス名聲父よりも高く、先君の後を承けてまた成功せり。トルコに對する十五六世紀のハンガリーの態度は恰かも十三四世紀の間基督教の保護者たりしポーランドと其の狀相似たるものありたり。

ハンガリー能く防げどもトルコの赫々たる勢力は天下を風靡し、特に英邁なる君主モハメット二世はコンスタンチノオブルの侵畧を期し、遂に一千四百五十三年

五月二十九日其の誓を實行して基督教帝國を亡滅したり。コンスタンチノオブル滅亡の恐怖心は全イタリアを震動し、國內の諸侯はロデに於て和親の盟を結べり(一千四百五十九年五月九日)。恐怖の餘り彼等はまた再び十字軍を夢想し、その忘想は山を越て諸國に傳はり、フランダア及びバルガンディの貴族は歐洲よりトルコ人を撃退せんが爲めに武装せんとまで誓約せり、されど今や十字軍の時既に去つてまた來らず、あはれ盟約は一の空文に過ぎざりき。此の年ヴェニスは小アジア及びアドリアチック沿岸を支配せるモハメット二世と通商貿易の條約を締結しぬ。

當時の歐洲は十二世紀に於けるが如く宗教上の思想に於て、將た政治上の状態に於ても一致結合するの望なく、就中十五世紀の中葉に於ては全然中世紀と等しく各自孤立存在の狀を呈し、各政府を結合せしむべき一の問題なく、一の主義によりて各國民を糾合すべき勢力なかりき。さはれ此の勢力は當時歐洲の先達たりしフランスに存在し、且つ活動の兆を萌しつゝありたり。封建制度の暗黒より歐洲各國を救ひ、國內の秩序を統一し、平等同權を主張し、商工業、文學、美術に生氣を與へ、これによりて新文明の發達を補けしものは實に政治の革新なり、即ち王權なり

しなり。

## 第二章 フランス (一千四百九十三年)

チャアルス七世の晩年と王權の發達 フランス王國は數多の變遷を經過しぬ、クロヴィ及びその子は只主戰の首領、ユウカベは名のみ君主なる無勢力者、カベの承繼者に至つては主權地を拂つてまた跡を止めず、ルイに至て始めて安倫姑息の慢性痼疾を脱して、堂々たる政治的行動をなすに至れり。彼は先づ社會の秩序を整理して國民を歸依せしめ、威望を倍加せしめたり。ブリッブアウガスタス、ルイ九世を経て、フィリップ・ゼンファア及びフィリップ・オブアロアの時に至り、有力なる封建制度を破壊し、グレゴリ七世の後繼者を威壓して絕對權を得るに充分なる勢力を扶殖せり。此時に當りて百年戰爭開始せられ、佛蘭西の天地再び混沌たる暗黒に歸し、衰頹せる貴族等頭角を擡げて新封建制再現し來りぬ、さればチャアルス七世の如きも其の治世の初期に於ては、單にブルゼの王たるに過ぎざりしなり。フランス國民は不幸に遭遇してより互に親和し、外寇に接してより國家的觀念

を強め、愛國の氣燃るが如きものありて、一度苦境より救濟せられし後は再び繰返さざらんことを期し、能く君主に服従したりしかば、君主其の勢力を増大にし、國民また其の治下に秩序安寧を有てり。是に於てチャアルス七世はフィリップ時代の主權を恢復し得、ブルゼ王たる彼は一躍、チャアルス・ゼ・ヴァイクトリアスとなれり。配下また人材に乏しからず、老練の武將リチモン、ドノア、ラ・ヒル、セントレール等ありて軍隊を指揮し、名相ジャククル、セヴェレ、クウザノ等ありて輔弼の任を全ふして内政を完備し、外患を拂ひ、英國の羈絆を脱してフランスまた昔日の如くならず。此等の改革を實行する最も必要なるは軍隊なり、中世にありては軍隊悉く貴族の掌中にありて意の如くならざるより、王はこれを自己の手中に收めんと欲し、俄に十五の軍隊を組織し、支給經費の爲め租税を徴す、これ常備兵の嚆矢なり。常備兵設置と同時に砲兵また配置せられ、砲煙天を焦し、彈丸城樓を紛碎せしかば、爾來甲冑も鐵壁も貴族を保護するに足らずなりぬ。當時王の有せし二大勢力は一は金銀、一は軍隊なりしなり。秘密に封建の野心を抱いて反旗を翻さんと欲せし輩も忽ちに壓伏せられ、容易に盡滅することを免かれず、貴族黨の首領ボルボン公の

異母弟は水刑に處せられ、英國に内通せしイスパレ卿は斷頭臺上の露と消え、アレ  
ンゾ公は死刑に、アルマンヤク公は追放の上家財を沒收せられ、また父王に逆つて  
あらゆる陰謀の首者たりし皇太子は其の領地に貶流せられ、後バルガンディ公の下  
に逃走して身を委ぬるに至りぬ。封建制度再建の企圖に加擔せし貴族等は遂に  
成す能はざるを知りて、悉く服従の實を現はし、各國其の本分を守りてフランスの  
内亂は遂に鎮定に歸せり。チャアルス王の歿後貴族等は過去の失敗に懲ず、最後  
の戦勝を獲んがために、ルイ王十一世の時團結し、其の領土及び軍資は優に勝算の  
望ありき。

フランスが中央集權實行の勢力はまた全歐土の勢力となり、大領土を有する大  
諸侯また勢力範圍を擴張して王國たらんとするの野心を逞ふせり。例へば西半  
島に於てはブリタニイ公一獨立國たらんと欲し、バルガンディ公は廣大なる東北の  
領土に於て王と同じき主權を得んとして達したりしが如く、貴族の勢力挽回は再  
び彼等の掌上に落ち來りぬ。就中バルガンディの如きは大小バルガンディ、シヤロア、  
フランダルツ、アルトア等の諸邦を合せ、其の領セルマンにまで及び、名に於てフラ

ノスの一藩なるも、實は西歐の一大國なり、ブリタニイまた雄藩にして、共に勢力君  
王を凌がんとせるものあり。國情此の如き時に於てチャアルス七世は近臣中太  
子と氣脈を通じ、竊かに己を毒せんとする者なきやを疑ひ、斷食して崩せり。(一千四  
廿二年七月  
廿二日)

ルイ十一世、公安同盟、及びペロン條約　　バルガンディ公の下に流寓せ

る皇太子、即ち一千四百四十年の頃不平黨の領袖たりし彼は、活動的精神と密謀と  
の結果遂に流浪するの止むを得ざるに至りしと雖ども、父王の訃に接するや歸り  
て王位に登りぬ、ルイ十一世即ち是なり。新王位に即くや、貴族等謂へらく、宿望必  
らず達せらるべしと。果せるかな、彼は直ちに貴族の希望を完からしめ、父王昵近  
の諸官人を廢し、處刑したりしアレソツ及びアルマンヤク等の位置を復せしめた  
り。國民は一般に廢税を期待したりしも、徵税は依然繼續せられしのみか却て百  
八十万リブル(一リブルは凡そ我二十錢)許より三百万リブルに増加せしを以て、ラ  
イムス及びルウアンに一揆起りしも、忽ち苛酷なる征壓を加へられたり。彼は國  
王及び市に關する諸の事件に法王の容喙を禁止する旨をパリ大學に暗示し、また

自費を以て一千四百六十二年ポルドー議會を創始し、これによりてバリ及びトルブズ會議の権限を減縮せんと欲せり。是より先王は一千四百五十三年既にグレノブル議會を組織し、後またデション議會を創設したりき(七千九百)。

王は貴族制倒の宿志を果さんとして、先づノルマンディの老臣ブレゼ家を奪ひ、ポルボン家を奪ひてアンジウ家の一人に與へたり、こは兩家をして敵視せしめんとす。計略に出でたるなり。彼はまた其の同腹たるチャアルスよりペレエの政權を剝奪し、或はブリタニイ侯をして朝廷よりパリ議會に提出せし訴訟を承認して屬隸國たるの義務を果さしめ、彼を送りし僧侶等を拒まざらしめたり。加之有力なるバルガンディ家をすら召喚し、老公フリッブ・ゼグードより其の子カロレエ伯すら望んで得られざりしサムの諸市を償還せしめたりき(六千四年)。更に甚だしきは彼が貸與せし三十五萬クロン(一クロンは凡そ我一圓二十五錢許)の保證として、アラゴン王に財産讓與を強迫するに至れり(六千四年)。

ルイ即位後四年にして、彼に服せざるもの四方に起れり。五百の諸侯、貴族等公安同盟を組織し(六千四年)、以て王の苛政に對抗せんとせり、バルガンディ侯これが盟

主の觀ありき。ルイは同盟貴族等の多數にして、却て行動敏速を缺ぐべきものを察し、機先を制し一舉にして勝を獲んと、急ぎ南方の同盟者及び其の盟主たるポルボン公と戦はんが爲め自ら軍に將として出發せり。然るに王出師の後に至り、ブリトン人捕捉の任にありしメイン伯は、却てブリトンに合し、バルガンディアン防禦にあたれるネーザル伯はサムの城砦を捨て、チャアルス・ゼ・ポールドの名ありしカロレエ伯に與へたれば、伯は一の故障なくして六月五日パリに其の軍を入れ、其の來りしは惡税及び鹽税を廢止し、國利民福を計らんが爲めなりと宣言するに至りたりき。

パリの諸侯に與みするか、將た王に與みするかは、ルイ十一世が死活問題となれり。されば王はポルボン家及び其の聯合軍に對しては、最早注意を拂ふの暇なく、只管根據を失はざらんが爲め、直ちに首都に引返すべく決しぬ、疑もなく根據を敵手に奪はれんは王の運命をトするに難からざればなり。六月十六日朝、モントモリイに到りしに、バルガンディ軍既に歸路を擁せるを以て、王奮戦先鋒の將セント・ポール伯を討て前軍を破るや、チャアルス・ゼ・ポールド直ちに主力を集めて王軍の一

翼を襲撃して、モントエリイ外に撃退し、一勝一敗の後王は目的の如くパリに入れり、然れども四面悉く敵の重圍する所となりぬ。是より先、圍未だ充分ならざるを機とし、八月十日、王はノルマンディに向つて出發し、同月廿八日一萬二千の兵と共に彈藥二十輛、麥粉七百ミユド(は一定の量なれども一千四百六十五年に)及び夥しき糧食とを獲て歸りたりといふ、以て如何に王が機略に富めるかを知るべし。

ルイ十一世は戰場に於て勇悍なる將士なりしが如く、外交上の權謀術數に於て更に其の長所を有したり。例へば王が言語及び態度の謙讓なる、或は聊たりとも利益ある者に對しては、恩讎何れを問はず無條件にて之を引容し、與ふるに多くの賞を以てするのみならず、寧ろ多大に過ぐるものありて、全然過去の怨恨を忘却して知らざるもの、如きは、割據統一を缺ける當時の侯伯貴族等を收攬する最上の手段なりしなり。彼は此く間斷なく引接會談して慰撫馴睦の外交的秘術を弄し、遂に服從の意を表したる叛徒のアルマグナック伯には黄金を、ネモルス侯には土地を、セント・ポル伯にはフランス陸軍總督の印綬(Sword of Constable of France)を、其の他にも恩給金或は權職を與へ、一として容れざるものなかりし。此等の權謀に由り

て王に對する貴族等の同盟は自ら瓦解し、却つてブリタニイ、バルガンディ兩侯の交情隔絶し、互に敵視するの狀態に到るべしとさへ思へり。

されど、王は未だ心を安んずる能はず、此の術策は王國の附近に於てこそ効あれ、他邦の流浪者に對する勢力は皆無にして、當時各地に萌起しつゝある叛逆者に對しては策の施すべきやうもなかりき。ポントイス叛して、知事ルーエン自立し、次でエヴロー、ケーエン、ポーブエイ、ペロンネ等各々立つて君主たることを宣布したり。王は速かに此等を平定せんと欲し、其の要求を悉く認許して、王弟ベリイ侯にノルマンディを、バルガンディ侯にはボロン、ギネス、ローエ、モントディチア、ペロンネ及びソムメの諸市を、カロレエ伯には、ボンシユエを與へ、ブリタニイ侯には僧正任命の特權、國會の協賛を要せざる權力を許し及び朝貢の義務をも免除したり、こは蓋し一小獨立王國たることを默々に認容したりしなり。ロオレン侯にはシャンペイの領土を與へ、臣下としての義務を免除し、加ふるにモウゾン、セント・メネホオルド、ニユーフシャトゥの地及び現金三萬クラウンを附與したり。またポルボン及びネモオルスの兩侯、アルマグナック、デノイス、ダムマチンの三伯、サー・ドアルブレ

エト及び其の他のものには各土地を割譲し、且つ無限恩給金の支拂を約したること枚擧に遑あらず。然れども人民の幸福平和に關しては一人のこれを論ずるものなく、また嘗て之を重要視したるものすらあざりき。此の如く無謀に執行したりし貴族等との約款は、フランス王朝の衰亡の基となりしならんも、ルイ十一世の取りし措置の他にまた良策あざりしを、若し之れありしとすれば、王は此等の拙策を取らざりしとは何人も肯首する所なるべし、そは王の掌中にありし無勢力の國會之を記載することを峻拒したるにても察せらる。

ノルマンディの讓與は殊に危険甚しかりき、こは其の地のブリタニー、バルガンディ、兩侯の領土に接觸するのみか、ナンテよりダンカルクに至る一帯の海岸は英國に對して何等の要塞もあざればなり。ルイは夙に之を略取する手段を默考し居たりき。之を成就せんには、ボオールド(Bordeaux)一千四百六十七年此土の領主となりしも實は一千四百六十五年の頃より之を支配したりしをして眼をフランスの事件より他に轉ぜしむることを要せり。王は容易に其の方法を發見し、ボオールドは其の土を離ること能はざるに至れり、そは時會々リイデ、ダイナント、ゲントの三地に同

時に騷亂の蜂起せしかば、ボオールドは疾く其の鎮壓に赴きたり。其の虛に乗じて、王はブリタニー侯に啗はすに利を以てし、金十二萬クラウンを與へ、以て彼が領土に閉居せしめ、王自ら進んでノルマンディに入れり。エッロー、ヴェルノン、ルウヰアイ、ス、ルウエンは、悉く其の城門を開きて王を迎へたり。數週にして全土悉く王の手に歸し、カコレエは書を王に上りてボオールドのために謀る所ありしも、屈辱に終りたる外何事も企て及ばざりき。他家の統領もまた敢て戦ふの勇なく、皆風に臨んで或は降り、或は中立したり、王は已に南フランス(ベリ、オーリアン、ス、リモ、オジン、ペリゴ、オド、ク、ロ、シー、ル、ウ、エル、グ、ラン、グ、ド、ク)全土を擧げて其の支配權をデューク、ジョーンに與へ、以てボルボン家を自家藥籠中のものとなし、其の弟ヒアード、ピュー、ジョーに娶はすに王女アンを以てし、且つ其の庶子にフランス海軍提督の官を與へ、ホンフラウの陸軍司令官となしたり。此の他レネの子カラブリアのジョーンに金十二萬、リールを與へてアンジョウ家を掌握し、英吉利戰爭の勇者として知られたる老ダノイスを味方としてオウリエンス家を奪ひたるのみならず、終にボオールドの親友セント・ポル伯を擧げて陸軍總督となしたり。

かゝる形勢より察すれば、王に對してノルマンディを争ふものなかるべし、ポオルドは孤立となりたり、彼の力の大なるを以てするも單獨何事をかなし得ん。然れども彼は英王エドワード四世と同盟を結び、またブリタニイ侯をも援護者としたり。ブリタニイ侯また援を英人に求め、彼が領土内にある十二の城砦を任意に指定せしめて、其の信約の保證とし、他意なきを示したり。新に起りたる此の危険に對して、ルイはフランスの輿論に訴へたり。一千四百六十八年四月六日、王は國會をトアアスに召集し、彼等に告ぐるに、ノルマンディは王國領土の一部として繼續せざるも、彼等は之を首肯するや否やを以てしたり。國會は之れに答へて、法律によりて、王弟は一萬二千、リール<sup>リール</sup>の收入ある采地を以て満足せざるべからず、然るに王の寛量能く六萬リールを與へたれば、王に對して多大の感謝を拂はざるべからずと決議したり。ルイは此の決議を靡して、バルガンディ侯に致したりしに、侯は此の使者を苛酷に遇したり。其の間王はブリタニイ侯を壓迫し、攻撃の銳鋒を速め、強てアンセニスに於ける條約に屈從せしめたり、其の時バルガンディ侯はペロネエに於て兵を召集しつゝありしかば、ブリタニイ侯の救援に赴き得べかりしも、

時機後れて其の用をなさざりき。

かくて、王はブリトン人の難を脱し、且つその指揮の下には優勢なる軍隊を有し、精銳なる大砲を備へたるを以て、容赦なくバルガンディを壓倒することを得たりしならんも、ポーツマウス港に於て英國の軍隊及び艦隊の將に海を渡らんとするあり。加之エドワード王は國會に宣告するに、フランスに急ぎ南下すべきことを以てしたれば、王は全力を注ぎて之れが防禦を謀るに至れり、之が防禦の上策としては、再びポオルドに款を通じて結托するにあり。王は權謀を用ゐて自ら商議の衝に當らんことを冀ひ、ペロンネに赴きて侯と會見したり。王は敵地に身を投ずるの前安全の護衛を有したりしと雖も、此行は一大輕舉たりしを免れざりき、何となれば、當時の貴族等は概して言責を重んずるの風なく、就中侯は其の最も甚しきものなればなり。

バルガンディの境外にリイデ市あり、擾騷絶ゆることなく、常に不穩の地なりしかば、王は久しき以前より秘密探偵を此の地に入れ置きたり、リイデはホルボンのルイ僧正之を管理せるが、ポオルドの保護下にあるを以て、僧正に對する反逆はやが



てポオルドに對するの反逆なり。されば、ルイのペロンネに到る途中已に叛亂の  
 リイヂに破裂するあり、恰かもポオルドと會見商議の際に於て、リイヂの市民は僧  
 正を捕へて獄に投じ、且つ多くの僧侶を虐殺したるの報達せしかば、チャアルスは  
 大に忿怒し、此の叛亂を以て直ちに王の罪に歸し、捉へてペロンネ城に幽閉したり。  
 城はチャアルス・ゼ・シンブル幽囚の身を以て死せし處なり。ルイ忍ぶ能はざる屈  
 辱の條約を締結して漸く自由の身となることを得、ポオルドの侯弟にシャンペイ  
 ンの地を興ふることを約し、且つポオルドと共にリイヂ征討に赴くことを諾した  
 り。シャンペインはバリ城門の衝路に當り、バルガンディ人は一矢に血塗らずして  
 能く之れに入ることを得るの要所なり。不幸なるリイヂは、口に國王萬歳を叫び  
 つゝ戦ひしと雖も、遂に劫奪せらるゝ所となりたり(六千八百)。

ペロンネ條約はルイ十一世にもチャアルス・ゼ・ポオルドにも新計畫の實施に於  
 て甚だしく乖離する點を現じたり。第一、ルイは再び過失を繰返すの愚をなさ  
 ざらんとし、第二、チャアルスは更に遂げ難き企業の妄想を夢みるに至れり、詳言すれ  
 ば、ルイは既に幾多の欺瞞に陥りたれば、何人をも信ずることなく、何事にも小心に

して、縦令乗すべきの好機あるも輕舉事を起すことなきに反し、ポオルドは自己の  
 力を万能なりと信ずるを以て、眼中に希望の輝くあるのみなりしを以てなり。

### バルガンディ侯の死

ルイ十一世目下の急務は失ひし土地を恢復するにあ  
 り。王は侯弟チャアルスにバルカンディ侯の快諾によりてシャンペインに替ふる  
 にギエエネを興へたり。ブリタニイ侯は再び外國との同盟を破棄するの已むを  
 得ざるに至りたれば、王は侯をして益孤立の勢に置かんとし、侯の寵臣レスカンを  
 得、ロオハンにあるブリトンの勢家を味方となし、其の後プロイス家がブリタニイ  
 に於て掌握せんことを要求したる權利悉く王の掌中に歸し、カアディナル・ラ・パリュ  
 ー(カアディナル・ラ・パリュエ) (羅馬教の官位にして) 及びヴァーダンの二叛徒は十年間鐵籠中に屏息せられ  
 他の二叛徒なるネミユールス侯及びアルマグナック伯は降服したる後、前者は哀を  
 乞ひ、後者は家産を抛棄して王國を逃走せしを以て、王は其の財産を沒收したり。  
 之れと同時に、アンジョウのマルガレットと共に和親を結びたる貴族ヴァウイックに授  
 くるにポオルドの義兄英王エドワア四世を亡ぼすの策を以てしたり。

此の如く、王は再びポオルドと分離したるを以て、王は公然彼に向つて戦を挑み

たり。王は國會をトアアスに召集し、具さにポオルドの過失を開陳し、チャアルヌのなしたる反逆の行爲は、王をしてペロンネに於て締結したる條約の履行を脱せしめたるものなりとの決議を得たり。これに依りて、王はソムメ内のセント・クエンチン、ローエ、モントディ、デア等の諸邑を掠奪したり、此等は王の渴望せし地なりしに、また容易に之を奪ふことを得たりしなり。此時王は十萬の精兵を有したりしに、反し、侯は其の備だになかりき。

ブリタニイ、ギユエンネの二侯及び陸軍總督、警視總監セント・ポルは、王の勢力の急激増進せるに恐怖し、已に王に内應し居たりしが、曩に王子誕生ありしかば、ギユエンネ侯は遂に皇帝の儲位たること能はずとの自己の利益より、彼は他の諸侯と密に同盟を再興せんとしたり。ルイは功業の衰ふるを見るや、此の新同盟の組織しつゝあるを看破したりしと雖も、之を破壊するよりは寧ろ中止せしむるを以て策の得たるものなりと信じ、バルガンディ侯と休戦を約したり。これ最も當を得たるの措置なりき、何となれば、バルガンディの同盟者エドワアド四世は當時再びイギリス王位に登れるを以ての故なり。

かくて、再びルイは王權を拘束せんとする貴族等の桔梏を破碎せざるを得ざりき、これフランスの瓦解を救ひ得るや否やを解決するものなればなり。バルガンディ侯は、手は佛蘭西の安寧に就いて他の考ふる所よりも尙多く留意せり、そは當今の如く一王を得るよりも寧ろ六王を得んと欲すればなりと謂へり。ギユエンネ侯の宮廷はあらゆる叛徒の中心となりしのみか、一の新しき且つ勢力ある貴族となれり。バルガンディ侯は愛女メリーを侯に嫁せしむ、そは侯の領するアッキテーンの地を自家に結合せんと希望ありしを以てなり、此の地の廣大にして人口に富み且つ富有なることは、國王の及はざる所なりといふ。是に於てギユエンネ侯の勢力は最大の障礙となりて、國王の煩悶する所とはなりたり。

さはれ此の障礙はギユエンネ侯の逝去せしことによりて消滅したり。侯の死は毒殺なりしか。若しさなりとすれば、そは王の謀なりしか。此等の疑問は、歴史の解決すること能はざる所なり。縦令これに關せる王の罪惡は、懷疑の裡に葬らるゝとは雖も、王弟の病めるを知り、後其の死するを聞に及んで、甚だしき喜悅の情を泄せしことは掩ふべからざる事實なりと傳へらるればなり。此の珍變は、ポオ

ル下の全計畫を水泡に歸せしめたり。然れども彼は準備既に整ひたれば、ルイと締結したりし休戦の期間未だ盡きざるに拘はらず、ソムヌを横断して王國に進入し、鐵火を以て何物をも燼滅せずんば止まざらんとせり。此の戦たるや、殘忍酷虐の慘狀を現じ、ネスルの如きは、大寺院に避難したりし老若男女悉く屠殺せられたりといふ。

ビウヅイの住民は此の悲報に接して、警戒上大に利する所ありたり、一千四百七十二年六月廿七日、バルガンディの軍城壁に迫るや、住民等は花々敷も十一時間に亘る攻撃に堪へて城を死守したり。婦女すら立つて自ら防禦の任に當り、就中ジョン・ハッチェットと云へる一婦人は、兵士が壁上に樹てたるバルガンディの國旗を奪ひて之を裂きたりと。この義勇に恐怖して、侯は退却するの已むを得ざるに至りしかば、侯はセント・ヴァレリイ、ユウ及びニューフシャトウに火を放ちて復讐したりしと雖も、デペに於て敗れ、ルウエン城の壁下に陣營を張れり、這處は曾てブリタニイ侯と協議して屯兵所と定めたる所なり。侯は四日間駐屯せし後、フランス二世の破約を責めんが爲めに兵を率ゐて本土に歸れり。

フランス侯二世が其の營所に於て敗衄したりしと云へば、これルイが侯に對して酷烈の攻撃をなせしが故なるを知るべし。實に然り、ルイはラゲルク、マケコール、アンセニス、及びシャントリスを攻めて、侯の手より之を奪ひ、戰捷によりて侯を威嚇したる後、利益の平和を申込みたり。十月十八日、侯は之に批准を與へ、昨日までは抑制し難かりしチャアルス、ゼボオールドもまた自らセンリスの休戦を諾するに至りたり。

かく、ペロンネ條約は佛王の屈辱なりと思惟せられたりしも、今は無効の空文となり、ルイ十一世の眼中に映ぜるリイヂの耻辱は、ビウウエーに於けるバルガンディの耻辱と相償ふことを得たり。而して王はかく逆境を變じて順境となし、計策悉く的中し、富は益増殖し、困難愈減少したるに至りしかば、今後また何事か成就せざらん。富は王の經營宜しきを得て愈増加し、困難はボオールドが無謀の企圖を實現せしめんとする計畫却て之を消滅するの基となりて、反つて王に幸したり。

バルガンディ侯が眼をセルマン、ロウレン、スウッツルに向つて注ぎしは、一千四百七十二年頃よりにて、佛國に關する事件は單に侯が第二位の要件に過ぎざりき。シ

ギスマンドと呼ぶアウスタリアの一貴族は、既に上部アルサスの采邑及びフレットの郡を以て侯に質入れしたりしのみならず、尙侯は、ゲルダールランド及びツツェンの郡を買収せり(六千九百年)。侯の版圖のミューズ及びライン一帯の地に擴大したるを見るや、侯は曩にロセアー王の領土として定められたる諸邑を再び結合して、ベルチアン・ゴールの名稱の下に新王國を創立せんと、の空想に驅られたりと雖も、侯の版圖はシャンペイン、アルサス、及びロウレンスを結合せざるが故に、二に區劃せられ居たり。侯はアルサスを有すれども、シャンペインは曩に之を失へり、ロウレンスは容易に之を取ることを得べく、スウキツルは後日自ら來り、プロヴェンスもまた次で至らん、ロザリンキアの如きは容易に再び之を結合し得べしと思へり。此の如く、侯は一念必らず達せらるべしと思惟し、必要に應じて企畫せることは何事も必らず成就すべしと信ぜり。遂に侯は皇帝に王名を要求したり(七千四百三十九年)、ルイは侯が計畫せる凡ての企畫の成功を妨害したり。

此の方面に於て侯は失敗したり、剩つさへ他方に於ては、ロオレン侯レネ二世、シギスマンド大公爵、ライン河畔の諸市、スウキツル人及び不俱戴天の讎敵佛王ルイ

との間に一同盟の成らんとしつゝあるを看破したり。當時ライン河畔の諸市は侯の暴威に恐怖し、スウキツル人はアルサスまた侯の代官ヘーゲンバックの苛酷の收歛に苦められ、其の商業大に打撃を蒙りつゝあるに乘じ、佛王此の同盟の教唆者となりて、バルガンディ邦國を同盟の網を以て圍み、バルガンディは四面楚歌の觀ありき。突然大公爵はアルサス贖償金として約定したる十万フロリンを侯に齎し來りて、侯の羈絆を脱し、ヘーゲンバックはブリサックの住民に捉へられて斬首せられたり(千四百七十四年)。侯は此の報を得るや、スウキツル人の嚴肅なる反抗を蒙りたり、彼等はフランテ・コムテに進入し、ヘリコートの激戦にバルカンディ軍を敗れり。此の事たるや、侯が法王、皇帝及び其の臣下に反して、コロンの大僧正を助くるの交戦中に起れり。侯はコロンの大僧正のために、ニユースの小市を包圍せしが、市民能く戦ひ、防戦十一ヶ月の久しきに亘れり。侯は變に接しながら、應援の時と力とを失ふの危機に際し、恰かもよし、義兄にして同盟者なる英王エドワード四世は、カライスに上陸したり。

エドワードは瞬間にして顯著なる戦捷を得べく豫期したりしに、彼の希望は内

地に進むこと幾何もならずして消滅するに至れり。そはバルガンディ諸市にして門を開きて侯の同盟軍を迎ふるものなく、兵士また來りて英軍に合するものなかりしかば、英軍は身を容るゝの營所さへもあらず。エドワードは僅にセント・ケンチンに入ることを得たりと雖も、砲撃を免れざりし、此の地はチャアルス・ゼ・ポオルドの秘密同盟者なるセント・ポルの支配地なり。エドワードは失敗の極大に忿怒し、ルイの申込み來りし利益ある條件を速かに諾するに至れり。ペキイグニの平和により、二王は相互の叛逆者に對して相救援すべきことを約し、エドワードは之に加ふるに現金七万五千「クラウン」を受け、なほ五万「クラウン」の年金を得たり(一千四百七十五年八月二十九日)。

ポオルドもまた平和を講ずるの必要を認めたり。翌九月、佛王とソレアーの條約を批准し、侯はロオレン及びスウキツルに關する種々の企畫をして局を結びたり。然れども、侯が十一月三十日ロウレンのナンシーに進入せしは事實なり。ロウレンのレネを教唆して戦はしめしは、佛王之が率先者たりしも、今は之を放棄して顧みざれば、侯のために敗つ所となれり。スウキツル人は、フランチ・コムテ

火を放ち、到る所劫掠を逞ふせしかば、侯は直ちに之に向へり。一万八千の兵を率ゐ、嚴寒を冒して彼等を攻撃したりしと雖も、侯の兵は曩に二回の戦争に疲勞して英氣を養ふの暇なかりしかば、一千四百七十六年三月、グランソンの戦に侯軍大敗し、其の後三月にしてモラットの役に再び敗走したり。

此の報に接して、ロオレンは起つて再び幼侯レネ・ド・ヴァーデモントを迎へたり、此の最後の對抗は、ポオルドをして沈思するの暇あらしめず、急に六千の傭兵を編成して、ナンシーに突進せり。然れどもレネはルイ十一世より軍資を附したる兵を得、彼がモラットの役に援助したるスウキツル人また來つて救援したり。ポオルドは退軍を欲せず、雲霞の如き敵の大軍を迎へたりしが、數時間にしてバルガンディ軍は敗績し、遂に西フランスの大侯チャアルス・ゼ・ポオルドも死者と列を等うして枕を並ぶるの非運に遭遇しぬ(一千七百四十七年)。

大諸侯の衰亡、ルイ十一世の死(一千三百四十八年)

チャアルス・ゼ・ポオルドが、ゼ

ルマン人、ロオレン人及びスウキツル人に對して各地に奔命せし間に、ルイ十一世は屢叛逆者を平定するの餘裕を得たるは偶然の僥倖なりき。かゝる困難の事情

を裁定すべき第一のものをアレクサンダー侯の所刑なりとす。侯はルイ七世在世中、死罪の宣告を受け居りしを、ルイ十一世に依て赦されたり、然るに侯は出訴者を暗殺し、貨幣を贋造し、王に對する陰謀に與みしければ、一千四百七十三年王彼を捕捉し、次で翌年重罪を以て彼の行爲を問ひ、終身囹圄に幽閉したり。侯は一子を遺して世を去りしが、父の財産を横領せし輩は、幼子もまた反逆の陰謀に連累せりとなし、居城を擧げて王に返納し、以て赦免を哀願し、且つ永久幽囚の身たるべしと宣言したり(一千四百一十八年)。

アルマグナック伯に對しては最も重大なる別種の訴狀ありたり、伯は彼の恐るべきジョン五世のことなり。彼は曩に妹イザベラと結婚を約し居たりしが、當時の法律は血族結婚を許さざりしを之を顧みず、僧侶を強て婚儀を司らしめ、若し故障を挟む者あるときは河中に投せんと脅嚇したりき。國會は伯の捕縛を決議し、チャアルス七世の代に血族結婚、虐殺者及び贋造者の罪科に問はれたりしも、伯は逃走したり。ルイ十一世登位の初に當り、其の施政の一としては、彼に舊封土を返戻するに在りしが、恐るべき彼は、此の恩典に接しながら感謝の意を表彰することな

く、却て王の仇敵と絶へず交通したり。後カアディナル・ド・アルビー軍を率ひてレクトルを圍みしや、市は能く抗抵し、協商次で起れり。然るに其の協商中カアディナルは市の一城門を奪ひ、アルマグナック伯ジョン五世は妻の面前に刺されたり、妻は毒死したり。此の時レクトルの全市民中生存したるもの僅かに男三人及び女四人のみなりしといふ。

アルマグナック家にはネモアス侯の分家住めり、其の宗家は王より財寶爵位を授かりたるも、十度王に叛きしことあり。バルガンディ人及びイギリス人の牽制を受けることなく、ルイは兵を以て之を圍み、居城カアラトに於てネモアス侯を生擒し、之をピアル・エンサイス城に幽閉したり、城は物凄き牢獄にして、囚虜の髪は、數日の間に白色に變ずとさへ傳へらる。其の後王は侯をバステイルに護送し、鎖を附して鐵籠中に置き、拷問の時のみ出つることを許したり、其の拷問たるや最も慘酷の呵責を極め、以て其の罪を白狀せしめんとしたるなり。ネモアスは遂に死刑の宣告を受け、市場に於て斬首せられたり。此の他アルマグナックの領主ジョン五世の弟及び勢力あるド・アルブレット家の一員は兩者共に王に對して反逆の罪人なりし

が前者は擒はれ、後者は斬首せられたり。此等の嚴刑は、南フランスに於ける反服常なき諸侯に對して、法律と王に向つて服従すべきことの教訓としては著るべき効果を結びたり。

アラゴン王はレイ十一世にルウシロンを擔保として二十万クラウンを借入れしも、これを支拂ふの意なく、却つて其の地を恢復せんと欲し、竊かに土民を煽動して佛人に對する敵愾心を鼓舞したり。一千四百七十四年、レイ十一世は、優勢の軍を遣はして此の陰謀を杜絶し、包圍八ヶ月の後バカビグナンを掠奪せしも、當時市民の能く久しき包圍に堪へたるは實に賞讃に値すべきものありとす。傳ふる所によれば、一婦女は、其の子を養ふに餓死者の肉を以てしたりといふ。

北フランスに於てもまた懲罪すべき一人あり、そはネモアスのジャッケスと同じく、レイ十一世の昵近者にてありき。王は此者に陸軍總督の官名を與へ、王國の干城たるべきフランスの劔を依托したりしなり(アラブの劔とは、陸軍總督の印授け之を)。そは實にセント・ポル伯爵をいふなり。彼はイギリス、フランス及びバルガンディを巧みに操縦して、一獨立王國を創設し、自ら之に王たらんとの野心を固め

たりき。之を成就せんがためには唯一の手段として、十年間苦心慘憺に堪へたり、其の手段は陽にイギリス人に左袒して陰に之を陥れ、順次此の奸計をフランス人又はバルガンディ人にも施し、が彼が各方面に送りたる密書は何時しか各王の間に交換せられて奸策の暴露せるに彼は氣付かざりき。レイ王いかでか此の仇怨を等閑視すべき、直ちに兵を率ゐて之を攻む、佛軍の近くや、總督はモンズに逃竄せり。王は書を彼に送りて、安んじて歸來の旨を致せり。王の書中、余は大に苦めり、卿の如き頭腦を要すること最も切なりとの文字を以てしたりしが、參朝の群臣、此の意を誤解せんことを慮り、彼等の面前に於て、更に余の願ふ所は單に頭腦なり、軀の如きは、何れに置くも可なりとの數語を附加へたり。バルガンディ侯は總督と絶縁したれば、一千四百七十五年、ブリース・ド・グレンサに於て遂に斬首せられぬ。

然れども以上諸侯の死に就き、王に取りて最も幸運なるは、ポオルドの訃音なりとす。彼の死は實に封建政治の死なりしなり。コミンス叫んで曰く、爾後決してフランス王は現はれずと、コミンスは、王臣なれども、氣宇剛放にして王威に畏縮せしことなく、或は王意に逆ひて苦言を呈したる人なりしと。ポオルドの遺子は一

女メリーのみ、王はその遺子及び遺産を奪はんとせり。彼は當年八歳の皇子と二十歳のメリーとをして婚儀を結ばしめんと、の計策を按出し、不釣合にも意を留むることなく、種々の口實を弄し、聳引出としてバルガンディ、ピカアディ及びアルトイスを奪へり。メリーは王の誑かす所となり、フレミングに一書を送りしより、二人の顧問ヒューゴネット及びハムバーユウトの死を起したれば、身を以てアウスタリアの軍に逃れたり。メリーはマキシミアン大公爵と婚儀を約したり、こは實に不祥の結婚にして、是より狂暴の勢力を振ひしチャアルス五世を生みしのみならず、フランス及びアウスタリア兩朝に於て、二世紀に亘る争擾の發端とはなれり。爾後記するに足るべき戦は、一千四百七十九年佛軍の敗れたるキネゲエトの一戦のみなり。ルイは王領に加ふるに、バルガンディ、ピカアディ及びブウロンの地を併せ、確固結合するの功業を收めたるのみならず、一千四百八十二年アラスの條約に基き、皇子と婚儀を約したるマキシミアンの女の餽送物としてアルトイス及びフランテ・コムテの讓與をも受けたり。

此の條約こそ實に王の全盛を致せしものにして、爾來王位鞏固威勢隆々たるも

のありしが、人は不死のものにあらず、王永久に之を見る能はざりき。王はプレシス・レトアリスの城に籠居し、悔恨と迷信とに驅られて心神を惱亂せしめ、永く病床に煩悶したり。僧フランシスコ・ド・ハオロをカラビアより迎へ、祈禱によりて長壽ならんことを冀ひ、或はサルタン・バイエチッドをしてコンスタンチノオブルにある聖骨を悉く送らしめたれども、あらゆる醫藥、祈禱、命數の願望一も効を奏せず。侍醫コイッターは五月間に五万クラウンの報酬を王に強請して受け居たりしが、遂に王に語るに、死の旦夕に迫れるを以てしければ、王は位を退き、アムボアス城にありし王子を召還して臨終の誠言を與へたり。罪業如何に深かりし王も、臨終の言は實に卓絶せる箴言にして、即ち善に扮することを知らざるものは、統治の道を解せざるべしとの有名なるものなりき。王は一千四百八十三年八月三十日を以て病歿したり。將に來らんとする新時代の二偉人ルウサー及びラペレーは實に該の年に於て生れたるなり。

ルイ十一世が二十年の經營後に於ける形勢を察するに、バルガンディ家は、權勢漸く衰へ、侯は事を起すの力なく、其の國境には殺氣ある無數の民衆あり、スペインは



王と和を結びて常に其の武力に畏怖し、英は國力衰ふるのみならず、屢々内訌に苦められ、スコットランドは全然王の有に在り、セルマンに於ける多くの同盟及びスウキツルは従順なること王の臣僕の如かりき。バルガンディより得たる四州侯爵封邑を含めるカロライス、アキセア及びブウロンの地方を含めるアルトイスとピカアデに加ふるに、遺言によりてメイン、プロヴェンス及びアンジヨウをも併有したり。またアレンソン及びバーケの地を領し、王弟ギユトーエネ侯の歿後其の土を合せ、スペイン、ルウシロン及びサーダン事件に關與して、セント・ポル、ネモアス及びアルマグナックの死刑より生じたる利益を算加せざるも、王領土に加ふるに十一州を以てしたり。王はまた驛馬の制を創設し、定期市場及び公共市場を増置し、商工業を奨励し、且つ佛國に印刷業を誘致したるは王を以て嚆矢とす。

當時の史家王を評して、王は行爲の善惡二つながら顯著なりしが、之を秤量するに一として王者たるの資ならざるはなしといへり。フランスは王に負ふ所頗る多し、然れども、凡そあらゆる手段は皆以て有益なる目的を達するにありとすれば、王の執れる手段の數々はまさに責むべきものなきにあらず、されば佛國民は王の

罪過を赦す能はざることなきにあらざるなり。

イタリイ遠征に至るチャアルス八世　ルイ十一世の皇子は年齒漸く十三歳二ヶ月の若年のみか、心身共に虚弱なれば、久しく攝政保護の下にありたり。皇子の保護者は其の姉ビージョウ家のアンにして、父王十一世常に誇りて、世界の中稀に見るの賢女なりといへりし程資性賢明にして、父王の英資のみを享け、毫も其の惡質を遺傳せざる王女なり。王の歿後暴烈なる反動は先王の政策に逆つて破裂し、大臣中最も軟派なりしオリヴァー・ゼ・デヴェル、ダニエル及びジョン・ドゥヤアは、之れが犠牲となれり。尙貴族等はルイ十一世の定めたる主要の法律を無効となすも止まざるの希望を以て國會召集を要求したり。

會議は開かれたり、然れども市民の代表者等は徒らに諸侯忿争の具となるを歡ばざるものゝ如く、豪放過激の議論百出し、就中ローチ卿の君主の義務及び人民の權利に關する論議は、今猶人の驚きを以て讀む所なり。會議はビージョウ家のアンを王の攝政者となし、全權を依托したりしかば、アンは王に代つて非常の勢力を振ひたり、王長じて成年に達せしと雖も、依然全權は攝政の掌中に委ねられたり。

内閣會議を創設し、王位不定中はオーレン侯之れが首長となり、侯の缺席せしときは、ポルボン侯或は、ビュージュウ卿其の席に就けり、攝政アンは遂に指名せられざりき。之に反してオーレン侯は明かに政府の首長に居り、自身其の實權を握れりと思惟したり。然れども攝政アンは王を己の意に従はしめ、且つ畏服せしめ居たりしかば、王を強て會議の首長たらしめ、オーレン侯を其後に控着せしめたり、又夫ビュージュウ卿をして之れが首長たらしめ、上位にありなから卿(Lord)の下に立つを快しとせざるアレンソン侯、アンゴウレム侯、其の他同族の貴族等の位置を奪ひて議會より追放したり。かく女性政府を組織して、ルイ十一世の確固にして權力ある政略を持続せんとするには何人も氣付かざりしなり。

オーレン侯は己の勢力衰へたるを見るや、私に陰謀を計畫したり、此の計畫に對して、アンは巧に之を平定したりしは、ルイ十一世の王女たるに耻ず。アンは命じて侯を捉らへしめんとせり、侯まさしに擒はれんとするや、馬に鞭打ちて逃れ、漸く免かるゝことを得て内亂を起せり。彼はブリタニイ侯フランス二世を味方となし、アラス條約の批准を悔みしマキシミアンと同盟を結び、尙英王リチャード三

世の援助を懇請したり。アンは侯の企圖する凡ての計畫を防遏したり。リチャード三世の敵なるリッチモンドのヘンリーに兵士糧食を給し、リチャードを牽制して國を出てざらしめ、マキシミアンに對しては、フランダースと和議を結び、ブリタニイ侯に對しては、フランス二世の相ランダイに憚焉たらざる國內の貴族等と同盟を締結したり、ランダイは擒はれて絞殺せられたり。ラトレモイルは直ちに進んで、オーレン侯をポウゲンシーに圍み、強て宮廷に連れ歸らしめ、爾後全く隱居的生涯を送るべきことを誓はしめたり。

然るに數月の後皇帝の後嗣にしてロオマ王と呼ばれたるマキシミアンはアラスの條約を破棄し、貴族同盟再興したり、此の同盟は二十年前に成立したる公安同盟と其の性を同ふせり。さはれアンは深謀ある、ルイ十一世の過失を再び繰返さざりき。ド・エスカリデスがアルトイスに於てマキシミアンを扼し、セント・オマル及びテロウアンを奪へる間に、アンは華麗なる武装して馬乗するを好める幼主をして英氣滿々たるを軍隊を率ゐしめ、進んで南方の同盟軍に向はしめたり。進む所の市民は悉く領主に叛き、其の城砦を逆襲せしかば、數日にして南方の事件

全く平定しぬ。アンは更にブリタニイ侯に對して攻撃を初めたり。ラトレモイ  
ルは一千四百八十八年四月、佛軍を率ゐて侯の領土に進入し、シャトウブリアント、  
アンセニス及びフォーゲレスを占領し、七月二十七日、セント・アッピンド・ドルミアーに  
ブリタニイ軍を敗れり。フレミングスはマキシミアンに反し、彼の率ゆるセル  
マン軍を國外に驅逐し、而して一千四百八十二年のアラス條約に基き、一の新協商  
を諾するの已むを得ざるに至らしめたり。かく、ビュージョウ家のアンはあらゆる  
同盟を破り、父王の勝利を維持したるのみならず、一大州を之に加ふるを得たり。

ブリタニイ侯フランシス二世は此の時既に死して、一幼女を遺せり。ブリタニ  
イの地たるや、王國の西方を圍繞する要害の地なれば、之を他の有たらしむるに忍  
びず、アンは百方手段寧ろ暴威を逞ふして、王と幼女侯との間に婚儀を結ばしめん  
とはなしたり。女侯之を聽かざりしかば、王チャアルス八世は自ら武装し、進んで  
女侯及び其の領土を伐てり。ブリタニイのアンは、レンネに於て圍まれ、且つ許嫁  
の約あるマキシミアンの棄つる所となり、遂にチャアルス八世との婚儀を諾し  
たり(千四百九十年)。

チャアルス八世は、王權を掌握し、全く獨立の君主となりて、より、地方に割據せる  
諸侯の首魁は自らフランス國內に屏息し、偶、叛逆の徒密かに王に逆らつて叛旗を  
翻さんと欲するあるも、身を容るゝの餘地なきに至らしめたり。是に於てフラン  
スの王權全く其の基礎を鞏固にして、また動かすべからざるものとはなれり。

### 第三章

#### イギリス

一千四百五十年—  
一千五百〇九年—

十五世紀中葉のイギリス フランスに於ける如く、イギリスもまた貴族  
の勢力は王政の發展を阻害せるあり。然れども佛國にては人民王に黨して、封建  
の諸侯に敵せしが、英國は然らず、人民却つて貴族と同盟して王に對峙し、ジョン王  
の代よりマグナ・カルタ(Magna Charta)に於て國民の權利を承認し、且つ之を布告する  
の已むを得ざるに至らしめたり。約二世紀の間上下兩院よりなれる國會は租稅  
を撰定し、其の種目を制定し、稅額を制限し、且つ支途監督の權利を享有せしかば、王  
は國會の協賛を得ずして厘毛たりとも之を得ること能はず。國會はまた王位の  
繼承及び統御權に關する問題を解決し、而して之れを満足したりしかば、始めて投

票を以て保護金を制定したり。朝廷は議員たる個人に對して一大勢力を有せしと雖も、此の大團體は英國國民自由の嚴正なる保護者にして、國家主權の二要素の一たるを失はざりしなり、即ち國會の協賛に依り、凡ての新法律は制定せらるべきものなればなり。

人民の生命と自由は政府代表者の權力の濫用或は過失に對して保護せられたり。マジストレエトの命なくして猥りに人を捕縛又は監禁すること能はず、また其の裁判は同位のものに限れり、即ち貴族は上院、他の市民は罪科を生じたる地方の公會に列する陪審官合意の裁決を與ふるものにして、之れに對しては控訴の權なし、これ英國に於て一般に實行せらるる所の原則なり。しかも仲裁々判の場合一二ありしは疑ひなきことなれども、大審院としてはあらざりき。されば法律に規定すること能はざる權利の濫用一時大に生じ、遂に王臣は自個の權利を濫用したれば、縱令檢舉せらるることありしとは雖も、巧みに王に哀願して辨疏を乞ふの惡習を生じ、如何に彈劾するも遂に何等の効を奏するものなく、非常なる弊害をば醸成するに至りぬ。

單に憲政のみによれば、英國は當時既に列國に卓絶進歩したるの觀あり。然れども、工業不振、商業未だ發達せず、凡て物質上の利益は、政治の程度に及ばず、之れに加ふるに、人民の慣習は疎暴に流れ、上下皆暴戾苛酷の天性に驅られ、百年戦争に依りて其の頂點に達したり。フランスとの戦争に現じたる暴虐は、再び内亂に向つて其の勢を逞うするに至りぬ。

ロオズ(薔薇)戦争 此の内亂はヨオク及びランカスター兩家即ち赤白花兩(Rose)黨の對時に起因す。

クレッシン、ポイチー及びアリンゴートの勝利は愛國的無限の榮譽心を英國國民に鼓吹したり、而して此の榮譽心はかゝる大功績を奏せしめ、且つ國民の著しき特性となりぬ。當時ランカスター家のヘンリー六世は無勢力にして、國民の榮譽心を鎮撫すること能はず、且つアアクのジョアン現はれ、ベッドフォード侯死してよりフランスに於ける敗報日に到り、ために頗ぶる非難を蒙るに至れり。凶報大陸より來る毎に、國民の騷擾は大臣に對して起れり、第一はマンスなりしが、サップルク之を降し、次にルーエン起りしかど、遂に城門を開きて降り、次はフアミグニイの激戰に

して、英軍敗績し、次はポルドウの役にして、デューノイス勝利を獲て城門に突入したる。かく騒亂不斷の時に當り、リチャード二世廢位の後、久しく政府の奪ふ所となりし王位は、ヨオク侯リチャード正統の承繼者たること、國民悉く記憶する所にして、侯の母はエドワード三世の第二子より出て、父は第四子より出づ。ヘンリー六世はエドワード四世の第三子より出てたるに過ぎず。然れどもランカスター家の王位相續は國民の撰定せし所なれば、勢力甚だ強く、六十年の間他に之を窺ふものなく、且つヨオク侯自ら誠實の誓言をなしたり。ヘンリー六世は外戚の祖父チャールス六世の性を享け、心力懦弱にして無能の墮落漢なりしも、ヘンリーの妃アンジョウのマルガレット單獨國民の憤怨に對して巍然たるものあり。マルガレットは其の血統フランスなるを以て、英國國民の疑ふ所となりしが、有名なるヘンリー五世の毎にフランスに敵意を挾めるを、國民却て良侯爵と稱賛するを憎み、一千四百四十七年之を擒へて獄に投じ、二日の後斬に處し、又弟グロウセスタア侯の虐殺ありたる後、益怨を買ふに至れり。大陸の戰不利なる以て、マルガレットに對する國民の

怨恨愈増進し、英國國民の不幸は悉く女王の責に在りとなせり。加之女王入輿の時、餽送物を齎し來るべきに、却てアンジョウ及びメーンに駐屯せる英軍を轍回せしめたるは、深く國民の憤ふる所なりしなり。ヨオク侯は此の機に乗じ、先づ下院を煽動して、寵臣サッフオルク侯の罪を問ひ、審判の終るまでは一切保護金の支拂を拒絶せしめたり。王はサッフオルクを死刑宣告より救はんがため、五ヶ年の流罪に處したり。侯の出獄するや、二千の人民は力を盡して之を捕へんとしたるも、漸く逃れてイブヌウッチ港に達するを得、直ちに出帆したり、既にして英國海軍の最大艦ニコラス・オヴタワ一號の驅逐し來るを見て、侯は自己の安全なることを知れり。侯は艦長の命により、タワ一號に乗艦し甲板に現るゝや、艦長侯を歓迎して大に敬意を表したりしが、刹那に光景を變じて、翌日不幸なる侯は、群集せる水夫の面前に於て輕侮の審問を受け、豫て艦側に繋げる斬首臺、鑄刀及び死刑執行人を搭載したる小艇に移され、執行人の揚ぐる六回の刃の下に斬首せられたり、此の慘刑の血未だ乾かざるに既に第二の悲劇は生ぜんとしつゝありたり。

ヨオクのモルチマアは一千四百四十五年斬首せられたりしが、當時アイルラン

ド人ジャック・ケエドなる者、自らヨオクの君主なりと唱へ、モルチマア死刑の當時執行人の手より逃かれたりと稱し、直ちにケントの地に起れり。彼は六万の衆を擁して數日間ロンドンの主となりたりしと雖も、兵に規律なく、到る處掠奪を擅にせしかば、市民は防護の爲め武装したりき。然るにケエドの頭には賞の懸るありて、遂に陥井に落入り、殺害さるゝ所となれり。

ケエドの成功の容易はやがてランカスター黨の微弱を明にせしかば、ヨオクのリチャアドは小軍を率ゐて、自らロンドンの城門に現はれ、サッフォルクを恢復したりしノーマーセット侯をタワー(ロンドンの大牢獄)に投獄すべきことを要求したり。一千四百五十三年王子誕生したりければ、リチャアドは、日頃の計畫を棄るに忍びず、王の發狂せる間に、自ら保護者の任にありしが、王病癒へしより、侯の職を褫奪したり。是に於て侯は大貴族等の援助を得て公然兵を擧ぐ、貴族中殊にワアウックは富有にして材幹あり、且つ豪毅の性を有し、君王制定者との稱を得、アール・オヴ・サリズバリーの子にして、英國の名家ネヅエル家に屬せり。彼の領土に於ては毎日三万人を扶持し、またロンドンの邸宅に在りて、彼の臣下及び知人を饗應せるときは一

食事毎に牛六頭を屠れりといへる程の富豪なり。一千四百五十五年、リチャアドはハアトフォードにあるセント・アルバンスに於て勝利を獲、再び貴族等の認容せし保護者の稱號を得たり。かくして彼は政府に權威の基礎を固めしとは雖も、王冠は依然ヘンリー六世の頭上に在りたり。

一千四百五十六年、ヘンリーは宿痼全く癒へたるを以て、王權を執行するに至り、ヨオク侯は快く之れに同意を表したり。侯は只管活動の乗ずべき好機の到るを待てり。機會は一千四百六十年、實にセント・アルバンスの日より五年の後、ノルザムプトンに於て第二の戦役となりて起れり。交戦に先ち、ヨオク黨は令を傳へて敵の兵士を助け、士官は悉く殺すべきを命じたり。リチャアドは再び大勝を獲しかば、國會は宣告して、侯を正當の王位繼承者となしたり、然れどもヘンリー六世尙未だ王位に即けり。

マルガレットは皇儲の名を以て此の宣告を拒み、兵を擧げてパーウック堡砦を割讓して、スコットランドより援助を得、二十万の兵を召集したり。リチャアドは五千の兵を率ひマルガレットと戦ふべく進軍したりしが、戦敗れて、ヨオクのウエイクフ

ールドに於て斬れたり。マルガレットはヨオクの城壁にリチャアドの首を曝し、之れに紙製の王冠を戴かしめて侮辱を興へたり。侯の末子ラットランドは齡漸く八歳なりしも、戦勝の後殘酷に屠殺せられたり。これより先ラットランドは難を避けて逃走しつゝありしが、ウエークフィールド橋上に於てクリッフォード卿の支ゆる所となり、クリッフォールド之を誰何せしに、幼兒は恐怖の餘り踞さしかど、同伴の兵は其の名を尋ぬるは、幼兒の一命を救ふものなりと思惟し、告ぐるに實を以てしたりしかば、クリッフォードは叫んで、汝の父は予が父を殺せり、予また汝及び汝の一家を殺すことを希へりとして斬りたりと。續いて多くの虐殺行はれしかば、却つて殘忍の復讐を挑發したり。暴虐殘忍の争騒起り、捕虜の虐殺、被征服者の追放及び其の財産の沒收は、敵と味方とを問はず常規となれり、されば軍隊は到る所死刑執行人を隨へざるはなかりき。

リチャアドの憤憤を雪ぐものは實に侯の長子なり、此の復讐者は衆の擁する所となりてロンドンに自立し、國會はエドワアド四世として、ロンドンに王たることを公布したり。初めエドワアドは、ワァーウキック戰を失し、セントアルバンスの第二

戰に敗れたりと雖も、其の後二ヶ月を経て、ヨオクの西南トウトンの激戰に於てラシカスタア軍を蹂躪したり。戰場にありし三万六千餘の内、二萬八千の兵は皆赤薔薇を徽章として着けたり。マルガレットはスコットランドに逃れ、次でフランスに走り、カライスを返付するの約を結びて、ルイ十一世の兵二千を借りたり。ノルザムバールランドに於てヘキスハム・オン・タインの役は、再びマルガレットの望を絶てり、女王は幼兒を伴ひてあまたたゞの困難に遭遇し、漸く逃れてフランスに歸りたれども、三度捕虜の身となりたるヘンリー六世はロンドンのタワーに禁錮せられ、七年の星霜を此處に送りたり(一千三百六十四年)。

エドワアド四世の王冠は其の頭上に不動のものとなれり。然れども、無官の紳縉の女エリザベス・ウッドヴィルとの結婚は王弟クラレン侯の不快を購いしが、王はウエールスの王子を繼承者とし、侯の官位を剝奪して之れに興へたり。剛腹にして勢家なるネヴイルはエリザベス一門の劇かに榮ゆるを憤り、就中ワァーウキックが王の大使として、ルイ十一世の義妹を迎へんがためフランスに遣はされたる厚遇を恨むこと甚だし。ワァーウキック及びクラレンは相結んで忿恨を報ひんとしたりし

が、計畫水泡に歸し、フランスに遁るゝの已むを得ざるに至りたり、されば仇敵たる女王マルガレット及び其の部下と同一の境遇に身を處することとはなれり。ルイ十一世は會々バルガンディの同盟を苦めんとする際なれば、彼等の來れるを大に悦び、百方兩者の意志を調停し、兩者もまた各自の不幸に鑑み、遂に相和し固く結んで共敵を破るの志を強め、ワーウヰックはランカスター家恢復を約して英國に歸れり。彼の英國に着くや、臣僕及び舊友等は武装して之を迎へ、赤薇薔の黨類は彼の周圍に蟄集し、日ならずして六萬人を得たり。王はトレントに近きノッチングハムに至りしに、從者皆王を棄て、遁走せしかば、戰ふこと能はず、バルガンディの義弟カスタールスに身を投ぜんとてネザラランドに出奔しき。是に於て從順なる國會は勢力ある一黨の願を容れて、ヘンリー六世の位を復したり。

ランカスターの戰捷は夢の如く東の間なりき。後數月バルガンディの援助により、エドワードは小軍を率ひて再び起れり。クラレン約に反きてエドワードに歸せしかば、ワーウヰックはロンドンを距る四リドグの地バーネットに於て敗績せり。抑制し難きマルガレットは新勢を率ゐてフランスより到着せしかど、クロオセスタ

の地なるチエイクスバリーに於て戰利あらず(一千四百七十五年五月七)、こは最後の戰にして最も激烈なりき。ウエールス公は王の目前に殺され、ヘンリーは數日の後牢の裡に暗殺せられ、マルガレットはタワーに禁錮せられ、赤薇薔の黨類は死罪または追放せられて、エドワードは難なく王位に上れり、然れども王は唯憂々自適遊樂に耽るのみなりき。

遇、チャールス・セ・ポオルドの懇請に會ひ、一千四百七十五年、王は淫逸の夢より覺めて、ルイ十一世を伐んが爲め遠征の途に上れり、こはペキグニーの條約に終れり。王の晩年は、弟クラレン侯の審問ありて騷擾したりしが、王は侯を斬に處したり。爾後只管淫行の犠牲となりて崩殂せり、歳漸く四十二、早世といふべし(一千四百八十三年)。

エドワード四世は其の一家及び重なる黨與と永く相結托すべさことを懇請して死せり。彼は崩殂の後まさに無數の悲惨起るべしとの杞憂を抱きしなるべし、實に其の子エドワード五世は在位僅かに三ヶ月にして死せり。

エドワード四世の第三弟にして、偽善酷薄の怪物なるクラスター侯リチャードは、久しく王位を渴望したりき。甥エドワード五世の幼なるに乗じて王位を褫奪



し反抗せる伯父リチャード、サーリチャード、グレイ及びヘスチングス卿を殺戮し、正當の王系なりと主張したりしが、遂に醜名高きタイレルのために、弟と共にロンドンのタワーに壓殺せられたり。不幸なる二人の死躰を牢獄の階下に隠匿して、リチャード三世登極を宣言したり。

此の篡奪はヨオク黨を動搖せしめ、且つランカスター黨の勇氣を鼓舞したり。リチャードの即位について最も力を竭したる一人、バッキンガムは王に向つて或る緊急の要求をなしたりしが、王の聽かざりしを恨み、反つて反抗し、ランカスター家の外戚に傍系を有せるウエールスのリッチモンドの貴族ヘンリー・チユウダアを呼んで味方となせり。ヘンリーはブリタニーに於て兵二千を徵集し、ウエールスに上陸したりしが、時後れしかば、バッキンガムは壓殺せられたり。ヘンリーは遂にリイセスター及びコヴェントリーの間にあるボスウオースに於てリチャードを征服し、リチャードは非常の豪勇なりしも、遂に戦死したり（一千四百八十五年）。此の戦は十大役の最後のものなりとす。ランカスター黨は六度利を失ひしと雖も、最終の名譽と利益とは彼等の有に歸したり。

ヘンリーは自立して英王となり、ヨオク家の女王嗣エドワード四世の女エリザベスと結婚して、兩薔薇黨を結合したり。王の代よりしてチユウダア朝興起し、一千六百三年、ステューアートの降服に至るまで百十八年の治世を續けたり。

かゝる政略上の結婚ありしに拘らず、ランカスター黨は何事に於ても先取權を掌握し、跋扈跳梁至らざるなかりしかば、ヘンリーはヨオク黨の忿を挑發するに至れり。彼等は二人の詐僞者をして王に逆らはしめたり。一を麵包師の子ラムパート・シムネルといひ、自らクラレン侯の子アル・オヴ・ワーウックなりと稱せり。他の一はタウネーより來りて改宗したる猶太人の子パーキン・ワーベックにして、曩にリチャードのためにタワーに於て壓殺せられたるエドワードの第二子ヨオク侯なりと自稱したり。ヘンリー七世は一千四百八十七年、ノッチングハムの附近ストオクに於てシムネルを征服し、一千四百九十八年、エキゼターの北トウトンに於てワーベックを敗れり。王はシムネルを赦して厨房の役に從事せしめたりしも、ワーベックをばロンドンのタワーに幽閉したり。後數月を経て、ワーベックは等しくタワーに幽囚の身となれる眞實のアル・オヴ・ワーウックと共に脱獄を企てたれば、

タイバンに於て絞殺せられたり。王は禍の根を絶たんと欲し、ワーウックを斬に處せり。フェルデナンド・ゼ・カブリックは其の女アラゴンのカザリンをヘンリー七世の子に娶すことを諾したりしが、其の條件としてワーウック死せしが故に、凡ての障礙を排して未來の義子を王儲に定むべきことを以てしたり。ワーウック死してより、一千百五十四年以來三百三十一年間英國を統御せしプランタゲネツの血統は斷絶せり。

爾來ヘンリーは王冠を危ふすることなく、平和の治世を續けたり。蓋し兩薈後黨の激戦は已に英國の貴族を蹂躪して全く荒廢に歸せしめられたればなり、即ち王家の強族八十人は其の役に於て戰没し、他の貴族等もまた倒れたりき。これより發展したる英國の主權は從來非常の反抗を與へたる貴族の勢力及び驕傲に逢ふことなかりしかば、靜謐の萬歳を唱ふるに至りたり。

中世期の歴史によりて、英國憲法は十五世紀の央に當り已に自己の精神を發起したりしを知るべし、然れども王權は實に無限のものたり、即ち國王は犯すべからざるものなりき。王は唯に國會を召集し且つ任意之を解散するの特權を存すな

のみならず、國會の決議は王の允許なくして執行することを得ざりしなり。また海外列國に對し國民の機關たる行政廳の總理、陸海軍の元帥となり、公道仁慈及び榮譽の本源たり。王は商業を整理するの大勢力を有し、貨幣を鑄造して之に王名を刻し、度量衡を制定し、又場所を定めて市場及び海港を設けたり。王が宗教に保護を與へたることまた多大なりき。王の世襲歳入は經濟宜しきを得て、政府の通常費を支出するに足れり、また其の私有財産は實に莫大のものたりし。兩薈後戰後、貴族の衰頹はまさに此の機會を供したりしなり。

ヘンリー七世チユウドラ(一千四百八十五年)

エドワード四世は新稅

を起すに嘗て國會の一致を待つことなかりしが、ヘンリー七世は更に甚しかりき。貪婪にして小膽なる王は、クレシ一の勇者エドワード三世よりも、アリンコオトの英雄ヘンリー五世よりも、國會を凌駕侮辱したり。王の治世中國會を召集したること極めて稀なり、稀に召集せしことあるも毫も獨立の面目なく、國會に下せる王の敎書は一人の異議を唱ふるものなくして受理せられたり。慈善の名を藉りて強制以て募集したる債務、專斷の土地沒收、罪人の追放及び内亂を惹起したる暴戾

不正の行爲は、悉く國會の緘黙によりて合法のものとなれり。國會は新に裁判所の設立を承認し、古代の名を取りてスタア・チャンパーと稱せり、其の所員は全く王に隸屬したれば、王意行れざることなく、實に對絶權執行の怕るべき武器とはなれり。スタア・チャンパーにては事件の執行に際して陪審官の合議を避くることも多く、王が罪せんと欲するもの、生命財産は王の代理者の思慮に一任したることもありたり。

中世紀よりして諸侯は部下を以て軍隊を組織するの權利を有し、其の軍隊は絶えず國を騒し且つ公議を破り居たりき、之れ郎黨扶持の權利なりしが、ヘンリー七世は之を廢止せり。加之、王は貴族に其の世襲の領土を賣買することを允許したり、此の策により現在と未來とに於て封建諸侯を打撃することゝはなれり。王は郎黨扶持の自由を束縛して貴族の有力なる兵士を奪ひ、世襲の領土を抑制して、之を小區劃に分割するの準備をなしたり、蓋し法律よりも其の効力強き土地世襲權制度の干涉抑壓は實に大地主等の破滅なりしといふべし。

ヘンリー七世は商工業の發達を計れり。一千四百九十六年、ネザルランドと條

約を結び、二國間の自由貿易を制定したり。デムマルクとの條約により、英國人はバルチック海の交易を開き、デムマルク人に限りアイルランドとの通商を保證せり。スペイン半島の諸王がなしたる例に倣ひ、海上の發見に向つて英國民の活動を獎勵したりしかば、ヴェニス人セバスチアン・カボット初めて英國旗をニュー・フンドランド及びフロリダの海岸に沿ふて翻すを見、ブリッスルの商人直ちに來りて業を營むに至れり。また王は工手をフレミングより誘ひ來り、羊毛の輸出を禁じて國內の工業を獎勵し、遂に貧民に業を與へ、力の及ぶ限り公益を發現せんとし、王女マルガレットをスコットランド王ゼエムス四世に娶して二王國の聯結を處理し、大布列顛を結合したり。此の聯合の日を以てスチュアート家より出て、英國王位を襲ぐの權利始まり、遂に一千六百三年スチュアート家より出て、王位に登りしことありたり。第二の婚儀は更に重要な結果を生ずるに至れり、そはフルデランド・ゼ・カゾリックの女アラゴンのカゼリンと太子アーサーとの許嫁を指したるものなり、然るにアーサー早世せしかば、第二子に娶したり、ヘンリー八世は實に此の第二子なり。ロオマより英國に入りたるカソリックの分派は實に此の結婚と共に起りたるもの

なり。一千五百九年、ヘンリー王は五十三歳にて崩殂せり、崩殂の日宗教の争を生じ、大恐慌の破綻を生ぜしかば、王は臨終の刹那に於て二千の群集を訓誡するに必要なる資を投じたりき。

史に映じたるヘンリー王を察するに、天資恰かも王と同時代にして有名なるルイ十一世及びフェルディナンド・ゼカソリックに劣ること數等なるべし。其の残忍はルイの如く、其の貪慾はフェルディナンドに似たれども、決して其の政略的才能をば有せざりき。王は、最も巧妙なる事業をなさざりしにあらざるも、賤劣なる貪慾のために被はれ、或は破滅せらるゝに至れり。郎黨扶持廢止の法律はげに一大政策なりしも、王の眼中には一市府の貢税又は過料を徴收するの口實にも及ばざりき。一日王はアール・オヴ・オックスフォードの居城ヘンニングハウに幸したり。オックスフォード伯はランカスタア系最も忠實なる黨與の一人にして、また辛苦を蒙りたるもの一なり。王に敬意を表さんがため伯は其の臣僕をして美服を纏はしめ、王の通路に沿ふて整列せしめたりしが、王は其の人数及び服装の善美なるを見て謂らく、かゝる豪族に打撃を加ふればまさに獲る所多かるべしと。アールに謂て曰く、

「卿よ、卿の門閥家たることは予の耳にする所なり、しかも實狀は風聞に勝ること遙かに大なるを知る。此處に集れるものは、皆卿の民なるかと。アール答へて曰く、然り、彼等は陛下を拜するの光榮を得んとて來れる者なり」と。王再び曰く、予は卿の歡待を謝す、然れども、予の面前に於て法律の違背を見るを忍ぶ能はずと。是に於て、王はアールに對して裁判を開けり、アールは一萬五千マルクの巨額を納めて、漸く赦さるゝことを得たりといふ、以て如何に王が貪婪飽くなきかを知るに足らん。

苟も王は財庫を充すことを得んには、事の何物たるを問はず、賤劣なる彼の眼には悉く善良なるものゝ如く映じぬ。臣下より軍費を強奪し、外國と平和を締結するには金銭を領收せざれば聽かず。一千四百九十二年、フランスに入るや、エテールブルの條約により、英軍の退却に報ゆるに七十四万五千の金貨をルイ十一世より得たり。王は朝廷の苑内に地區を作りて之を賣れり。また僧正の職位を賣るに現金を以てし、賠償金を獲て罪人を赦したり。王は深く注意して、如何なる人が相續者なくして死せしかを探索し、土地復歸の法に由り、其の財産を掠奪せしが、往々

正當の相續者現はれ出づることありたるも、之を容赦することはなかりき。王の寵を蒙れる大臣、エムブソン、ダドレー及びカーディナル・モルトンは、正義の名によりて利益を掠奪するの道を知れり。慈善の名義によりて財貨を吸収するモルトンの熟練なるは有名なるものなりき。彼常に人に向つて、汝の費多きは汝が富める理なり、以て納むべし。汝の費少なきは、汝が節約を行ふにあり、以て久しく納むることを得んといひしと傳へられ、此の兩頭論法をモルトンの肉刺と鉤(Fork and hook)と呼べり。

王の治世は、英國に専制政治を附植し、爾後一世紀半の久しきに至れり、これ他なし、當時の國民は兩蕃薇戰爭の結果、殘忍過激の動搖に疲勞し、今は平和なる商工業の勞働に熱中したれば、政治に對しては狂奔するの餘裕なかりしなり。此の如き人心の傾向は、能く諸種の通商條約を結約し、また能く發見の航海を企て、只管商業の利害のみに汲々として怠らざりしかば、一時は其の國會又は自由を忘れて専制政治下に満足したることありたるなり。宗教改革の問題及びスペインに對する騷亂は、再び英國國民の注意を他方に向はしめたり。然れどもヘンリー八世の殘忍

なる虐政及びエリザベスの榮譽ある苛政の後に至り、國富増進し、國論發達したれば、國民此等を回想して、制し難き感謝の念を喚起したり。

英國は今尚ほウェストミンスター<sup>1</sup>の寺院に古代の建築にかゝる奇異の塔を存せり、此の寺院こそヘンリー七世を葬りし所なり、此の塔の建築は炬火狀ゴシックの模形なり。

#### 第四章

スペイン

一千四百五十三年

十五世紀中葉のスペイン　十五世紀の央まではスペイン國民は他歐洲國民の事態に關しては殆んど全く無關係の地位にありたり。國家成立の第一要件として、當時國內に勢力旺盛なりしムーア人の領土を漸次蠶食せずんばあるべからず、而して未だこの大業は成就せられざりき。マッサルマンは半島南端の地を領して、グラナダ王國を組成したり、此の王國はコルドヴァの回々教徒四方に分離して九國を形成せし其の最終のものなり。さればスペインは十五世紀の間他國と懸隔したる經營に汲々とし、他の列國民と異りて、國內のムーア即ちマッサルマンを

嫌惡するの餘り、之を驅逐せんとの唯一の宿望を有するに過ぎざりしなり。スペインの獨創的意思想の顯著なりしは、此の孤獨の形勢に負ふ所頗る多し。宗教の人心に感化を與へたるは、他に其の比を見ざる所、實に國の半に布衍したり。

スペインは尙未だ中世時代の形勢を存せり、詳言すれば、無政府の状態其の極度に達し、貴族、市人、地方農民及び個人は皆其の特權の名義の下に自營せり。

諸王は單に權力の影裡に在りき。カスチールにては、貴族等其の王ジョン二世の怯懦なるに乗じ、王の寵臣アルヴァレス・ド・ルナを罪ありとし、死刑の允許を與へられんことを強迫して之を斬に處したり。アラゴンにては王の即位に當りて、貴族等の用ゐる方式の辭として知られたるものあり、即ち、吾等は皆陛下と資格を同ふし、吾等の結合は勢力陛下よりも強し、今や吾等は陛下を君主に仰ぐに當り、陛下は、吾等の特許免狀及び給祿を保護するの條件を以てす、若し否らざれば能はずと、而してこの言辭は決して空言のものにあらず、今日こそ昔日の紀念として存ずれ、當時にあつては事實の簡潔なる表明なりしなり。アラゴンに高等法官(ジャスチザ)と稱する一司法官あり、最高の裁判權を有するものにして、國王及び其の臣下との間

に生じたる爭論の最高判官の重任を勤めたること一再に止まらざりき。此の法官の職務は、往時スバルタのエフオリと稍趣を同ふし、君主及び人民の保護者を監督するの權利を有し、其の身は神聖にして犯すこと能はず、且つ裁判權と職權とは殆んど無限のものとなせられたり。疑はしき事件に遭遇したるときは、王は自ら之れと協議せざるを得ざるなり。裁判官の宣告に對する控訴を受理するのみならず、控訴を待たずして再審を起すことを得、また王の詔勅を檢查し、或は大官の任免黜陟をも行ふの權利を有したり。一私人としての彼をも國會の判決にあらざれば捕ふることも能はず、而して彼に對する訴願は裁判官之れを受理することを得るの規定となせり。

カスチールに於てもアラゴンの如く、人民の自由保護のために特に撰擧より成れる國會を制定せり、これをコルテスと稱し、今尙呼ぶに此の名を以てせり。アラゴンの國會は四階級より組成せり、一、僧侶、二、上級貴族、三、下級貴族、四、市民の代表者是なり。國會は租税を定むるに投票を以てし、和戰を決議し、貨幣を鑄造し、裁判官の判決を再檢し、國の行政を監視して權力濫用を改修し、且つ二年毎に四十日間の

議會を開き、王之を解散することを得ざらしめたり。カスチールの國會は唯三階級より成る、即ち僧侶、一般貴族及び市民代表者なり。國會は投票を以て救恤金を定むるも、人民の業務を看察したる後ならでは能はず。王未丁年の場合に於ける如く、國會は履行政府となりて施政をなしたることあり。ジョン一世未丁年の時攝政會議に於て、市出議員の數、權力及び地位を貴等族と均一にするの必要を生じたり。

國會は王に對して人民の自由を保護するの任を盡し、のみならず、各地には *Herros* を設くるの特權を有したり。アラゴン及びバスク國の *Herros* は最も其の名高し。バスクは眞の獨立を保持し、現世紀の間毫も之を傷けざりき。カタラン人は能く獨立を固守したること一再ならず、一千四百六十二年ジョン二世を廢し、一千六百四十年、彼等自立して遂に共和政府を組成したりき。

此等特權の結果として、スペインには毫も眞正の愛國心あるなく、地方的精神は確く其の根底を据へ、王國、各州、各市皆分離して單獨に自營したり。貴族は各自其の領土の君主を以て任じ、大官等は國王より享有したる特權を固守し、全國は郡縣

割據の状態なりしが、遂にアルカンタラ、カラトラザ及びコンポステラ即ちセントゼエムスは其の富力、城砦及び軍隊の編成により、大に兵備を修めて三大邦國を組成したり。

既にしてセント・ヘルマンドットの起るありて、各地貴族の騷擾、私闘及び之より生ずる劫掠を救はんとせり。一千二百六十年、既に已にアラゴン、カスチールの諸市は公安維持のため相結びて一躰となり、裁判所を設け、又兵を募りて陸軍を編成し、國內の混亂を鎮壓せんとせり。ヘルマンドットは國民保護の一團にして、一に兄弟神聖同盟と稱するものなるが、貴族等は此の創立を見て激し、不平を唱ふるもの多かりき。封建諸國の匪徒が此の同盟を破壊せんとするに對して維持せんがため再三の戰を交へたり。然れども同盟は破壊せんとするあらゆる手段に向つて堅守し、組織に固着せる惡徳をも併せ有し、グラナダの包圍に大功を奏したり。左に各邦國について詳述すべし。

ナヴァール、アラゴン及びカスチール、アラゴンのデヨンは性活潑にして才略人に過ぎ、無限の大望を保持して、曩にナヴァールの女王と婚を結び、一子を擧ぐ、

これをドン・カアロスといひ、ヴァイアナの主たり。母後の死後、幼主はナヴァールの王位を繼ぐべかりしに、父王これを許さざりしかば、幼主の黨與は起つて兵を擧げ王軍に抗せしかど、千四百五十二年エイバアの役に敗績したり。この役や二度敗れて二度起り、ヴァイアナの幼君死するに及んで漸く其の終局を告げたり、恐らくは千四百六十一年父王の爲めに毒殺せられたるものならん。彼に二人の妹あり、一をブランチといひ、カスチールのヘンリー四世の廢后なり、他はフォイクス伯の夫人レオノラなり。ドン・カアロスはさきに其の權利をブランチに附與したり、ブランチはそれを得て位に即きしかど、不幸の生涯にありて、オーゼズ城に於て王妹のため毒殺せられたりき。千四百八十四年、レオノラの孫女其の王冠をフランスのアルブレット家に讓與しぬ、然るにアラゴンのデヨンの第二子フェルディナンド・ゼカソルクは千五百十二年ナヴァールを征服し、千五百十五年に於て此の地方を自己の領土に永久結合したりしとを公告したり。ピレネー山の北下ナヴァールはヘンリー四世の代に至るまで其の土の王に服従したり。

千四百五十八年、アラゴンのデヨンは兄アルフォンソ五世の崩殂により、アラゴ

ンの王となりしが、反逆の絶ゆる間なく、國內騷擾を極めたり。カタラン人は王の爲に彼等の特權を破棄せられしかば、ヴァイアナの幼君に左袒して争亂に與したり。ヴァイアナ王の死後、カタラン人は再びデヨン二世に従ふとを好まず、寧ろカスチール王に服するに如じとなし、ナヴァールのエステラ市を王に獻じて忠實の意を表したれど、王は其の市を領して歸順を拒みたれば、ポルトガルのドン・ペドロに至たりしかど、また容れられざりしを以て、遂にアンデュー一家の門に投ぜり。レネ王の子カラリアのデヨン不慮に死してより、彼等の希望は破れ、十一年の久しき戰に従事したりし後、遂に千四百七十二年降服したり。是より先デヨン二世は、この反亂に對する戰備として、セルデン及びルーシロンの地をフランスに典して三十五万クランを得たり。佛王ルイ十一世は一度己が掌中に入りしものを棄つるが如き人にあらず、されば千四百七十三年、デヨン二世ルーシロンを恢復せんとして戰を企てしも、遂に敗績し、千四百七十九年病を以て死せり、齡八十二歳。王の第二子フェルディナンド・ゼカソルク王位を繼承せり。

カスチールもまた同一の光景を呈せり、しかも其の性質更に不良なるものなり



き。ヘンリー四世は千四百五十四年父王第二世の後を承け王位に登りしが、貪婪飽くことを知らざるの小人バートランド・ド・キニップを寵し、大に偏頗の處置ありしより、王の品位を卑ふしたり。千四百五十九年國會は王弟ドン・アルフォンソを儲子とせんことを要求せしかど聽れず、是に於て千四百六十五年、貴族議會は兵を擧げ、王の像を模作してこれが廢位の式を行へり。アヴェラの平原に玉座を造り載するにヘンリーの肖像を置き、黒色の絹にて造りたる王の笏と王冠とを所持しめたり。かくて式部官は場に上り、聲高く王の罪科を列擧したり。第一罪の申告にてトレドの大僧正は王冠を取りて他に移し、第二の申告にてブラセンシャ伯は正義の劔を褫ひ、第三の申告にて、ベネウニタム伯は笏を奪ひ去れり。最後に王の像は玉座より地に投ぜられたり。式場の主宰はヘンリー四世の弟にして當時僅かに十二歳の少年ドン・アルフォンソの王たることを宣告したり、この奇異なる儀式は内亂の合圖なりし。然れども幼王は一千四百六十七年、メヂナ・デル・カムポの戦後薨去せしかば、ヘンリー四世は王女を廢して妹イサベラを儲位に就しむべきことを承認し(一千四百六十八年)平和條件の一としては、イサベラは王の合意なくして結婚する

能はざりき。諸王族中イサベラと結婚せんことを望むもの多く、中にはポルトガル王ギエネ侯チャアルスもありたり。然るにイザベラはアラゴン王の長子フェルチナンドを撰び、ヘンリー四世の合意を俟たずしてブルラドリッドに於て窃に婚儀を約せり。結婚の契約中カスチール政府はイサベラに附隨すべきものなることを定めぬ。

結婚は再び内亂の炎に風勢を加へたり。こゝに於て王は俄にバートルニヤと呼べる王女ゼンを迎へて儲位を譲りたれども、登位を見ずしてヘンリーは崩せり。王崩去の時(一千四百七十四年)ポルトガル王アルフォンソ五世ゼンを援けて王位に即かしめんとし、またカザロ・ド・アカンハと云へるトレドの勢力ある大僧正の援助ありしにも拘はらず、トロに於て戦は敗れたり。太僧正はヘンリー四世の代に於て既に争亂を望むの兆ありしが、イサベラの夫はアラゴン人なれば、嫌惡せられ直ちに兵を擧げて反けり。彼は嘗て予はカスチールの王位に小兒の如きイサベラを置けるも、容易にこれを下すことを得べきなり。縦令予はイサベラの手に笏を置けりと雖も、何時にても紡車を再び彼の女の手に持たしむることを得べしと云へり。

かくてポルトガル王は降服するの止むを得ざるに至り、バートルニヤは尼寺に退隠し、其の後デヨン二世の崩御によりて、ヘルデナンド・ゼカソリック、アラゴン王となれり(七千四百九十九年)。是に於てアラゴン及びカスチールの二王國は全く結合を遂げたりき。

スペインは實に其の日を以て成立したるものなり。イサベラは天賦の才能を有し、フェルデナンドは性苛酷にして、王者の行爲にあるまじきことありしと雖も、才幹人に過ぎ、兩者相助け、勇氣と忍耐とを以て専ら國內の統一を謀り、王國の利益を伸張せんことにのみ勉めたり。當時猶ムーア人半島の南部を占めたり。一千四百六十二年、ムーアはデプラタルを失ひしにより、アフリカとの交通を杜絶せられたり、然るにカスチールに争擾起り、一時戦を中止したれども、一千四百八十二年再び開戦するに至れり。ムーアの國內大に擾亂し、首府城寨アルハマを失ひ、三年の後ロンダを棄て、千四百八十七年セブレを奪はれ、二年の後アルメリアを掠められ、更に二年の後グラナダを圍まるゝの衰境に陥りたり。グラナダ市は國中最も勢力ある地にして、數千の高塔雲に聳え、人口二十萬を有すといへり。包圍殆んど

九ヶ月の長きに亘りしが、一夜イサベラの陳營失火したりしに、女王はスペイン人をして新に燒地に一市を建立せしめ、包圍を解かざるの決意をマッサルマンに示さんと企てたり。八十日間にして新市は造營せられたり、今日サンタ・フェと呼ぶもの即ちこれなり。包圍の久しきにより、ムーアは遂に饑饉の襲ふとろとなりしのみか、アフリカよりの援助なく、日に餓死する者數百に達し、遂に降服するの止むを得ざるに至れり。此の戦こそムーアが基督教徒と兵を交へし三千七百回の戦役中の最後にして、コルドバのゴンサルヴ、降服條約は定められ、條文中マッサルマンは自家の法律によりて支配せられ、彼等の財産及び慣習を繼續し、從來彼等の王に納税せしよりも多くを課せらるゝとなく、及び信仰の自由をも約せられたり。最後の王ポアプディル、マウント・パドルに達するや、涕泣之れを久しうしぬ、母アイスチア彼に、汝は男子なるに王位を保護すると能はず、今に至りて婦女子の如く流涕するは何ぞやと云へりと。實にスペインに於けるアラビヤ人の主權は七百八十二年間を繼續せしが、彼は遂に建築精巧、形狀優美の堂塔、完備の農工業、言説を以て形容し能はざる衣服及び家具の美、さては國民の思想上粗野なる北方征服者の全く知る

能はざる温和愛敬の禮容とを彼の背後に見捨てたりき。

此の如くスペインは平和の状態に復したりしかど、猶異教徒に對して嫌惡の念を存ぜり。元來半島の民は回々教、ユダヤ教及び基督教徒混合の一種奇異なる團躰なりしを、同一教に改宗せしめ、宗教の一致を以て一國の統一を鞏固ならしめんとて、フェルナンドはインクジション(異教糾問所)を新設したり。此の著名なる糾問所は、古より恐怖と嫌惡との名のみ殘し居たりしものなりしが、今や再現して宗教上の目的より寧ろ政略上のそれとなり、スペインにてはホオリ・オフィス(神聖裁判所)と稱したり。一千四百八十年、始めてカスチールにこれを設け、後四年アラゴンにこれを建て、熱心の反對ありしに拘はらず持續せられぬ。其の首長をグランド・インクイジトアといふ、罪人より沒收したる財産を其の有となさしめたり。糾問所に捕はれたる最初の者は基督教徒にして猶太教に心を傾くる者、及び基督教徒となりたる回々教徒の窃に再びマホメット教信仰の意を有したる者となりき。一千四百八十一年の一月より十一月に至るの間、糾問者は新に基督教徒と詐るもの二百九十八人をセヴィールに、またセヴィール及びカディツに於て二千人を炮烙の刑に

處したりしが、無辜の民多數なりしといへり。兩親の罪其の子に及び、或は原告の心意疑はしきものも、被告はこれと對決する能はざれば、空しく涙を吞んで罪に服し、或は證人たりと名付る者にして心中異教を奉ずる者もありき。これによりて人心恟々として、スペインの商業及び社會攪亂して平穩ならず、恐らくはこの隱密の穿索程スペインを害せしものはなからん。トーマス・ド・トルキマダはグラランド・インクイジトアの最初の人にして、十八年間に八千人を火刑に處し、六千五百人は死後これを焼き、九千人は烙印の刑に處して財産を沒收し、或は永久牢獄に投ずるの慘虐を極めぬ。

一千四百九十二年、糾問所の勢力益強大となり、ユダヤ教徒を驅逐して財産を掠奪し、且つユダヤ教徒は商品外金銀の運搬を嚴禁せられたり。是に於てユダヤ教徒のスペインを去りて他國に逃がるゝもの八十万の多きに達し、尙多數は殺戮せられ、或は迫害を被りたり。かゝる殘忍の行爲は技術工藝の主として唯一の代表者なる、且つ國家の精力とも謂ふべき全住民を盡滅するに至れり。グラナダの條約により、ムリアは宗教の自由を存したりしに拘らず、國會の權利を奪ひて多數を

流罪に處したり。スペインは宗教の統一を得しかど、技術工業及び商業を失へり、そはユダヤ教徒及び回々教徒こそ此等の主要なる首動者なりしを以てなり。

王はロオマ法王より享けたる寺院財産管理の権利に依り、僧侶を制御するの大勢力を得、又カラトラザ、アルカンタラ及びセント・ゼエムスの領地を取り、自ら其の主となりて、兵力愈強く歳入益莫大となれり、就中セント・ゼエムスは最も重要な地にして實に一千の鎗兵を調ふるの準備ありしといへり。始め此等領土の併合は、單に王の一代たるべき者なりしが、法王に請ふて永久の領土たるべきことを宣言したり。セント・ハマンドを再興し、王自ら保護者となりてカスチール國會の指揮下に附屬せしめ、また警察權を管理するの手段を握り、諸侯の間に起りたる私闘を鎮壓するの口實を利用して、此等の城砦を破壊したり。千四百八十一年ガリシヤ地方のみにて破壊したる城砦の數は、實に四十六の多きに達し、之れがため群雄多く斃倒したり。また謀者をあらゆる地方に遣はして、領主に對する人民の訴願を聽かしめ、罪を赦すに金錢を以てし巨額の收入を獲き。

スペインは國內の統一を得しより、更に國外に向つて其の勢力伸張を企てたり。

カスチール朝にてはコロムバスのアメリカ發見あり。キシメネスのアフリカ海岸にあるオランを奪ふあり、或は、ベドロ・ド・ウエラのカナリイ諸島の侵略ありて、大西洋の航海に必要な碇船港はスペインの有に歸したり。アラゴン朝にては、一千五百四年フェルチナンドのネエブル王國を征服し、一千五百十二年、ゼアンドアルブレトを撃てナザールを奪ひ、以てピレニイ山の二門戸の一を封鎖して、スペインの要害を堅固にしたるありき。

イサベラ死してより、二王國の分離漸く起らんとしき。女王の遺子一女あり、ゼンといひ、バルガンデイのメリーの子ネザアランド王フィリップ太公に嫁せり。女王は此の養子を悦ばず、遺言してカスチールの攝政を夫に附與せり。カスチール人は、女王の遺志に服従せしかば、フィリップは王權を掌握せんがためスペインに上陸せんとせしが、其の後幾何もなくして死せしかば、フェルチナンドはカアディナル・キシメネスの援助と國會の承認を得て、フィリップの子チャアルスの未丁年中カスチールの攝政となりたり。然れどもスペインの統一は未だ以て鞏固の域に達せりとはいふべからず。フェルチナンドはフィリップを嫌惡するの餘り、ルイ十一世の姪ジャーマイ

ンド・フォックスと婚して、バルガンディの勢力を削らんとしたりしかど、二者の結合は勢幼稚にして目的を遂ぐるの力なかりき。フェルデナンドは長孫を愛せず、次孫を以てアラゴン王たらしめんとせしが、計畫遂に畫餅に歸したり、然るに一千五百十六年フェルデナンドは臨終に及んで、スペイン統一の大覺悟を起し、己れの大權を擧げてチャアルスに附與したり、チャアルスは已にイサベラの遺産を集め、且つ其の祖父皇帝マキシミリアンの遺産をも收めんとしつゝありたり。

トレドの大僧正にしてグランド・インクイジトアなるキシメネスは當時フランスにありし幼王の來着までカスチールの攝政に任じたり。王は英邁の資を抱き、夙にスペインの改革を以て自ら任じ、優柔に流れんとする國民を嚴正なる規律の下に導かんとせり。國內の宗教上の元氣を勃興せしめんがためには、自ら資を投じて異教徒征伐の師を起し、自ら將となりてアフリカのオーラン城に迫れり。イサベラの崩去によりてカスチールを支配し、フェルデナンドの死後能く之を鎮撫じたり。王は身を處する嚴正に、人を責むる俊嚴なり。身は國王の宮殿にありながら法王の下に一僧侶たるを甘じたりしも、政治宗教の反對に逢へば斷乎として

之を撲滅せざれば止まず、之を以て王は異教徒を火刑に處し、或は貴族の權力を抑制したりき。

スペインに於てはチャアルス一世となり、帝國に於てはチャアルス五世となる。チャアルスは始めて一の過失をなせり、そは國の元老キシメネスを斥けて用ゐず、却つてフレミングの寵臣に圍繞せられて施政公平を缺ぎしことなり。一千五百十九年、スペインは始めてチャアルスが帝冠を繼承せしと知りて大に驚き、其の生命及び財産は新帝が大望の犠牲となるならんことを恐れたり。チャアルスは此等の不平を願ず、セルマンを征服せんが爲めに出立したり、然るに王の出發は恰も叛亂の導火となりて、トレドよりカスチールを通じて國內一圓に蔓延せり。反旗を翻したる諸市は互に結合して神聖同盟と呼ばれたる團體を作り、王が貴族の金錢上の特權を廢するにあらざれば武装を解かざるべしとの宣言をなしたり。是に於て貴族等は同盟を脱して別に一團を造り、以て王の部下に集合したりしが、遂に同盟軍はジャララに於て戦利あらず、頭領ドン・デュアンド・パデラは捕はれて斷頭臺の露と消へたり(一千五百一十一年)。

チャアルス五世は此時全くフェルデナンド及びイサベラの遺業を成就し、クレンシヤに住める回々教徒を強ひて基督教に改宗せしめ、且つグラナダの住民には固有の衣服及び言語をも使用禁止を達したり。王はまたホオリト・オフィスに僧正會を開き、僧侶をして廷上に釣せる劍の下に叩頭せしめ、以て王の武力に屈從の意を表せしめ、猶市の特權を奪ひ、從來國會は人民の不平を慮り、諸税は凡て投票によりて議決するの慣習ありしを廢し、任意賦税するに至れり。貴族等は國費支辨の義務を拒みたれば、朝廷に出入すること能はず、フレミング人と群居して一の傭兵たるに過ぎざるの觀ありき。

かくて王は市民及び貴族等を制御し、大に王權伸張の實を擧たりと雖も、自ら四肢を切斷するの基となり、スペイン衰頹の主なる原因の一となりて、爾來國民の英氣は專制政治の爲めに著るく壓服せられたるんぬ。

ポルトガル 半島の南極端に當りてポルトガルの一小王國將に其の光彩を發揮せんとするあり。小王國の創立者なるバルガンディのキャペシアン家はアヴィスの傍系のみにて王位を繼承したり、アヴィスは庶出のデヨン一世が敵手たるカス

チール王を敗りし彼の名譽あるアルデユバロタの日より、君臨することとなりき  
(一千三百五十五年)。

新王朝は國民的感情と貴族の暴戾とに對する反動によりて、當初は専ら國民の自由に留意し、デヨン一世は二十五度國會を召集して、人民の權利を伸張することにつとめ、貴族の權利濫用を防阻したり。アルフォンソ五世に至り、大貴族等は王の幼弱なるに乗じ大に權威を擅にせしかば、内亂蜂起し、アフリカ遠征は當時の國狀より見るも、全く無用の師たるを免れざりしも、戰利に至りては最も顯著にして、アルデラ及びタンチャを征服し得たり、またヘンリー四世の女なるカスチールのゼンの權利を保持せんが爲め、スペインに干涉せしが、この結果は不良に終りき。一千四百七十六年、トオロオの役に敗れ、フランスの援助を懇請するの止むを得ざるに至りき。ルイ十一世は無謀の遠征を好まざりしかば、何等の援助を與へざりき、然れども當時フランスはカスチール及びアラゴンに對して敵意を含みしかば、アルフォンソをしてフランスに流浪せしむるよりはリスボンに彼を置くに若ずとなし、彼の歸國するに臨みては助力したり。

アルフォンソ五世の相續者ジョン二世王位に登り、ポルトガルのルイ十一世と稱せり、王はフランス同名のルイ十一世よりも精力遙かに勝れたるものありき。主の初世に當り國會が王權を剝奪せんとして貴族に與へたりし諸種の特權を打破し、貴族をして臣下の生命を左右するの權利を破棄せしめ、悉く王臣の管理下に置かしむ(八千二百)。此の改革は却て反逆を鼓舞し、ブラガンザ侯不平黨の首魁となりしが、王は討て彼を捕へ斬に處したり(八千三年)。

貴族等は竊に王を暗殺せんとしたりしが、王は自ら劍を執て巨魁にして王の從兄弟なるヴィシユー侯を刺せり。かゝる行爲に恐怖して貴族等は遂に表面首を垂るゝに至りぬ。是に於て國會の獨立破れ、十四年間漸く三回の召集を見しのみにて、王の專制力は深く其の根柢を樹立するに至れり、之に反して商業は刺戟され、冒險の精神は鼓吹せられ、且つ文藝の復興を獎勵するの果を生じたり。リスボンを自由港となし、スペインより遁れ來れるユダヤ人を迎へて商業の發達を謀り、或はケープ・ヴェアの諸島を發見し、或は喜望峯回航の大業を成し、ヴァスコ・ダ・ガマの足跡を尋ねて國民一般に遠征を企つるに至れり。ジョン二世が着手の事業はイマムニ-

エル王に至りて成熟しぬ實にジョン王の君臨中内に平和を得、外に赫々たる名譽を收め、發見の土地歳々に増加し、財政の豊富年々に進み、就中インドより得しものに至りては驚愕するに餘りありたりといふ。ポルトガルはこの富に眩迷して傳來の獨立心を忘却するに至れり、イマムニエルは國會をして無用物たらしめ、彼が治世二十年間曾て一度もこれを召集せざりき。

## 第五章

ゼルマン及びイタリイ

一千四百九十四年

イタリイ、ゼルマンの分離及びフレデリック三世とマキシミリアンの世 前章已に廣大なるフランス、イギリス及びスペイン王國に伴ふ強勢なる王權の樹立せること、國民能く其の主權の下に結合し、外國に向つては活動の機熟し、或は進んでその經營に従事しつゝあるの事實を述べたり。之れに反してエウロパの中央に當り當時なほ中世時代の夢未ざ醒めざる二國民の存ずるあり、此の二國民こそゼルマン及びイタリイなれ。封建時代の状態を保持して國內分離統一の實なく、また國民としての勢力なかりしかば、勇者の大望はうたゝ之に垂

誕して前後相起る者各其の雄を決せんとせり。イタリイ先づエウロッパの戰場となり、次てセルマンまた争亂の渦中に投ぜられたり。かく二國は他の侵略を蒙ること一再に止まらざりしにより、遂に國民と貴族等は自己の希望及び榮譽心を喚起するに至れり。

セルマンにてはアウストリア家已に帝權を掌握し居れり、然れども皇帝フレデリック三世は懦弱にして唯帝位に在るのみ、實權を掌るには至らず。君臨すること五十二年(一千四百三十年)、しかも帝は己が帝國あるを忘れて、一千四百五十三年大公爵地となしたるアウストリア領土の擴張のみに汲々として只管力を竭せり。撰舉侯等は帝に迫りて廢立を計りたるも其の効なく、帝は益帝國を視ると冷淡に唯自己の企畫にのみ趨りたれば、バルガンディ侯、フィリップは封建の鎖鑰を脱し、ネザラランドを帝國より分離したり。帝は能くポオルドの英志を挫きて之れに王名を許さざるの勇ありしも、ニュース及スウキツル人の援助に力を用ひざりしかば、彼等は自ら奮起して自衛のため強固の抵抗をなし、遂に三たび捷利を獲るに至らしめたり。一千四百六十年、セルマンに内亂起りしが、單に主魁バラチンの選舉侯

をして帝國の事件に關する失權者とならしむるのみにて満足したり。次てまた猛烈なる内亂は起れり、一千四百四十九年より五十六年の久しきに亘り、多くの貴族及び七十二市の間争闘絶ゆるの日なく、二百以上の郡村は騒亂によりて悉く灰燼となれり。亂はスウキツル人の加擔せしもの少なからざりしが、帝は單に觀者の位置に立て、之を鎮壓するの手段をば講ぜざりき。

フレデリックは自己の領土經營に對してはさまざま柔弱にあらざりしも、未だ以て成功の途に達せざりし。前王アウストリアのアルバートは其の子ラヂスラウスにその公爵地に併せてボヘミヤ及びハンガリーの王權を遺したり。帝は此の幼王を抑留したれどもボヘミヤ人及びハンガリー人の強請に逢ひ、之を赦すの止むなきに至り、唯セントステパンを保つのみ。モハムメド大軍を率ひてコンスタンチノオプルに侵入し、次て一千四百五十六年戦捷の餘威を振ひ、ベルグレード市に來りたれば、帝はデヨン・ヒューニアディに撃退せんことを命じたるフラシスカンのギオヴァンニ・キャピストラのセルマン人を遊説して四萬人を得、ヒューニアディを援けしかば、ヒューニアディはベルグレードに侵入して重圍を破り、モハムメトを退け



たり、然るに負傷して死し、其子マシアスコルヴェテス父の名譽と興望を繼て立たり。後二年、ラヂスラウス死せしかば、フレデリッキ後位を襲はんとせしが、承認するものなく、ボヘミア人はポディブラットを其の王に、ハンガリー人はマシアスコルヴェテスを其王に擧げ、フレデリッキは從兄弟シギスマンド及び弟アルバートとアウストリアの大公爵地を分配するの止むなきに終れり。フレデリッキは弟及び從兄弟の領土を併呑せんとして戦ひしが利あらず、將にヴェンナに於て生擒せられんとし、漸くポディブラットの來援によりて逃るを得たり。アルバートの死によりて、渴望せる地は勢ひフレデリッキの有に歸したりしが、一千四百七十一年、ポディブラットの死後ボヘミアは、帝の有とならずして、ポーランド王カシマー四世の長子ヴラヂスラウス其の王に撰ばれたり。フレデリッキは思へらく、ボヘミアとハンガリーの永久の敵對は、少なくとも兩國を疲弊に導くべしと、然れども、ハンガリーの勢力甚だ強く、當時マシアスはヴェネシヤ人及びスカンダーベック人の援助を得て、オットマンに對し勇ましく戦ひ居たりしが、遂に二王相結合するに至り、マシアスは帝を目して己等に對する陰謀者とし、ハンガリーに於ける詐謀を鳴らし、且つ基督教及び文

明の敵たるオットマンの防阻を卑屈にも放棄したるものなることを公言したり。アウストリア軍戦利あらず、一千四百八十五年ヴェンナ陥り、一千四百九十年マシアスの死まで其の有に歸せり。

大公爵にして且つ皇帝なるフレデリッキは戰屢敗るゝと雖も、尙朝廷の偉大を致し、皇子マキシミアンとバルガンディのメリーとの婚姻はチザランドを得、後スベインをもアウスタリアの有に歸せしめたり。

マキシミアンは勇敢にして深く學問に達し、且つ辨説に秀で、中にも文學美術及び物理の學を愛し、悉く之を修得せり、唯輕忽に失するの短所ありて、忍耐力に乏しかりき。されば熱誠以て一事に執掌すること能はず、また沈靜を固守することなく、常に大陸を東奔西走して各種の冒險に従事したり、しかもそは多く誇張の聲にして實行の伴はざるもの尠からず、然れども父帝フレデリッキのゼルマンに盡したる事蹟より遙に多きことは疑ふべからず。當時無政府の状態は群雄の蜂起を醸し、帝國の版圖は麻の如く亂れ、一千四百八十八年、スワヒアンの諸市及び貴族はエッスリンゲンに於て陰謀を企て、數年を経ざるに百四十四餘の城砦を破

壞するに至れるにても、如何に争亂の國內に普及せしかを窺ふに足るべし。しかも一時の鎮壓は何等の効なく、果して確固たる公安を致さんとならば永久壓服の策を講ぜざるにあらざれば能はざりしなり。永久壓服はウァームス國會の議する所となり、遂に一千四百九十五年諸國の擾亂に對して罰金及び過料を課するの法令を布告して、法令違犯者を罰し、或は之を防阻せんため、裁判所を創起し、皇帝は諸邦代表の候補者中より撰拔して其の法官となしたり。これを Imperial Chamber と稱し、實施せんが爲めに國を十州に分ち、各其の主宰を置けり。各州は州費を以て兵を置き、主宰之を督し、公安の保護とせり、こは佛王ルイ十一世の例に倣ひ、また聯邦の鎖鑰なりなり。

然るに不幸にもゼルマンにては此の裁判所の權利を十分に伸張すること能はず、國會は行政權を握りてアウストリア皇帝を信任せず、帝の制定したる法令規則の執行を拒みたれば、帝はアウリック議會を起して、帝の世襲領地の整理及び皇帝裁決の事件をも議決せしめたり(一千五百一十年)。此の議會は Imperial Chamber の特權を侵害すること多々なりき。會議の管轄權は始めアウストリア一圓に限られ、ヴェンナの朝

に專屬したるものなりしが、漸次範圍の制限を脱して、今や Chamber に對する一大勢力の反對者となりしに反し、Chamber の官吏は俸給甚だ少なく、判決は效力甚だ乏しかりき。アウリック議會の專横は遂に三十年戦争の主要なる原因の一となれり。

當時のゼルマンを一括して觀察すれば帝國と崇められ、王國と唱へられしといへ、單に貴族及び市民の集合團體に過ぎず、しかも彼等は祖先と習慣とを等ふし、言語の一致せるとよりて結合せられたるものにして、精神上團結せるにあらざりしかば、一度宗教的感情の勃興したる宗教改革の日には脆くも破壊せられたり。ゼルマン帝國の貴族の權力にはマキシミアン帝の英氣も猶且つ苦痛を感じたり。貴族等は各自の領土内に於て最上の權利を保ちたること國王が國內に絶對權を有したりしが如し。フランス、イギリス及びスペインに革命ありしが如く、ゼルマンも亦その厄難を免かれず、而して革命の結果は唯貴族を益することとなりたり。一千五百二年、七選舉侯は相結んで選舉同盟を組成し、之れはよりて彼等の獨立を保持し、專横を抑制するの手段として年毎に集合すべく相約したる。彼

等の憂慮したる此の二件は唯杞憂に過ぎず、マキシミアンは財力缺乏せるのみか忍耐以て難事に當るの勇なく、生涯を種々の方面に徒費して、イタリヤ人の云へる如く Max the Penniless (貧帝マキシミアン) の名を以て一生を終りたり。

帝國の政治事件はフレデリック三世の世に於けるが如く、マキシミアンに於てもまた特筆すべきことなく、帝はアウストリア大公爵として能く力を盡したるも、歐洲の事件に關しては功業甚だ少なかりき。マキシミアン治世中の事蹟はセネリス條約をチャアルス十一世と締結してアルトイス及びフラチ・コムテの地を獲(一十四百)、スウツル人と戦ふて敗れ、其の結果ベールセルの平和條約を結び(四十四百)、九十年) 兼ヤアルス八世の叛徒に與し、またツエニスに逆つてカムプライの陰謀に加擔し(五十八百)、後ルネ十三世に抗せる同盟に加はり、グイネグートの役に勝てり(五十三百)、(六) バリアン相續の争亂に干涉して多くの市及びインの土地を領有し、ゴリツ伯及びグラヂスカの死によりて其の兩領土を掌握し、最後にタイロレス系の大公シホステンドの死によりアウストリアの全土を舉げて領有となせり。またスベイン、ネエブル及び新大陸の王儲たるジョアンナとフィリップの結婚により、帝の一門

は無限の勢力を得、更に帝孫フェルデナンドとルネ二世の女と婚儀を調へ、之れにバシガリ、及びボヘミアの相續權を與へんことを約したれど、彼の大勢力に主要の障礙たる宗教改革の發現せんとするを知れり。帝は一千五百十九年崩殂せしが、已にルネサーは羅馬に於て改革の旗を翻し居たり。マキシミアンは己れ何れの地に於て死せんも計られずとて晩年に至りては往く所に柩を携へしめしといふ。

十五世紀後半のイタリヤ フランス人の侵入を蒙りし時のイタリヤは地中海上の商權を握り居たり、當時イタリヤの如く農業整頓し、商業發達せるは歐洲中他に其の比 見ざる所なり。絹、羊毛、麻、獸皮の製品、カルラ大理石の鑿割、マレマの鑛金、明硫黃及び土瀝青の製造繁盛を極め、また農民が農産物培養に關する設計は歐洲中他の農民の及ばざると遙かに遠きものあり、此の設けたるや實に洪水の汎濫を豫防せんがため、メスカニに於けるルドヴェゴ・イル・モロの治水工事に於て、ロムバードの地は之によりて益肥沃となり、イタリヤ全國殆んど之れが灌溉の便を蒙らざる所なかりき。農民生活の状態は清楚味ふべきもの多く、山

間幽靜の境に起居し、繞らすに土堤を以てし、出ては耕し、入つては家庭の團樂を悦ぶの樂園は、都府熱鬧の生活と相對して質素大に注意を惹くものありたり。しかも交情の眞率なる、言語風貌の溫雅なる、爭亂鬪戟の影なく、人生の經路に危害を恐るゝとなくして平靜無事の生涯に安んせり。實にイタリア人は歐洲國民中最も富有にして幸福、且つ最も開化したる國民にして美麗なる都府を賞觀し、文化の地を廻遊せんことを冀ふ他の國民を目して野蠻人となせしは實に理ありといふべし。

如上の状態にありながら、イタリアは、歐洲中最も懦弱の國民なり。イタリア國民は皆技術及び商人の群集にして、毫も國家的氣概を抱持せざりき。國の防禦として見るべき兵士とはなく、唯一種野武士の類あるのみ。陰謀僞計には精達せしも戰術を知らず、アンギアリーの役に人民囂々として喧噪すること四時間に亘り、僅に一騎兵の群集の裡に窒息して倒れしのみにして敵に降りしが如し。これ皆久しく專制政治下に慣れて自由の意思を失ひ、市民としての勇氣を消滅したる結果なりとす。國は分離して各自全く孤立の勢となり、單に言語習慣の統一を見

るのみ、一國の安危に當りて相互救援するの愛國的精神はあることなし。

國の分裂セルマンよりも甚しきイタリアは、一の皇帝或は國王と稱するものなく、また國會もなかりき。

十五世紀の中葉に於て一の新組織半島に其の萌芽を現はさんとせり。そは僭政にあらず、帝權にあらず、且つまた共和政治にもあらずして、貴族の政權なり。野武士スフォルザはミランに於て公爵の家系を創立し、またロオマガナ及びエミリアに同一の家系を創めしもの多かりき。メヂシの一富豪の一門はフロレンスを支配し、アラゴン王はネエブルを統御したり。更に進んで此等貴族がイタリアの獨立を保持せんがために一致して、對外國行動をなせしか知るべきなり。フランス及びセルマンがイタリアに對して種々の奸計詐略を弄べる事實は暫く措き、一大危害のイタリアに起れるあり、之れオットマンのコンスタンチノオブルの略取及びインドに至る海上權の掌握なりとす。之れイタリア成立の問題に關して實に前途大に憂ふべきものなしとせず。東帝國の滅亡により、イタリアは已に商業の本源を枯衰したり、然るに今またポルトガル人のアレキサンドリアを経てインド

に至る航路を發見するありて、イタリアの航路を閉塞して無用のものたらしめ、ギリキ半島の商敵オットマンのエデプトの商權の掌握するに至らば、イタリアの商業は由々しき危害を蒙りて恐らく盡滅するに至るべし。オットマンは將にエデプトを征服せんとてフリウリに騎兵を下し、艦隊をイタリアの海岸に艦装したれば、アドリアチック海上に於けるヴェニス及びゼノアの勢力は最早其の雄を誇ること能はざるべし。

かゝる危害目前に横はりては、イタリア人は同盟を企つるの他に良策なからん。この希望は嘗てギリキ帝國の蒙りたる一大打撃より喚起せられ、過去の怨恨を忘れてロデーに於て永久平和を結び、共に外國に當らんことを誓約したり、こはミラン侯フランシスコ・スフォルザ、コスモ・ド・メディシ、アルフォンソ五世、ポロ・カリキスタス及びバイアス二世の智謀によりて成立したりしなり。然るにアルフォンソ死するや(五十四年)カラブリアのデヨン王位を望みしより、再びイタリアは混亂の渦中に陥りて、また脱すること能はざるに至れり。六千四百六十二年、法王は此の混亂を鎮めんとはせず、却て瀆神の師を興じ、スカンジナビック

を誘ひてデヨンを援けたり。またフランシスコ・スフォルザはヴェスコニチスの相續者オーレンス侯と自稱したる一フランス人を破りて之を退けたりしが、今やアラゴン人に加擔し、ネエブル王フェルデナンドを援けて反對者を驅逐せんとしたり(六千三百)。

ネエブルに於てカラブリアのデヨン戰敗れて半島の平和再び來りしが、六千四百六十四年、スフォルザ(六千四百)及びバイアス二世(六千四百)殆んど相次で死せしにより、新たに平和は破壊せられたり。一千四百七十八年、フロレンスに對するの同盟起り、一千四百八十二年、ヴェニスに對する同盟また起れり。オットマンは此の好機會に乘じ、オトランドを襲撃し(八千四百)二万二千の基督教徒を殺戮し、或は奴隸となし、且つ太守を殺せり。イタリアは已に暴政に慣ひ居たれば、オットマンの迫害に逢ふもさまで意を留むることなかりき。十五世紀の半に於ては、英雄の群出すといふイタリアも無能者をのみ上に戴くに至り、各州の人心日に懦弱に流れ、物質的文明の發達顯著なるものありしも、政治上又は道德上に於て再び昔日の觀なきに至れり。

スフォルザ家は一千四百五十年以來、ヴェスココンチスを回復してミランに住し、一門の富貴日々に榮え勢力比ぶべきなし。熟始祖に遡りて考ふるに、十五世紀の初アチンドローと呼べる一農夫あり、一日耕作に餘念なかりしが、會々一兵士の側を過ぐるを見て、忽ち鋏を抛ち、行て兵士の群に加はれり、彼勇氣人に倍し、才智また卓絶せしを以て衆の推す所となり、當時イタリアの最も強勢なる匪徒の將となり、名をスフォルザ(勇敢の意)と改め、勇名を天下に轟かしたり。一子あり、また英名高く父の死後部下の兵を督して城砦に據り、法王よりアンコナの地を得、大に四方に雄飛せんとす、會、ミラン侯死して共和政治を建立し居たりしが、ヴェニスのために腦さるゝこと頻りなるにより、スフォルザを招きて守護を托せり。スフォルザは始めミランを援けてヴェニス人を征服せしが、後遂にミラン人を征服し、強て自己をミラン侯として宣言せしめたり(一千四百五十年)。彼はルイ十一世の如く、各邦の諸王より同盟者たらんことを請願せられ、援助の效ありしかば大に尊敬せられたり。子ガリアソ・マリア不肖にして君主たるの資に乏しく、領土は自己の貪欲の餌の如く苛酷の貢税を課し、暴虐至らざる所なく、市民の生命と名譽に關しては毫も留意す

る所なかりき。されば彼はセントステザンの寺院に於て多くの親兵に圍繞せられながら、遂に貴族のために弑せられたり。マリアの遺子ギョヴァンニ・ガリアソ時に年甫めて八歳、其の母サゾイのボンナ後見たり。此の機に乗じて幼主の叔父イル・モロの異名あるルドヅッコ・スフォルザは大臣を捕へて斬に處し、攝政を逐ひ、彼が甥の名を以て政を執れり(一千四百五十年)。幾もなくルドヅッコは假面を脱してギョヴァンニ・カリアソ及びイサベラをバビア城に幽閉したり。イサベラの祖父ネエブル王は正嫡ギョヴァンニに主權を還附せざれば、直ちに兵力に訴んとて篡奪者を威嚇したり。ルドヅッコはイタリアの聯邦同盟して彼を攻撃せんことを恐れ、チャアルス八世に援助を乞ひしかば、チャアルスはアルプスを越へて來れり。

擾亂に拘はらずミランは常に世界富國の一にして、ロムバード、は中世紀中歐洲一部の資本主たり、是れ資本豊富にして農業完備し、製造業の繁盛、商業の發達せしが故にして、歐洲大陸は殆ど其の恩恵に浴したり。人民は富を致すの道あれば土地の遠近を問はず、必ず行て商業を營めり、さればピエーカイアの市場にも、ルイ十一世の設備せるリオンの市場にも、ロムバード、の足跡を見ざることなし。プリユ

イテ及びフランダールに一大倉庫を設置して、無数の商品を藏めては北フランス、イギリス及びベルマンの諸國に散布し、或はハンシロチック同盟の船舶によりてスカンヂナヴィアの諸國に輸送せり。彼等は唯り商業のみならず美術上の趣味を解し、能く其の技術を修養せり。ルドヴィゴは有名なるレオナード・ダ・ヴィンチを招き、無数の肖像を建てられたる大理石の丘ともいふべき寺院を建立せり、こは羅馬のセント・ピエターを除くの外未曾有の壯觀なりしと。

ゼノアはルイ十一世のフランシスコ・スフォルザに割讓(一千四百四十四年)したる地なりしが、ガリオン、マリアの死後(七千四百六十六年)一時自由の空氣に浴したりしも、再びルドヴィゴ・コイル・モロの手中に歸したり、こは一千四百九十年佛王の采地となりしをルドヴィゴ・コチャアルス八世より支配權を享有したりしなり。

イタリイ諸州中最も上位にあるはヴェニスにして、五十年間種々の困難と戦ひてその富強を致せしなり。一千四百二十三年より五十三年の間にイタリイ半島の四州を得たりしと雖も、薄弱なる所領は利する所なく、却て之を得んとして失ひたる金のみにても十萬金(ダカット)に達したりと。マホムメド二世のコンスタンチ

ノオブル陥りたる警報に驚き、走つて他の諸侯と結び、過去の怨恨を捨て、ロドデに於て同盟し、翌年に至りては討伐すべきマホムメドと和親を結びたり。反服常なき不徳を責むる者あれば、彼等は答ふるに吾等は始めヴェニス人にして、次に基督教民となれり、今回々教民となる、何の怪む所かあらんと云へりと。後多島海まはたはギリウスに於て土地島嶼を占領し、勢力漸く盛なるや、オットマンとの條約を無視して顧みざりしかば、平和破れ、オットマンはピアツ河を渡つてネグロポンド及びスクタリイを奪ひ、至る所に劫掠を逞ふし、市街には火を放てり。是に於てヴェニスは再び和議を講じ、屈辱の條約を締結して、回々教民に納租せざるを得ざるに至れり(七千四百九十九年)。

然れどもヴェニスはイタリイの覇權を握れり。三千の艦船、三萬の水夫、精銳の軍隊を有し、之に加ふに硝子板織物及び金銀具の工場を設け、其の商業の擴大なる其の行政の巧妙なる、外國に對して優に雄飛するに足るものありし。國力の伸張に比例して人民悉く無謀の大望に驅られ、單り超然として諸邦の上に立ち、敢て他を顧みざるの態度は他の嫌惡する所となり、一千四百八十二年漸く其の端を發せ

り。フエラ侯は條約に基きてヴェニス<sup>1</sup>の倉庫より鹽の供給を受けたりしが、コンマチオに製鹽所を設けて關係を絶んとせり。ヴェニス人は此の計畫に妨害を與ふるに反對黨貴族等の同盟なりとの口實を以てしたれども、實は商業上の嫉妬より生じたるに外ならず。ネエブル王、ミラン、マンチュア、フロレンス及び法王等擧つてフエラ侯を援け、ヴェニスに逆ふ。ヴェニスは同盟軍に對して大に勇氣を鼓舞し、遂に利益ある平和を結び、却つてロヅゴよりポレンナを得たり。

ヴェニスの政治は能く富と權勢とを人民に與へしと雖も、貴族の勢力また侮る可らざるものありて、ドーヂ(ヴェニス及ゼノア兩民の統御者)の主權は議會(グロコンシル、オブ、テベ)に擁護せられたりしが、一千四百五十四年、宗教糾問所の三大法官の創設せられしにより、唯其の名のみに止まり、ヴェニスの主權は全く三大法官の掌握する所となれり。法官は生殺の權を有し、人民の財産を管理するに當り、一も判決の理由或は始末書等を公示するとなくして執行したり。かく三大法官の權勢當るべからざるにより、人民の恐怖する所なりしも、ドーヂの承認と二法官の合意とによりて、他の一法官を罪ありとするを得るの規定によりて、さまで權力の濫用

はなかりき。尤も法官等は專斷にて法律を制定し、任意之を變更するが故に、人民は如何なる法律によりて支配せらるゝやも計り難き不安の境涯なりしも、ヴェニスはイタリイ中の他に比して、邦内極めて平和の恩恵に浴し居たりしは、またこの組織に負ふ所頗ぶる多かりしなるべし。されば至る所ヴェニス政府の賢明を賞讃せざるなく、國內の安寧外患の絶無、人民其の職業に安んじ、平和の生活を營みしとはまた事實なればなり。此の如く國內の平和普ねかりしも、政府は多くの秘密探偵を國內に放てり、彼等は多くの俸給を得、隨て勳功あれば種々賞與をも受たり、而して其の組織整頓して決して窺知すること能はざるにより、人民は悉く競々として唯累繼の禍の來らざらんことにのみ心を惱ましめたり、これによりて物質的進歩に不幸なる影響を與へたるは争ふべからず。また政府を非難せし貴族ある時は二回まで注意し、三回に及べば死刑に處し、國家に必要な商品を外國に給與したるものも死罪に行ひしとは雖も、それ等裁判と刑の執行は全く秘密裡に決行せられぬ。

軍人の跋扈を防ぎ、多大の恩恵に浴せざらんが爲めに、ヴェニスは野武士の頭領



を使用したれども、二人の主膳官をして陽に款待の意を表し、陰に其の行動を監視せしめたり。かく危害に心を勞することなからしめんと力めたれども、他に向つて戦を挑むことなく、また自衛のためにすら争ふことを避けんとせり、そはヴェニス人には戦勝てふことは、その結果軍人の跋扈または陰謀あらんことを怖るゝが故に大禁物なりしなり。野武士カルマグノラ嘗て罪を得て審問せられ、八ヶ月の久しきに亘りしが、その間被告には吉凶共に何事をも知らしめず、否想像することだに能はざる程秘密を保たれ、遂に審問の結果カルマグノラを軍隊の長官として多くの勳記を興へしが、これ彼が最後の名譽にして、死刑前の瞬間を娛ましむるものに過ぎざりしは甚だ残忍なる風習の如く思はる(一千四百二年)。

アルノオの谿間にフロレンスの美しき市あり。ゲルフス及びキペリネネの争亂の爲め久しく困苦の位地でありしが、遂に一千三百四十三年平和を回復して人民の全階級即ち貴族と平民とは政事上一の權利を有するとし、就中その憲法は頗ふる著名なるものなりき。行政権は二ヶ月毎に更代する六人の長老に委託し、立法権は市會と四ヶ月任期の郡會との二つの會議に屬せしめ、抽籤を以て任命す

るの風なりき。加之人民總集會の決議は即ち君主權にして、憲法改正の問題あるときは、其の都度開會することゝなり居たり。されどアゼンス政體が在留外國人に參與權を興へざりしが如く、フロレンス政體も特權なき市民には參政權を許さざりき。

民治政體とはいへ、有力なる大族が利益を蒙ることの多きは云ふまでもなく、第一はアルピジス、次はメジシス最も利益を享受したり。就中メジシス家は二級民に參政權を興ふるに盡力せしとにより名望と共に勢力を増大にせり。シヅエストロ死後コスモ・ド・メジシは銀行業によりて巨萬の富を積み、それを以て貧民は救助し、富者には貸付して和親を結び、フロレンスの大恩人にしてまた大債權者となれり。されば他のアルピジスは猜忌の念強く、遂にコスモスを追放したり。然るに此の追放は却て敵の勢力を附加し、一年後コスモは大勝利を獲てフロレンスに歸れり(一千四百三年)。是に於てコスモはフロレンス隨一の權勢を有し、最上權を掌握する(一千四百四年)。と否とは自己の任意となりたれども、彼は音響のみの稱號に満足せず、事實を伴はしむることに努力し、絶體の權勢を永久的のものたらしめたり。あらゆる公職官

位に有るものは悉く彼の朋友にして、勢力範圍はフロレンス市に充てり、而して彼は單に一銀行家なれども、裏面に於ての主權者として一千四百三十四年より六十四年に至るの生涯を送りぬ。

コスモ盛時の三十年間はまたフロレンス全盛時代にてありき。共和政體の基礎鞏固にして能く其の實を擧げ、平和と整頓はよく人民に利益と安心とを與へたり、中にも文學技藝の隆盛は、彼が保護と商工業の進歩とに負ふ所最も多し。かく彼が恩惠に浴したるフロレンスはコスモを尊稱して國の父と呼びぬ。彼は六百萬金を投じて莊大なる病院及び圖書館を設立して市の美觀と人民の利便とを謀り、自己は極めて質素なる生活を以て満足し、子女には貴族との結縁を避けてフロレンスの市民と婚せしめたり。これによりて、彼の子孫は市民と全然同格なるものと思惟せり。然れども一代富限の相續者には能く先代の遺志を襲くもの極めて稀なる社會の常例に脱せず、コスモ死後のメジシス家は祖先が平等の意志を忘却して貴族と信じ且つ振舞ふに至り、フロレンスもまた昔日の自由精神地を掃ふて去りぬ。

メジシス家のピートル一世立て王權を振ふや、一千四百六十五年貴族等はフロレンスの自由權を恢復せんことを要求せり。ピートル之を聽かず、却つて貴族等の黨類を打破せしが、王子の一人は其の争亂の犠牲となれり(七千四年)。法王シキスタス四世は其の甥ヤロラモ・ソアリオに愛着してローマの主權を與へんことを願望せり、此の希望はイタリイの平和を破懷せるのみか、ローヂ條約にも違犯せるものなれば、フロレンス人は斷然之を峻拒したり。ソアリオは此の抵抗に激怒し、パジスの陰謀に加擔し、一千四百七十八年祭典の日に乗じてソアリオ及びフロレンゾ・ド・メジスを暗殺せんとせり。ソアリオは暗殺せられ、フロレンゾは遁れて虐殺者を刑に處せり。其の共犯者中ピサの大僧正サルツァチあり、殿塔の窓に於て法衣のまゝ絞殺せられたり、これによりてメジシスは法王より破門を宣告せられ、遂に戰亂を起せり、この戦争にはあらゆるイタリイの諸列國悉く關與したり。争亂中オットマン侵入したり、新月旗のイタリイ本土に翻へるや、貴族等は大恐慌を感ぜり。シキスタスは機敏にも戦争を中止して和を結ばんとし、フロレンゾも深謀ありて、快く之を諾し、再び平和は來りぬ。

ロレンゾがミユヅの父(ミユヅは文藝を司る女神)の異名あるは専ら學者を愛し、藝術家を奨励したるが故なり。彼はコンスタンチノオブルより遁れ來りたるダリス人を歓迎し、フキンノに命じてプラトオを翻譯し、チャルココンダイラスのホマル傳を出版し、詩聖アンゼロ、ポリタノ及び文學者レボキオを奨励し、またギバアトに命じてはセント・ジョンの洗禮堂の扉の摸型を彫刻せしめたり。此の如くしてロレンゾは殆んど學藝の爲めに破産に瀕し、フロレンスの公債の二分の一及び金庫に準備しある正債の五分の一を以て補給せしにより、フロレンスもまた破産の運命に遭遇したりと云ふ。メジシス家の萬能力に對してフエラの一聖僧ギラモ・サヴァナロラ、ロレンゾの病床に横はりて將に瞑目せんとするに臨み(一千四年)懺悔に代ふるにフロレンスの自由恢復を命ぜり、ロレンゾ之を拒絶せしかば、僧は叫んで「嗚呼時己に來れり、或る一人が數週間内に劔なくしてイタリイに侵入し、しかもGrisの如く山岳を超え、如何なる斷崖堅壘も其の前には倒るべきの時來れり」といへりと傳へらる。

ロレンゾの子ピートル二世は不肖にして殆んど不能不才、毎に人民に接するこ

となく、只管貴族的生活に耽りて淫逸を喜び、甚だ國民の嫌惡する所となれり。市には二ツの徒黨起りて、一は年少貴族黨、他は民黨にして、民黨の主魁はサヴァナロラなり。彼はピートル治世の失敗を見て、イタリイは必らず天刑を蒙るべきものと信じ、慷慨悲憤の餘り人民に誠言を與へて「嗚呼イタリイよ嗚呼ロオマよ、野蠻人民は獅子の如く餓えてまさに國に來らんす、而して其の死は大なるべし。されば穴堀共は市街を馳せ廻りて死躰をあさるべし、或者は父の死躰、また或者は子のと。嗚呼ロオマよ、悔改めよ、ウエラスよ、ミランよ」と叫びたり。

一千四百四十七年後基督教徒はニコラス五世を首長に戴けり、ニコラスは學者にして、また學者の保護者なりき。一千四百五十三年ステファノ・ボルカル法王となりしが、彼は畫策家にして、或時はロオマに共和政躰を建設せんとし、また一千四百五十五年にはコンスタンチノオブルを陥れたるオットマンに對して敵敵征討の師を起さんとし、自ら勸誘につとめたる程なり。次はスペイン人のアルフォンソ・ポルキヤにして、カリキシタス三世の名によりて法王の大權を振ひ、一門の榮譽を輝さんと企てしも、却つて耻辱のみ多く、凡て名のみを終れり。

一千四百五十八年法王の冠はベッセル會議の前秘書官なりしユーニアス・シルヴァス・ビッコミニの頭に戴かざるゝことゝなれり、有名なるバイアス二世これなり。一千四百六十四年より七十一年に至る間法王ボオル二世は敵討の大願を有して、スカンダーベックを助け、オットマンに對して絶えず攻勢を取りしが、ボオルの死后法王政治に目醒しき且つ恐ろしき時代の紀元を畫したり。五十有餘年間才幹人に勝れたる法王の輩出を見しが、主義悉く基督教の利害に注意するを忘れて、専ら一門或は領土の爲めに汲々たりしのみ。一千四百七十一年より八十四年間シキスタス四世が其の王權を得させんとて力を竭したる事實は前に云へり。八十四年より九十二年に至るインノオセント三世は意志薄弱にして法王の職責を完ふする能はず、その死後、ボルギア家の出の第二法王アレキサンダア六世セント・ピイターの法位に登れり。彼は、最も惡むべき僧官買收の結果撰舉せられしにて、加ふるにその性格邪淫、殘忍、貪婪等あらゆる不徳を有し、法王の職位を瀆せしこと尠ならず。然れども彼は政畧と機智とに富み、老練の手腕を有し、議會を操縦するの技倆の如き、緊急の事件を處理するの敏活と老練とは確かに人をして喫驚せしむるものありき、要するに宗教家よりは老政治家とも云ふべし、而して同時代の人民の信仰もまた敦厚ならず、堅固ならざるものありき。

當時のロオマは暴虐者一群の餌食となりて殘忍なる競争者の蹂躪荒廢する所となり、戦争あり、暗殺あり、また不斷の毒殺もありたり。人民にはコロナナス及びオルシニスの一門は法王の命に服従せず、アレキサンダア六世の巧妙なる手段と慘酷なる方法とによりて此等の貴族は滅亡しましたは降服しぬ。アレキサンダアに次で機智術策を振ひしは嗣子シイザ！ボルギアなり。シイザ！ボルギアは容顏美はしくして、教育あり、殘忍ながらも勇者にして、一撃牡牛の頭を打落すの力を有し、また辯舌巧妙にして、己れの欲することは何人なりとも巧みに説服するの毒舌を有せりといはれし才物なり。奸智の彼は人を殺すにも偽謀か毒薬か、或は小刃の外に他の武器を使用せしことなく、しかも人を殺さんとするや、先づ充分に沈思し、やがて決するや無言にて斷行するの風ありしと云ふ。時人彼を呼ぶに、毒のアレキサンダアを以てせり、されど事實は毒以上の惡魔なりしなり。かく彼は心神を勞して畫策するありしも、收獲を見ずして終れり。彼がローマグナの地を得

るや、父の死に遇ひ、父の死の瞬間に彼自身も死に瀕せしを知らざりき。こは一人のカアデナルを殺さんとして準備せし毒薬を父子共に仰ぎしなり、能く他を欺きし彼は遂に自身をも欺き了せしなり。幸に助命せしと雖も、一時フェルデナンド・ゼ・カソリックのために禁錮の身となり、爾後流浪彷徨の境涯にありて、最期はナヴァール村にて殺害せられたりと傳へらる。

一千四百六十二年トロージヤの勝利によりてネエブルにはフェルデナンド一世王位に上れり、王は新らしき革命を喚起すべく力を盡し、かど内亂の勃興を鎮壓すると能はず、却つて多數の怨府となるの結果を生じたり。特に政治の暴戻は貴族反抗の動機となり、騒亂絶えざりしかば、和親の祝宴を開き貴族等を招待して、食卓上に之を擒へて悉く慘殺せり。人民は貴族等よりも一倍の虐待を蒙れり。フェルデナンドは王國の商權を自己の掌裡に專有せしのみか、僧官を賣り、寺院を賣り、金銀の獲らるゝ凡ての方法を講じたれども、使用の途を誤り、國の防禦を等閑に附せしより、一千四百八十年ロトランドはオットマンに略取せられ、住民は虐殺せられ、遂に救助すること能はざりき。一千四百八十四年ヴェニス人はまた王國の海岸

なるガリポリ及びポリカストロを劫掠したり。

十五世紀末葉のイタリイは富有にして腐敗せる文明國なり、文學の盛、技術の美は國の表面を裝飾したれども、裏面は已に敗衰に瀕したりき。戰爭は唯野賊の群によりて行はれ、堂々たる戰術のあるなく、陰險なる詐謀に頼み、敢て血を流すことなくして多大の勝利を獲んとのみ志せり。人の死を怖るゝは武士的精神の缺乏を示せるにて、世界に生れたる以上は一死の覺悟あらざるべからず、然るにイタリイ人は刃を見て戰慄し、陰に偽罔奸計を弄して之を避くるを名譽と心得、劍を以て切斷すべき問題を毒を以て解決するが如きは古のロオマ武士道の頽敗を證明して餘りありといふべし。イタリイの外交も罪惡の巢窟なりき。かく富有にしてしかも無政府の状態にある全半島は第一着に征服せんと欲する者の好下物なり、チャアルス八世之を喰はんことを希ふこと久しかりしが、それよりは先づ得んとして能はざりし他のものあるを知るを順序とす。

## 第六章

### オットマン帝國

一千四百五十二年

モ、ハムメット二世（一千四百五十一年）。オットマンの戦捷はダニユブの兩岸及びマドリアチックの海岸に至る大廣域を領有するに至りしも、コンスタンチノブル帝國の存在せる間は瞬間も枕を高うすること能はず、随つて災禍の次第によりては悉く戦捷の獲物を見棄て、アジア本國に引上ぐるの止むを得ざるに至るやも知り難く、またギリイク人及び基督教國の艦隊によりて何時銳鋒を挫かるゝやも計りがたきより、遂に東帝國を滅亡せしめざるべからざるに至れり。さればコンスタンチノブル占領の實はオットマンが歐洲に權勢を樹立するの基礎と云ふべきなり。

オットマン七代の皇帝モハムメット二世はダニユブにあるベルグレードの城壁より小アジアの中央に至る大地域を領し、強大の勢力を振ひしかと、尙二つの大敵を挫へ居れり、一は、西方に於ける基督教國民とギリイク人なり、ギリイク人も基督教の分派に屬すれども、同國の安危に關しては他の基督教國民は容易に無頓着の姿勢を取りしより別個の如く思惟せられしなり。他の一は、東方小アジアの中央なるカラマニアのセルジョーカン帝國と同帝國衰亡（一千四百四十四年）後のペルシア帝國とな

り。ペルシア帝國はオットマンと政事上よりも宗教上の相異より互に嫌惡の念を高め、常に對峙するに至れり。モハムメット二世とその相續者が此の二つの障礙に對して戦ひし事實と、エウロッパ及びアジアを威嚇せし新帝國に對して二者互に援助して其の發達を防阻せし状態とを左に叙述すべし。ダニユブに成功してもエウフラテス河畔の攻撃を蒙り、アジアの戦に利あればエウロッパに新しき攻撃を蒙る前虎後狼の状態にありて、オットマンは甚だしき繁忙を極めたり。加ふるにアジアなるロオド島の勳爵士の強盛なる軍隊ありて、基督教徒のために目敏き番兵となり、同時にオットマンの勁敵たるあり、此の間にオットマンは如何に處せしか。

オットマン政府は凡てのアジア國民と同じく専制政治にして、サルタンの勢力は絶跡、臣下は奴隸にして、サルタンの心一つは能く彼等を死活せしむるものなり。オットマンの専制政治は武力斷行の意義なれども、武力の上に更にまた一の専制力あつて支配す。武力以上の權能者とはコラン即ち豫言者にして、其の權勢はサルタン以上なり。豫言者の法律は人民のみならず國司も同じく遵奉せざるべからず。單に聖典を説明する外何等の任務なき豫言者の弟子等が、神の名を唱へて、戰

争は人道の惡徳にして神の心に背けりと説けば、人民の之れに對する信仰は厚くして深かりき。然れどもサルタンはジャニスサリイといへる強勢の軍隊を有せり、サルタンは其の勢力を憚るものあれども、軍隊はサルタンに至忠なり。かゝる強勢の軍隊配下でありしより、オットマンは兵事上歐洲何れの軍隊をも凌駕し、而して兵に規律あり、攻城術、射撃及び野戰術の熟練は他に及ぶものなきのみならず、基督教國にてはサルタンの如く優勢なる常備軍を組織する技倆を有せざるにより、兩者の勢力は懸隔したりしなり。オットマンの軍隊は戰術の發達と熟練の外、兵士の英氣満々たるものありて、オットマンの勢力隆勢を致したること疑を容れず。天國は劍の蔭にあり、と云ひし豫言者さへありき、これ當代の眞理なりき。當時の基督教國は依然貴族專横の社會なるに、オットマンは自由平等の健全なる思想發達せりしが故に、この武斷國の勇者は何人に限らず立身の道開かれ、サルタンは市民よりも奴隸中よりも勇士または熟練なる戰士だにあれば選抜して國の相將にさへ登用したり。如上の事實によりても百年間に三大豪傑を輩出し、成効のみを續けて一度も敗戦せざりしとを説明し得べし、此の三雄とはモハムメット二世、セリム一

世及びソリーマン一世をいふ。

ギリク帝國征服の名譽は實にモハムメット二世の胸間に輝くべき偉勳なり。彼はアゼンス、コリンス及びモリア全部の大領土の領主となり(五千四百)續いてトレビゾンドを取り(五千四百)翌年リースポス島を占領し、尙二年の後カラマニアの主權を奪へり、此の地の領主は曩に小アジアに於けるオットマンの後部を嚇し、屢々歐洲侵撃の鋒先を鈍からしめたる者なり。

ヴェニスのみは基督教の利害を念頭に懸るよりも商利を思ふの念熾んにして、一千四百五十四年モハムメット二世と商業上有利の條約を締結したること前章に説きしが如し。されば法王バイアス二世イタリイ同盟を作り、オットマンに對して兵を起し(六千四百)出船の際アンコナにて死するや、ヴェニスは其の同盟に對して與かる所なく、オットマンの勢力日に加はるを以て大に驚き、唯自己の立脚地より打算して戦ひしことあるも、敵地の海岸を騒がすに過ぎざりき。

オットマンはイタリイに對して大軍を起すには尠からぬ困難を感せり、そはハンガリイ侵入の衝路に當れるが故なり。ハンガリイはオットマンの恐るゝ所にして、

攝政ハンアチはセーブ及びダニユブ兩河の合流點ベルグレードに據りて固守し居れり。モハムメット二世の全軍それを襲撃(一千四百五十六年)す、ハンアチは戦捷中に陣歿しぬ。子マシアスコルツァナス父を襲ぎて英名を轟かし、一千四百五十八年王に撰ばれ、ダニユブ一帯の地を防禦し、サルタンの攻撃に逢ふも常に勝利を得たり。創めてハンガリイに常備軍を編成し、大砲の鑄造を始め、またブダに大學校を設立したるも彼なり。コルツァナスは一千四百五十八年より九十三年に至る諸王中特に秀拔せる英王なり。惜むらくはボヘミアに向つて無謀の争端を啓き、またヒント、ステヴンの王權恢復を拒みしフレデリック三世に對して戦を起し、其の首府ヴヰェンナに五年の星霜を送りしなど、大に國力を消耗し、爲めにオットマンに大打撃を加ふるに能はざりしことを。

北方にはハンガリイ軍ダニユブの河畔を固守し、ルウマニア人は無數の城砦に堤防を築きて防備せるものから、オットマンは容易に歐洲に侵入すると能はず、遂に南アルドニアを攻撃せしが、一千四百六十七年スカンダーベグ死せしによりアルドニアは容易に陥落したり。勇猛なるスカンダーベグは單身の勇氣を以てアル

パニアの君主となり、二十三年間オットマンの攻撃を逆退し、二十二回の大勝利を獲たる英傑なり。かゝる勇士なりしかば、オットマンは彼の死骸の骨を分ち頸飾として懸け、守護神としたりといふ。一千四百七十年オットマンの大艦隊ネグロポンド島に上陸し、四度大交戦の後、首府ネグロポンドに大暴風吹き荒み、全島民の生存するもの一人もなきに至れり、然るにモハムメットは帝國の他の一端にタイタ・オソレ・ハッサンの來襲を防がんが爲めに、出陣して此の災厄を免かれたり。ハッサンは此の時ペルシアに白羊朝(White Sheep)を創立し、法王ポール二世に鼓舞せられてオットマン攻撃の態度に出でしなり。ハッサンは遂に戦敗せり(一千四百七十四年)。一千四百七十五年ステヴン四世の率ゐるモルダウチアンによりてオットマンの一軍はラコヰェツ附近に撃退せられ、アルパニア及びギリイクに於てまたスクタリイ及びレバント二回の役に敗北したり。モハムメット二世は未だ曾て敗績せしことなきより、此の敗報を得て益勇氣を鼓舞し、一方黒海にあるゼノアの大市場カファに艦隊を派して之を盡滅し、他方には無數の騎兵を率ゐてピアザに侵入し、イタリイ全土に大恐慌を起さしめたり(一千四百七十七年)。



從順なるヴェニスは平和を要求し、スクタリイをオットマンに讓與して條約を締結し、年々貢税を拂つて黒海に於ける商業取引の自由を獲たり(七千九百)。翌年オットマン艦隊はネエブル王國の海岸オトラントを奪へり。後直ちにオトラント市は恢復せられ、またセント・ジョンの勳爵士の大統領ビアド・アブソンはサルタンに對してロオドを防禦したり。サルタンは三月の後努力其の効を奏せず、遂に圍を解けり、しかもモハムメットは新らしくして最も恐るべき計策を企てたり。そはエヂプトのマメリュークスに向つて進軍し、ロオマのセント・ピイター社壇に於て乗馬に糧秣をかはざればやまじと誓ひしことなり。

ページツド二世及びセリム一世(一千四百二十年)。ページツド二

世は軍人なるよりは寧ろ學者の資ありし人なり、弟ジジム王權を争ふて奪はんとせしかば遂に破れて戰となり、老臣アチメットの謀によりジジムの軍を破れり。然るにページツドは恩人マチメッドを絞殺し、ジジムは戰破れて、ロオドに遁逃せり。ロオドの勳爵士はジジムを歓迎し待遇厚かりしが、唯りビアド・アウブソンはサルタンの攻撃を避けんがため、ジジムをトルコに歸らしむる報酬として年々金四萬

「セキレ」の貢税を受くるとを約したり。これによりてジジムはポイトウの勳爵士采田地に閉鎖の身となりしが、遁れて法王アレキサンダア六世の手に投ぜり。チャアルス八世のイタリイ遠征中法王に迫つてジジムを引渡さんことを強求せしにより、不幸なるジジムはチャアルスの軍に送られしが、已に毒藥の爲めに死し居たりと。こはサルタンが法王に約するに、若しジジムを殺さんにはセ三十萬金を與へんことを以てしたれば、法王はジジムを毒殺したるなり、との流言當時専ら信ぜられしなり。

サルタンの主義平和にありと雖も、兵士の銳氣禁する能はずして、ボスニア、クロイシア及びモルダヴィアを征服し、ワクチアの主となり、ダニユウブの兩岸を占領したり(八千九百)。然るにページツドは早く生得嗜好の趣味に心移り、文學の研究を始め、只ヴェニスに對する小戰のみその安逸放縱の日を破りしのみ。彼は全く戰を好まざるにより兵士を満足せしむること能はずして廢位せられぬ。王の第四子セリム新に王劍を帯びて立ち、父王を殺して、王位に上れり。セリムは父を毒殺せしのみならず、兄弟及び其の系統を塵殺して競争者を掃除したり(一千五百)。

ペーシッド二世の治世中暫時中絶せし軍事上の行動はセリムによりて再起せられたり。

セリムの兵馬を愛する豪邁の資はジャニサリ軍兵の悦服する所となり、權勢日々に増進したり。王は兵士の希望を充しむべく心を表明して、彼等の満足を買ふに汲々たりしことは、嘗て老臣の王に向つて、帝國の軍隊は是れより何れに向つて進むべきやと問へるに對し、王は大に忿つて、世界の四隅に向つて進むべしとて、老臣を殺すこと前後二回に及べりといへる事實にて知るべし。王は八年の間ジャニサリを率ゐて遠征を企て、殆んど絶ゆる間なかりき。王は始めペルシアを攻撃したり、ペルシアは當時ソフキ王朝時代なり。オットマンとペルシアとの争は政事上にあらずして寧ろ宗教上の怨恨になれり。ペルシア人はステート派にして、第四カルフ(Caliph)のアリ(Ali)及び其の子孫にあらざれば豫言者の後繼として承認せず。然るにオットマンはアブベカー、オーマル及びオスマンの正系を承認せるのみか、教義の解釋をも異にせり。オットマン族の通諺にも、一人のステートの死は七十人の基督教徒の死よりも神の心に叶ふものなりといへり。故にサルタンの

軍を起すや、先づ國內の異教徒を嚴密に探索して殘す所なく、其の結果四万人を斬に處したり。かゝる恐ろしき虐殺は内亂の萌となれり。二軍はアダルペーシヤンに於けるトリス附近に出會し、非常なる激戦の後オットマンの一時の勝利となりしとはいへ、四万人の塵殺は今日尙國人の悲觀する所となれり(一千二百四十二年)。マメリュクスは二百年以上エヂプト及びシリアを支配せり。此の共和國の兵力強勢なるはオットマンの恐怖と妬心との目的物なりしが故に、セリムは十五万の兵に將としてシリアに侵入しぬ、これダマスカス及びアレppoの大守反逆の結果オットマンに通じたれば、容易に入るを得しなり。一大戦争はアレppo市に開かれ、マメリュクス軍遂に敗れ、主領を失ひたり、主領を英雄カンソールゴリといひ奮闘劍を振つて敵四十人を殺し、身心疲勞して憤死したりといふ。シリアは一千五百十六年タルタンに降れり。オットマンはカザ及びカイロ附近に大捷を得、エヂプトまたサルタンの有に歸去たりしが、エヂプト人は却つて敬意を表して王師を歓迎せりと。エヂプト人は二万人のマメリュクス人をサルタンに引渡して、一日中にこれを斬殺し、屍をナイル河に投じたり。かゝる虐殺にも拘らず

サルタンはマメリュークの探題を赧してエヂプト政廳の官吏に使用しければ、コプト人は此等探題の支配下にありて不幸なる政治に甘んぜざるを得ざるに至りぬ。エヂプトの降服はアラビア屬の地を降服するに至らしめ、メッカの大官はカアアバの鍵をサルタンに捧持して歸順せり。是に於てサルタンはメッカ、メヂナ及びゼルサレムの三靈地を領するに至れり。一千五百十八年更にペルシアに遠征を企て、遂にチグリス及びユーフラテス兩河流域の上部ダイアルペーカアの地をも占領したり。

カイロに於てセリムはカリフ(Caliph)の আবスの後裔モタヴァキールを發見し、コンスタンチノオブルに引率し、幽囚中死せり。是より先モダヴァキールはサルタンにモハムメットの旗を依托し、宗教上の權利を譲り居たりしなり。かくてサルタンは豫言者の後嗣なる神權者ともなり、神君兩權の二劍を握るに至れり。

エヂプトの勝利は他方面に影響し、アレキサンドリアの侵略はヴェニスに死命問題となり、遂にヴェニスは東洋との連絡を爾後杜絶するに至りたりき。

此等の廣大なる領地に加ふるに、アルジャアの地をも占領せり。アルヂャアの

主はミチーレンの陶器製造人の子にして、ホロークと呼ぶ一海賊なりしが、一千五十六年スペインより此地を征服して移住せしなり。ホロークの死後、弟カイレッデに相續したれども勢力振はず、アラビア人及び基督教徒に敵する能はざるを知り、自らサルタンに至りて降を乞へり。サルタンは之に探題の官を興へ、二千のジャンナリ、砲兵及び糧食を給したり、此の援助を得てアルジャア市附近にあるスペイン人の要塞を破りて之を逐ひ、アルジャア港を築き、海賊集會所を作りて、四隣を脅かせり。

數年にしてセリムは殆んどオットマン帝國の領土を二倍にし、ダニユブよりユーフラテスに擴がり、アドリアチック海よりナイルの大河に至る廣袤を有したりき。地中海の東方流域即ち海岸一帯の主領となりたるオットマンは、既にして其の西方流域なるアルジャアの要港を領したり。全政府の專制的組織は兵事上の計畫につきて政略行動能く秘密を保たれ、他國の窺知すること能はざりし程なり。

是に至り歐洲の軍隊は能くジャンナリの精銳に匹敵すること能はざるに至れり。此の盛境に於てセリム死し、ソリーマン繼ぎてサルタンの位に上れり。當時

サルタンの二大勁敵は實にフランシス一世及びチャアルス五世其の人にてありたり。

## 第二編 政治革新の結果

### 第一章 イタリイ戦争(一千五百十六年)

イタリイ戦争以前の約説。十五世紀後半期の歐洲列國史を研究せる間に、大陸を通ぜる新事實の發生と、ロオマ帝國の滅亡即ち君主絶對權の消滅以來、政府の組織は自然廢殘に歸し居たりしが、再び現出せるを見る。大陸を通ぜる一般の新事實とは政治的大革命の側面にして、此の革命は現に成熟せんとし、且つ技藝、理化學、文學及び信條等をも變ぜしめんとしつゝありたり。

當時國王等の施政宜しきを得、國民富有にして強勢なるの結果、各國王が其の勢力を利用して國土を擴張せしめんと欲する希望を抱くに至りしは當然の趨勢なりとす。これによりて封建的小戦争は終局を告げて、大陸的大戦争、即ち國家と國家との争奪は始められんとす、こは恰も國王等が領土内の貴族等に對する戦争の最期とも見るべきものなり。

近世紀の第二期は最初の歐洲戰爭即ちイタリア戰爭全部を占む何となればイタリアの占領は其の事件の主要なる結果なればなり。

抑もフランスは封建制度の先頭にして諸王悉く柔弱貴族等は皆暴慢城砦は無數なるの状態なればフランスは封建國中好個の代表者とも見るべく偶々ルイ一世不世出の英資を有し國內の群雄を平定し將に外國に向つて大志を伸べんとするの機會に遭遇したりしも貴族等の王と行動を共にせんとするものなくまた共にすること能はずさりとて訓練して政治的行動に服従せしむるの力もあらざれば外國遠征の企のみは遂に達し得られざりき。

チャアルス八世は何人も知る如くルイ十一世の留意せし事物には無頓着にして彼の行動は凡て天性然らしむるもの沈思熟考の後自己の天職と知つて行動するが如きと毫もなしこれによりてチャアルスは種々の事情に抑制せられて齷齪するが如き人にあらず如何なる情實あらんもそを打破して前進せんとせり例せば國內に爭亂起りて鎮定の要あるとも他國より援助を乞ふものあれば國事を放棄して忽ち之れに赴くが如き懐あり。チャアルスは何れの地へ遠征するとの最

も利益あるかを知るの明ありしに拘はらずフランスは勿論イタリア否歐洲大陸に最も不幸なる方面を撰ぶに至りしは極めて拙策なりしといふべし。

ルイ十一世はアンジョウ家よりネエブル王國に至る迄の權利を有せしかど其權利を外國にまで伸張することには深く意を用ゐて輕忽に事を起すを好まざりき。然るにチャアルス八世は勃々たる英氣に任せてアルプス山を越へて遙かにイタリアに兵を動かさんとの野心を藏せり外交に經驗ある政治家は八世の野心を思ひ止まらしめんとせしも遂に無効に歸せり。當時のイタリアは恰かもフランス軍に自家を投げるの觀ありたり例へばルドヴオはネエブル王の威嚇を蒙りてチャアルスの來援を希ひサルゾー侯、ニーポリタンの貴族等及びサヴナローラは法王安レキサンダア六世と兵を構へ皆チャアルスの救助を望みつゝありしが如し。

フランスの形勢より察せば遠國に大軍を派せんとは全然機を得たる者にあらず。チャアルス八世とブリタニイとの同盟再興は四隣の諸侯の嫌惡する所となり反對の同盟は組織せられたり。チュウドア朝の創立者ヘンリイ七世の英軍は

アライスに上陸し、チャアルスの計略に陥りて忿怒したるマキシミアンはアルトイスを攻撃し、スペイン王フェルナンド・ゼカソリックまさにピレニース山を越んとするあり。然るもチャアルス八世は遠征の念に驅れて、此等の諸王侯と協商するに決し、ヘンリー七世をエテールブルス條約にて、七十四万五千クラウンを向ふ十五年に仕拂ふの約束を以て歸航せしめ、マキシミアンにはセンリスの條約にて、ルイ十一世の征服せしアルトイス、フランチコムト及びチャロライスの地を其の子に返附することとし、フェルナンド・ゼカソリックとのナールボンの條約は、サーデン及びルーションを返戻することとして、悉く後難を除けり。恚くてチャアルスはイタリア征服は確實なるのみならず、戦捷の餘勢はグリースを通過してオットマンをコンスタンチノオブルより驅除し、ゼルサレムを基督教王國保護下に基督の墳墓を恢復し得べしと思へり。かゝる輕忽なる夢想に驅られて、フランスは危険の遠征を實行せり、これによりて國內の改善は放棄せられ、また願る者なきに至りぬ。

一千四百九十四年の晩夏、フランス軍隊はアルプス山麓に集合せられ、天險を超へ一舉してイタリアを壓せんとす、蓋し此の行こそ彼等は自ら墳墓に近づきつゝ、

あることを知らざるなれ。三千の鎗兵、六千のブリトン弓隊、六千のガスコン銃兵八千のスウツル人、及び巨砲百五十門を有せる五万の兵士よりなれる勇壯の大軍なれど、何れも烏合の衆にして、毫も整然たる規律あるなし。加之大遠征に缺ぐべからざる糧食、軍需品、及び軍費とに缺乏せり、所詮は自然の成行に委ねたるものといはんか、無謀の師と云はんか、全く運を天に委して指揮官より案内者に至るまで何等の企圖なく、敵地に侵入し得らるゝも將また退却せざるを得ざるに至るやも、悉く神慮一つにありといふべき状態なりき。

ネエブル王は弟に艦隊を委ねてレグホン及びピサに向はしめ、子に軍隊を附してフアイラタ方面に至らしめ、一は海路の敵軍を防ぎ、他は陸上の通路を扼せしめたり。オーレン侯はマルセエルに戦艦數隻を集め、ラバローに於て前者を撃退したれば、後者はフランスの先鋒ド・アヴィグニを待ずして退却せり。暗雲はイタリア半島の天に漲れり。イタリア人は野蠻人の兇惡なることを記臆す、而して今やまさに其の厄に罹らんとす、これ自ら招きたる災禍なるを如何にせん。

九月二日チャアルス一世はマウン・ト・セネヅラを横斷して、開戦せんとするや、軍

資の不足否皆無なるに心付り。是に於てチャアルスはサヴォイ侯夫人及びモン・フエラト伯夫人とチウリンに會し、巧みに翻弄して舞蹈をなし骨牌を弄して金剛石の胸飾を獲、ゼノアにて寶石を十萬フランに換へ、以て行軍の資となせり、但し四割二分の高利を拂ひしといふ。アスチに於て病みし間に、ルドヴヰコ・イル・モロ來り會するあり、ルドヴヰコは自らタスカニの境まで、領邑を通過して八世を導けり。またピートロ・ド・メジシ、八世に款を通じ、仇敵サヴォナローラに對してフロレンスを維持せんと希望せり、然れともピートロのフロレンスに歸るや、最早メジシを要せずとの叫聲に包まれ、市民に追逐せられぬ。サヴォナローラは、チャアルスを以て神が伊太利を罰したまふ爲めの使節なりとして市に導けり、八世は征服者の態度を以て威風堂々市に軍を入れたり。彼は此の地に軍資金を募集せんとしてならず、遂に武力を以て強迫したり。一僧侶あり、大膽にも、汝よろしく鼓を打て戦ひ來れ、吾また汝の死を吊せんが爲めに寺鐘を鳴さんと呼べりと。

ロオマの僧侶及び貴族等は法王アレキサンダア六世の苛虐に懲りたれば、却つて救護者なりとて門を開きて佛軍を迎へ、八世に薦むるに法王を廢せんことを以てせり。法皇遁れてサン・アンゼロに避難す。チャアルス其の古城を砲撃せしかば、法王は其の子シイザ・ボルギアを質として恭順の意を表し、またサルタン・ベリヂド二世の弟ヂムを與へて、後日東方に行はるべきフランスの計畫に資せんとせり、しかも數日の後ボルギアは遁走し、ヂムは交附以前已に毒せられたれば、幾許もなくして死しぬ。とまれ遠征軍はネエブルの國境に達したり。

ネエブルは風を臨んで降りぬ。フェルデナンド一世已に死し、子アルフォンソ二世は恐怖の餘り位を辭し、新王フェルデナンド二世立つ、勇氣絶倫、大に戦はんとしてサン・ジャーマノに至りしに、反逆ニ<sup>ナ</sup>所に起るに遭遇せり、一は軍隊、他は首府に起れるものなりき。王は已むを得ず、インチャ嶋よりシシリ島に遁逃せり、是に於てチャアルスは一槍に血塗ずして市民投花の間を通過して首府に入れり、これ一千四百九十五年二月二十二日のことなり。迅速なる戦捷の報は海を越へて傳はれり、ギリシヤ人は戦備を整へ、フランク王の來援を待てり。

戦捷の佛軍將士等は、縦令ギリシヤ人如何に變に備ふるも亦容易に征服し得るものと信じ、何等の留意する所なかりき。チャアルスは已にネエブル王、アジア皇

帝及びセルサレム王と自稱し、紫衣を纏ひ、手に黄金の球玉を持して、ニールポリタンに臨み、華美にして壯大なる戦士の武術或は種々の遊興を催して戦捷を祝しぬ。王の各將等は各自領土を割取し、貴族の美公主と婚を結び、費用をさへ支辨せしめたり。然るに二月後の或夜、コンスタンチノブル及びセルサレムの豫定戦捷者チャアルス八世はヴェニス共和国の大使にして歴史家なるフィリップド・コミンスより一書を得たり。そは歐洲各君主等一大同盟を組織し、チャアルス八世がイタリアよりの歸路を要撃するの目的なりとの報知なり。フェルチナント二世、マキシミリアン、ヘンリー七世は其の煽動者にて、フランス人を導き恭順の意を表したるルドヴァコ・イル・モロ、アレキサンダ六世及びヴェニスも亦其の黨與なりとなり。而してイタリア人はポアの罅間に兵四万を集め、餘の黨徒はフランスの國境を攻撃せんの計略なりき。當時オーレン侯はノヴァラに窮迫せられ、フランスに對するエウロッパの嫉視は始めて萌芽の兆を呈するに至れぬ。

蒼皇歸佛の已むを得ざるに至りたるチャアルスは、一万一千の兵をギルバート・ド・セント・ペンサーに遣はしてネエブルの副王とし、己は殘兵を率ゐてアペナイン

山に向つて進發せり。サルザナの北ポントレモリーの峽隘を通ぜる捷路を過ぐるに當り、非常の辛酸を極めたり。アペナインの前側タローの罅間には已に二万五千の同盟軍ありて、八世の進路を遮れり。チャアルスの軍僅に一万、尙進軍を繼續す。其の先鋒のタロー罅谷に突進せる間に、後隊は敵の包圍する所となり、チャアルスは苦戦一時間にして三千五百の兵を失ひ、他は悉く遁走せり、然れどもフェルノッオの一戦に戦利を獲、辛ふじて退却の活路を得たり(一千七百九十五年七月六日)。

チャアルスは歸國後恰もイタリアを忘れたるものゝ如く、容易に得たりし勝利を保全するの策をも講ぜざりき。フェルチナント二世は少數のスペイン兵を率ゐてシシリイを出發し、フェルノッオの戦の翌朝ネエブルを襲へり。ネエブルの副王ギルバートは不慮の逆襲に爲す所をしらず、遂に擒はれてアテラに幽囚せられ、次で熱病にて死せり。ド・アヴィニグニーも殘兵を率ゐてフランスに歸れり、是に至つてネエブルに於けるフランスの主權は、始めこれを收めし時の速度を以て瓦解せられ、市民もフランス軍を歓迎せし時と同一の歡喜を以て之を祝したりき。

イタリアの恢復せらるゝや、國內は再び分裂の狀を呈して、内亂は直ちに外攻を



惹起せり。皇帝マキシミアンはルドヴッコの請を納れて、チャアルスの爲せし如くアルプスを越へたり、然るに軍資乏しくして希望を充實するに至らざりき。彼は實にシヤアレマン帝の如く戦場の立物たるべしと自信したれども、野武士の役割にだも覺束なき人なりしなり。後小軍を以てフロレンスを攻撃して、レグホに撃退せられ、ゼルマンに歸れり。かゝる滑稽的行動によりて彼の獲たる報酬は、只赤貧(Penniless)の異名を蒙りたるのみなりき。

内亂は更に續けり。ロウマガナにては法王とロオマ諸貴族と互に争騒するあり、タスカニイにてはピサとフロレンスとの戦争あり、フロレンスにてはサヴォナローの黨與と其の敵との争鬪絶ゆる間なく、サヴォナロー殺されたれども、國內の平和は來らず。

フランスにてはチャアルス八世國民の不平に覺醒し、専ら神の指命によりて餘生を送らんと希ひ、國事を整理し、裁判を公平にし、また財政整理に力を注げりしが、アムボイス城修葺中二十八歳を一期として死せり(一千四百七十八年四月七日)。是に至りてヴァロイスの正系絶へ、オウレンのヴァロイス其の後を繼承したり。

ルイ十二世(一千四百九十八年—)。

チャアルス八世嗣子なく、オウレン侯ル

イ王位を繼けり、ルイは時に年三十六歳、チャアルス六世の兄弟の孫なり。ルイ二世の一門は社交的にして愛嬌に富み、磊落にし智謀あり、人民其の徳を慕ふて衆望の歸する所なりき。彼の祖父は顯著なる勳爵士、父は詩人として巧妙の詩文を殘せり、また伯父はチャアルス七世の將帥中最も勇敢にしてフランス舊名の一ダノイスを名乗れるものなりき。ルイ十二世は品性人に勝れ、道德家として知名なるものなり。彼は治世の始め租税を減し、人民より耶蘇降誕節會の慣例なるあらゆる進貢を廢止したり、この進貢の金額のみにては實に三十万リールに達せるものなりきと云ふ。

チャアルス八世の寡婦其の采色ブリタニイを領して、他家に再縁するを拒みしかば王妃となし、専ら國內の治亂に意を用ひたりしが、後遂に前王の覆轍を踏みて遠征を再起せり。

ネエブルに於けるチャアルス八世の權利を襲ひ、尙祖母ヴァレンチン・ヴキスコンチよりルドヴッコ・スフォーザの奪へりしミランの主權をも復歸したれば、此等の領土

權を確固ならしむべく決心し、ジェニス人にはクレモナ及びギアラを與へ、フロレンスにはピサを讓與し、シイザー・ボルギアには已にヴァレンチノイスの佛國公爵領地を與へたり。ルイ十二世に奉仕するイタリイ人トリヴァルシヨ八千の騎兵一万二千の歩兵を率ゐてミランに現はる、ルドヰッコは他と同盟を謀りしも應ぜざるを以て、已むなくタイロルに通れたり(九千四年)。

トリヴァルシヨは政敵を虐殺し、且つ執政宜しきを得ず、國內爲めに紛擾す、ルドウキコ此の機に乗じて失ひたる權利の回復を希望し、スウキツル及びセルマンの冒險者の群を率ゐて歸り、ミランを襲撃してフランス人を驅逐せり。ルイ十二世は、たなる軍隊をと共にアルプスを下り、ノヴァラ附近に於てルドヰッコと出會したり(五百年)。ルドヰッコの軍にありしスウキツル人は佛軍にある同國人と對抗するを拒みて戦はざりしかば、ルドヰッコの勢力大に沮喪し、また戦ふこと能はず、せめては單身難を免れんことを冀ひ、自らフランシスカンの回僧に扮し、以て身を脱せんとし、其の準備中不幸にもスウキツル人のために賣らるゝ所となれり。彼は佛國に護送せられ、ローチヌ城の堅牢に幽囚の身となり、十二年の後禁錮を釋かるゝと聞き、狂喜の

餘り死せり。

ミラン已に陥りてより、ルイはネエブルに注意を向けたり。先づイタリイ中央の諸邦に固く中立の約を結ばしめ、或は援助を給し、以て此等諸邦反抗の患を除き、または歡心を買ひ得たり。フロレンス人は反服常なきピサに對して寧ろルイの援助を仰げり。アレキサンダア六世は子シイザー・ボルギアを立て、ロウマダナの主權者たらしめんことを冀へり、この地には諸の暴主續出し、全土を擧げて殆んど土匪の巢窟たらしめんとするの状況なりしが故なり。佛軍の一隊來りてよりアレキサンダアに力を添へ、ロウマダナの紛擾は解決せらるゝに至れり。

かゝる情勢の下に、ルイ十二世は一舉ネエブル王國を掌握せんとし、豫めフェルデナンド、ゼ・カソリグと協定してフロレンス王國の分割を定めたり(一千五百年)。ルイは其の首府アブルジ及びテラヴオの地を取りて王名を享け、フェルデナンドは唯アピユリア及びカラブリアの地を取りて侯名を受くるの約をなしたり、然るにネエブル王フレデリッキはスペインの將コルドヴァのゴンサルヴォを信じ、城を開きて其の守營を委任し居れり、時に佛軍已に國境に來しかば、王はゴンサルヴォに援助を乞

へり、ゴンサルヴスは反して王の求に赴かざりき。王は敵に對するよりも却て反逆者の不信に震怒し、ネエブル及びコステルニエオヴを提げてルイの軍に投じたれば、十二世は戰を罷め、ロイアル河に退軍しぬ(百一十五年)。

戰勝後に於てもネエブル王國の分裂は未だ和親の形勢を現ずることなく、フランス及びスペインは絶へず國內の各地を相争ひ、殊に秋季に入りてアブルジの高原よりヤビタネートの平原に群集し來る綿羊に課する租税に關しては紛擾絶ゆる間なかりき。此の税源は實に王國唯一の歳入となれるものなり。嗣王ニエメロイ侯は精銳の兵を有し、ゴンサルヴスを撃つてパーレッタ市に封鎖したり(百一十五年)。プエルチナンド・ゼ・カソリックは養子フィリップ・ゼ・フェアに許すに、ルイ十二世と陽に停戰の締結をなし陰にゴンサルヴスに援兵を送らしめしかば、ニエメロイ遂に支ふることは能はず、其の將ド・アビグニはセミナラに敗れ、一千五百三年四月廿一日カラブリアを失ふに至れり。同月廿八日ニエメロイ自ら將として猛進し、セリグノラ附近に戰ふて大敗し、敵の殺す所となり、ヴェノーサ及びグデーテのみ佛國の有することとなりたり。

ルイは此の謀計に復讐せんがため、ピレニイ山に向ひ二軍の兵を遣はしたれども、何の獲る所なく、またラトレモイルを第三軍に將としてアルプスを越へしめたるも、効果を收むること能はざりき。始めラトレモイル、ロオマに入るや、會新法王撰舉のため同盟軍の市府を包圍するに逢ひて行進を阻礙され、荏苒日を移し居たりし間に、ゴンサルヴスは防備を整へ、ガリグリアノにラトレモイルを迎へ撃ちて大に之を敗れり。一千五百四年一月一日ラトレモイルはグデーテを捨つるの已むを得ざるに至り、ヴェノーサの司令官ルイス・ド・アルスも亦戰利あらず、殘兵を收めて佛國に遁れ歸りぬ。

ミラン府の損失は恐らくまたネエブル王國の損失をも惹起するの基因なるべしとの憂慮は、當然の理として首肯せらるべきものなり。一千五百四年ルイは先づプロイスの條約によりて敵軍を鎮制したり。そはルイはミランに於ける授任權を得たる代りとしてネエブル王國の主權を拋棄することとなれり、蓋しネエブル王國はアウスタリア及びスペイン王國の儲位にして、ネザランド王チャアルス公(フェルチナンド・ゼ・カソリック)の養子フィリップ・ゼ・フェアの子なりに屬すべきものに

して、ルイ及びブリタニイのアンの中に生れたる長女クロードと結婚の約を結て、ブリタニイ及びバルガンディはクロードの餽送物となり居たりしなり。この條約の承認ほど危害なるものはなかりき。然れどもフランスは此の餽送物の讓與を否認し、而してルイも亦國民に満足を與ふるに最も有力なる機會を發見したり。一千五百年フェルデナンド・ゼ・カソリックはフィリップ・ゼ・エヤの行動を惡み、其の子チャアルスに王位を讓ることを好まず、別に自ら再婚を約して儲位を廢せんと企て、ルイの姪ジャーマン・ド・フォイツクスと婚を結びたり。是に於てルイは一千五百五年十月プロイスに於て再度の條約を結び、王姪にネエブルの主權を讓與したるより、初度の條約の重要條件なるクロードの婚儀は破棄せられたり、然れどもブリタニイ及びバルガンディの讓與は尙未だ初度の條約中有効のものとして存在せるを以て、ルイは此の條項を破らんと欲し、一千五百六年五月十五日トアアスに議員を召集して諮問したり。議會はブリタニイ及びバルガンディの地は國王の領土にして、他に讓與すべきものにあらざることを決議し、王に請ふに推定相續者アンゴレム侯フランシスと王女クロードの婚を以てしたり。ルイは議會の請を容るゝに些

の苦痛をだに感ぜざりき。そはチャアルスの祖父なるマキシミアン大志を抱けりと雖も國帑窮乏して到底その志を伸ぶると能はず、またフェルデナンド・ゼ・カソリックもチャアルスの王位を相續するを好まざればなり。ルイの機會を見るに如何に敏捷なりしかはこれに依りても知るに足らん。王は翌年ゼノアを征して容易に之を略せり。

法王アレキサンダア六世已に死し、ホルギアまた倒れてイタリイは實に危急の形勢にあり。國內無政府の状態を再現し、惹て内亂續起し、劫掠虐殺行はれざる所なく、主領なく制度なくまた法律さへなかりき。國家征服せられ粉碎せられて、人目を遮るもの只荒敗の光景あるのみ、かく暴虐なる他國民に壓服せられたりと雖も、人あり一度起つて旗を翻すに逢へば忽ち之れに風靡するや必せり。

此の時に當り、瀕死のイタリイを復活せしめんとて奮然蹶起したるものを法王ジュリアス二世なりとす。ジュリアスは年老ひたりと雖も氣力强健、自ら世界の君主たらんことを冀へり。彼は敵の半島を横行するを見るに忍びず、蠻人を國境外に掃蕩せんとの志望を抱きしと雖も、イタリイは已に蠻人の跋扈するに委せたる後

なれば、容易に恢復すること能ず、されども、ロオマ府のみは最高の地ならざるべからず、此の目的を達せんには先づヴェニス人の掌握せるロオマの寺領を恢復するを得策なりと思惟したり。此の政略は不確實の基礎より打算せられたるものなり、即ち一時ヴェニスを蠻人の手に委し、後蠻人互に其の餌肉を相争ふに至らん時に乘じ之を奪はんとの方策なり、幸にしてジュリアス二世の謀計適中し、遂にフランスよりイタリアを恢復するに至りたるも、再びスペインの横奪するところとなり、彼の政畧却つて己を破るの爪牙となり了れり。

イタリアの紛擾により利益を蒙りしは唯ヴェニスなるのみ、之れ隣國が一ヴェニスの爲めに互に反目憎悪したるに基因す。ルイ十二世は曩にクレモナをヴェニスに與へしを悔ひ、またミランの公爵地に失ひたるクレマ、ブレシア及びベルガモを恢復せんことを欲せり。フルヂナンド・ゼ・カソリックも曩にフランスと戦ひし時ヴェニスより軍費の供給を受け、代償として與へたりしネエブル王國東海岸の數市の報酬としては餘りに過大なりしことを悔るに至れり。

ジュリアス往昔ロオマの所領たりしラヴェンナ、セルヴァア、ファエンザ及びキミニオを

要求して之を回復し、マキシミアンは皇帝の名義を以てヴェツナ、ヴェセンザ及びパヂアを、またアウスタリアの名義を以てフリウリ及びトリストを要求せり。恚くあらゆる嫉妬とあらゆる慾望とはヴェニス共和國に對してカムブライに集中したり、後數月法王はヴェニスの官吏、市民及び兵士に對して法禁令を執行しき。

ルイ十二世は準備整ひしかば、二万餘の歩兵と二千三百の鎗兵を率ゐてアダを横切り、ナクナデルの棧道に於てヴェニスの雇兵の將ラアルギアを攻撃せり。ヴェニス人は最初勇敢に戦ひしかど、佛軍中決死の將士等身を河川に投じて側面を襲ひしかば、遂に敗績し、勝に乗じたる佛軍はヴェニスの地全部水路までを占領せり。九死の裡にありて共和國の策は實に巧妙なるものなりき、爲めに國家は滅亡を免れたり。彼等は軍を収集して市外に退き、次て海上に逃れて降服の誓を免れ、同盟軍中内訌の起りて分裂するの日を待ちたり、果して分裂は暫時にして至れり。

法王ジュリアスはロウマグナの諸市を恢復せし以來、目的の第一を遂げたれば今や第二即ち半島より蠻國民を驅除せんことを畫策せり。彼は在來の同盟規律に重きを置かず、直ちに佛軍を掃はんことを欲し、千五百十年二月二日ヴェニス共和國に對

しては禁令を解き、カムプライフェルデナンドの同盟を脱し、マキシミアンをして此の同盟に意を用ゆることなからしめ、ルイ十二世がスウキッツル人に約したる保護金の支拂を欲せざるを利用して、巧に之れを離反せしめたり。かくして同盟軍の主なるものを互に離乖せしめ、次でフランスの同盟者フェラ侯及びゼノアの諸市を攻撃したれども戦利あらざりき。ルイも法王と兵を交ゆることを躊躇したり。そはフランスの僧侶トアスに集合し、戦は法王に對してにあらず、唯ロオマ諸邦の君主に對してなしたるこそ至當なれといふに衆議傾きければ、十二世は濫りに法王を責むること能はざりしなり。

然れども兩軍に激戦ありしは事實なり。佛軍の將シャウモンドはポログナに於て激しく法王の軍を襲へり、彼は死を恐れざる猛將にして、突進迫撃、法王に肉迫し、咫尺を隔て、法衣に手を觸るゝまで追撃せり。君主として攻撃せらるゝデューリアス二世は一兵士として奮戦勇闘したり。一千五百十一年法王は海に沿ふてミランドラに入り、大に佛軍を敗りしと雖も、ポログナ人の叛によりて全勝を占むること能はざりき。ポログナ人はミカエルアンゼロの彫刻せる法王の像を粉碎せ

り。カサレクシヨの敗軍によりて退却の已むを得ざるに至りたる法王は、病んでロオマに歸れり。ルイ十二世は今や法王を討伐して廢位せしむるの機至れりと信じたり、されど此は誤れるものにして、却てこれが爲めに戦の性質は一變せられたり。デューリアス二世はピサ市に禁令を布き、また不逞の僧正を破門し、セント・ジョーンに議會を開きて、神權保護の下に諸侯の來援を乞へり。諸侯は響に應じて來れり。スペインのフェルデナンド、英王ヘンリー八世、マキシミアン・ヴェニス共和国及びスウキッツル人等は其の聲言を喜び、一千五百十一年十月五日神聖同盟を組織し、神權保護の目的を誓約したり。名こそかくありたれども、實はアルプス山外に佛軍を驅逐せんが爲めに外ならざりき。

スペイン人レィモンド・カルドナー一万二千の兵を率ゐて法王の軍に投ぜり。ヴェニス人はかゝる形勢の變化によりて漸次失ひたる土地を恢復することを得たり。一方のスウキッツル兵もまたマシユウ・スチンナーを將として下山したり。恣くフランスの國境北東南の三方は敵の威嚇する所となれるに、搗て、ルイ十二世に屬してイタリイ及びゼルマンの要塞にある兵員は悉く反して同盟に投ぜり。

かゝる危機に際し一少壯の英傑フランスに現はれ、あらゆる危険を裁定し盡せり、然れどもこれ只一時の成効に過ぎざりき。此の英傑こそニユメルス侯ガストンド・フォイクスにして、齡漸く二十二歳、イタリアに於ける佛軍の司令官たりし人なり。彼は初めスウヰツル人に喰はすに金を以てして山谷に引退せしめたり（一千五百二十一年十二月十日）。時にポログナはスペイン及びロオマ軍により窮迫せられつゝありしを以て、侯は一千五百十二年二月七日、自ら市に侵入して重圍を破れり。ゼルマンはブレッシアを與へてヴェニス人に降りしが、侯は不意に城壁に肉薄して之れを破りたり（二月十九日）。四月十一日遂にラヴェンナに於てスペイン軍を撃退せしも、不幸にして侯は戦捷の央に死せり。ラバリシー其の後を継ぎしも、其の偉業をば襲くこと能はざりき。佛軍統御宜しきを得ず、レ・モンド・ド・カルドナのために敗れ、ボルグナ再び奪はれ、スウヰツル人また其の後部に迫り來れり、此等のスウヰツル兵はミランの公爵地にルドヴゴイル・モロの子マキシミリアン・スフォルザを立てんが爲めに戦へるなり。ラバリシーは敵の來るを待ずしてピートモントに退却せり。此の時デュリアス二世は死せり（一千五百十三年二月二十一日）。レオ十世法位を継ぎ、前法王の計畫を續行

し、マリンスに於て彼は再び神聖同盟を組織し、佛國の領土に侵入せんことを決したり。

ルイ十二世はかゝる攻勢に對峙して一步をも譲らざりき。フランスの國境至る所に攻撃を蒙るも、尙イタリイを拋棄することをなさず、フェルデナンド已にスペイン領ナヴァールの主となりて佛領ナヴァールを嚇し、英軍カライスに上陸したりしにも拘はらず、ルイはラ・トレモイル、トリヴァルシヨの二將をイタリアに送れり。二將は始めスウヰツル人及びマキシミリアン・スフォルザをナヴァールに壓迫し居たりしが、夜間優勢の援軍來り會し、同盟軍の勢大に振へり。翌朝スウヰツル人劍槍を並べて突貫し、佛國砲兵隊爲めに混亂の渦中に陥り、同志討して殺傷ありたるも、遂に敵の隊列を破り、激闘奮戦の末包圍軍を敗れり（五月六日）。北方キネゲート附近にて英軍と交戦中の佛軍はマキシミリアンの來りて敵に加はりたるを聞き、大に恐懼せり。此の戦頗る激しく、將士の多くは刀鎗折れ刺馬輪のみにて戦ひしを以て、當時の戦を刺馬輪の役（Battle of spurs）とす（八月十日）。後二万のスウヰツル兵、デイションに至るまで侵入せしかば、ラ・トレモイルは多額の金を與へ、種々の誓約を

結びて漸く之を控制することを得たり(九月十)。唯不幸なりしはフランス唯一の同盟者スコットランド王ゼエムス四世此の戦に敗れ、九月九日イギリス人の爲めにフロッデンに於て殺害せられたり。

フランスは三度の攻撃を蒙りて、ルイは退却の止むを得ざるに至れり。ティッシュの條約により、已にスウエッセルはフランスの友にあらず、是に於てルイ十二世はピサの會議を無視して法王に反抗し、一千五百十四年三月皇帝及びアラゴン王とオルレンの休戦條約を締結したり。

ヘンリー八世は兵を解くことを肯んぜざりしが、ロンドン條約によりてタールネーを英領の有となし、且つ十ヶ年間養老金として年額十萬クラウンを得るとにて平和遂になれり。此の條約は英王の妹メリイとルイ十二世との結婚によりて鞏固となりたり、然れども十二世は、永く平和を見ること能はず、五十三歳を一期として永く眠りぬ(一千五百一十五年)。

フランス一世のミラン征服(十五年)。戰役廿年の終りに至り、イタリアに残りたるフランス人の功業は一も見る所なく、唯墳墓の壘々たるあるのみ

なりき。勇猛なるデュリアス二世は死に臨んで、半島より佛軍の退却せるを見、最早イタリアは蠻民の手中より救助せられたりとて安眠しぬ。然るにスペインはネエブルを支配し、アウスタリアは、フリウリ及びヴェネチアを領し、スウエッセルはミラノを握れり。佛國と雖も最近の條約に甘んずるものにあらず、必ずや捲土重來の野心を藏するならん。要するに敵を滅ぼさんとするデュリアスの政略は一時其の効を奏したるが如しと雖も、イタリアの分割は到底免る能はざりしなり。

レオ十世、デュリアス二世に次で法王の位に上れり、レオは可愛快活にして文學技藝を愛せり、佛國にてもルイ十二世の後繼としてフランス一世登極せり。少壯豁達にして名聲に渴望したる新王は、オルレン休戦條約を破棄し、ミラン恢復を企てたり。王の同盟者ヴェニス人が、フェルデナンド・ゼカゾリック及びマキシミアン帝の埃西聯合軍を防阻せしを以て、王はマキシミアン・スフォルザ侯唯一の援護者なるスウエッセル人と戦へり。王は謀を以て、佛軍はまさきにセニス山及びゲネッラ山の要路を横斷すべしと聲言せしかば、スウエッセル人は欺かるゝとも知らず、其の方面の防備に吸々たりし間に、佛軍はアルゼンチルの徑路を通過したり。野



獸さへ踏迷ふ險惡なる罅間に假橋を作り、七十二の砲車を通せしめんがためには、巖をたる岩石を破碎して道路を開鑿せり、これ技師ナザアロウと軍隊の勇氣とによりて成就したるものなり。同盟軍の將フロスバフ・コロナは七百騎と共に生擒せられ、王は三万五千の勇兵を率ゐてミランに侵入し、マリグナノ附近に本營を置たり。スウキッツル人はシオンの僧マシエウ・シンチーに勵まされ、三万の精兵にてマリグナノの棧道に沿ひて前進し、彼等の軍略に従ひ砲兵隊に向ふて突撃せり。王は自ら貴族及び部下の親兵を率ゐて指揮したり、然れども陣地狹隘にして、一時に騎兵五百以上を操縦すること能はず、戦闘は未明より開始せられたれども、ポルボン侯は夜戦に於て成功したりき。スウキッツルは敵騎に側面を襲はれ、戦車また敵陣のために粉碎せられ、防戦躊躇の姿となるや、ヴェニスの先鋒其の後部に現はれ、前後に合撃せられて遂にミランに退却したり。スウキッツルは此の戦に於て一万二千人を失ひ、不撓の勇兵として博したる聲譽をも失落するに至れり。佛將トリツアルシヨは十七回の激戦に往來したる將軍なるが、これを以て最も激戦なりとし、巨人の戦と呼びたり(一千五百三十四年九月十三日)。

マリグナノの役は政治上少からざる必要の結果を與へたり。ミラン侯は權利を拋棄して養老金を請ひ、法王はヴェテルボウ條約によりてバルマ及びピアセンザを恢復したり。最後にフランスはスウキッツル人とフリーブルグ條約を結び、年々七十万クラウンの保護金を給するにより、必要の際何時にても同國より徵兵するとの權利を享受したり。此の平和條約は老フランス帝國の生命と共に存在しき。フランスとレオ十世との間には他の條約も締結せられたり。是れ一千五百十六年の盟約條規にして、一千四百三十八年條約の恢復なり。此の盟約條規により、從來權力濫用の府たりしロオマ應に王權に關する訴願の義務を免除し、又專制權即ちロオマ應は僧官を任免し、寺領を左右し、且つ王の僧官任免に關する命令に關涉するの權利を破棄したり。然れども國王の力能く僧官任免の權利を執行すること能はざる場合に限り、ロオマ應自ら之れに當ることゝしたり。フランスは、僧官會議の定期集會のみを許し、且つ僧官奉加金の制度を再興し、新任僧官はロオマ應に納金すべきことゝなしたり。

恣くイタリイ戦争の第一期は全く佛國の利益に終りを告げたり。ミラン公爵

地を併呑し、從來アルプス山脈一帯の地及びサヴォイ家の領土とにより隔絶したりし佛國は、今や更に新らしき一つの王冠を以て王の頭上を輝かすに至りたれども、之れがため四十年に亘る恐るべき大戦争を生ずるに至れり。

## 第二章 佛墺兩家葛藤の第一期 (一千五百十九年— 一千五百廿一年)

フランシス一世とチャアルス五世の第一戰役 (一千五百廿一年)。  
フランシス一世はマリグナノの役に大勝を博して、イタリアの平和を樹立し、永久の平和條約及び盟約同盟を組成して、自ら心にフランスの盛大を致せりと信ぜしが、此の年アラゴン王フェルデナンド・ゼ・カソリック死し、ネエブル及びスペイン帝國の半部は、後にチャアルス五世と稱せらるゝ一君主の有に歸せり (一千五百十六年)。彼はウェスト大公爵の曾孫なる關係によりて、バルガンデイと共に、ネザールランド及びフランチ・コムテの主權者となりしが、父方よりはマキシミアン帝の孫として、アウスタリアの儲王となり、母方よりはフェルデナンド・ゼ・カソリック及びイザベラの孫として、カスチール、アラゴン、ナヴァール及びネエブル相續の權を享有したるものなり。フ

ランシス一世はかゝる壯大なる世襲領土の收得より、チャアルス五世を防礙し能はざりき。加之彼はチャアルス五世とノウに於て同盟を締結し、ナヴァールの地をド・アルプレット家に與ふることを拒絶したるのみにして、他に何物をも要求する所なかりき。チャアルスも之を承諾したりしとは、雖も、心中固く決意する所ありて、此の約束を履行することは欲せざりしなり。

爾後三年、一千五百十九年マキシミアン帝の死後、帝國は全く空虚の状態を現したり。是に於てチャアルス及びフランシス一世は此の帝權を争ふに至れり。二雄の競争によりて諸撰舉侯は兩者より多額の收賄をなしたるにも拘はらず、遂にサキソニイ撰舉侯のフレデリック・ゼワイズを撰舉したれども、フレデリック之を拒絶し、却つてアウスタリアのチャアルスを撰舉すべきことを以てしたり。フランスを貶してチャアルスを權舉したるは、オットマン人に對して、セルマンの防禦上自家の保護者たるべきは、廣き領土と強き兵勇とを有せるチャアルス五世を措て他にあらずと信じたればなり。之に加ふるに諸侯はフランシス一世の專政を恐れしかば、チャアルスを皇帝に撰舉したり。皇帝は國會の協贊を経るにあらず

ば和戦を決し、また何れの國をも帝權專制の下に置くことを得ず、されどセルマン人に官職を興へ、帝居をセルマンに定むべきことゝなしたり。

フランシス一世はチャアルスの登極を見て忿怒措く能はず、大にチャアルスと雌雄を決せんとせり。實に此の争鬪は嘗に一人の私憤を霽すに止まらずして一大理由の存するあるあり。チャアルス五世自ら世界の帝王たらんと欲するの大望ありしや否やは審ならずとするも、少なくともかくやあらんとは他の恐るゝ所なりしなるべく、まして彼は事實に於てネザールランド、アウスタリア、兩シシリイ王国、スペイン及び新世界を併せ、遂に皇帝となりて帝國の全版圖を掌握するに至りしかば、眞にエウロッパを危害の地位に置きたるものと敵をして恐懼せしめたるなり。而して常に勇猛精進 (Alms's Feud) を以て日常の銘となせりし野心満々たる五世は、今や第二のシャアレンマンたるに何の缺くる所かあるべき。かゝる恐るべき大野心に對抗せんことは實にフランスの天職にして、歐洲列國の獨立否、世界文明のためにフランス國民の名譽とする所なるべし。

二世紀に亘る大戦に於て、兩家兵力の不均一は、一見フランシスの對抗し得べか

らざるの觀あるも、是れその外見にして、實力に於ては甚だ反するものありたり。アウストリア家は優大の領土を有したるに相違なきも、其の領土は各所に散在し、ために外國民の攻撃に逢ひ、紛擾絶ゆる間なく、全く不統一の形勢にあるなり。之れに反しフランスは國內の統一堅固にして、王權の勢力に何の障礙なかりき。加ふるに盟約同盟の結果、僧侶は王の配下に靜謐を保ち、貴族及び庶民また同一の状態にありたり。然るにチャアルス五世は國內の紛騷を鎮撫し、諸種の困難を消滅せざれば全く自由行動をなす能はざるに、スペインにては郡市自治團體の反抗するあり、フランダールにては市民の争擾あり、セルマンにては新教徒の亂あり、アウスタリアにはオットマンの來襲あり、地中海上には海賊出沒して領土を劫掠するあり、フランソワ一世は心の儘意の欲するに従て民衆より財寶を徵集し得るに反し、五世の領土アメリカは未だ以て其の富を供給するに至らざりき。チャアルス五世の材幹は優にフランシス一世を凌駕するものありしと雖も、以上の形勢よりして對抗の勝利はまさに佛國の有たるべきこと瞭然たるが如し。

恁くて二人の競争者は、初め各同盟を企圖したり。その結果チャアルス五世能

く好果を收め得たり。そはフランシス一世が英王ヘンリー八世と同盟せんとし  
て會合の結果、却つて八世の自負心を傷害するのみに終りたりしに反し、チャアル  
スは巧に英王の大臣にして實權を掌握せるウルゼエに昵近し、成功の上は法王  
の冠を與ふることを約し、以て英國と同盟を締結したり。レオ十世は宗教改革の  
勢力昂進せるを見て大に驚き、之を皇帝に報告して援助を乞へり。フランシス一  
世は外交に敗れしより兵力によりて効果を收めんと望あり。一世は先づ自ら兵  
を動かさずして間接に五世の軍に對抗するの策を取り、五世のノイヨン條約に反  
違してナヴァールを抑制しつゝあるを以て、一世は六千の兵をヘンリー・ド・アルブレ  
トに與へて進軍せしめたり、また皇帝と不和なるバイロン侯に一軍を與へ、侯の名  
を以てラキセンバルグを攻撃せしめたり。佛軍はカスチールに於て敗れたり、こ  
は郡市自治團體(Communes)の叛徒を援け、首領ドン・シアン・デ・パデラを救はんとして  
進發したるも、機に後れて到着したるが故なり。バイロン侯亦戰利あらず、帝國軍  
はメジヤを包圍せり。幸にしてベヤアドの來援によりて、六週間の防戦を繼續し、  
一世をして兵を率ゐて來り救はしむるを得たり。是に於て敵軍列を亂して退却

するや、佛軍は勇進してネザールランドに侵入し、思ふが儘に復讐をなしたり(一千五  
年)。イタリイに於てはロウトレック施政酷薄、收斂苛酷、人民の怨恨を招き居たりし  
が、この時バルコピアセンザ及びミランをも拋棄するの已むを得ざるに至らしめ  
たり。戰役の軍資募集は始められたり、これをフランスに於ける公債の嚆矢なり  
とす。一世は何物に拘はらず、只金銀を調へんとて焦慮したりしが、中にもパリ國  
會議員の位置二十を賣りて金を得、またルイ十一世が嘗てトアスのセント・マルチ  
ンに備へたる銀製の籬を熔解するの所爲にも出てたり。

翌一千五百二十二年、イタリイに於て更に激烈なる戦は起れり。ロウトレックは  
援兵を受け居たりしも、軍資の供給はなかりき。サヴォイのルイスはロウトレック  
の妹シャトープライアンド伯夫人に對する嫉妬より、國老セムブランセーを強て  
スウキツル人に支拂ふべき金を己に納めしめ、以てロウトレックを苦しめたり。ス  
ウキツル人は金を得ず、ために騷擾し、ロウトレックに、向つてこれを請求したり、ロウ  
トレックはベコツカの堅壘に對して攻撃を始めしが、飢饉によりて抜くこと能はず、  
却つて敗績したり。此の敗績はミランを失ひ、またヴェニス及びゼノアの防禦を

損するに至れり(二十一年百)。同年チャアルス五世は己の前教師なるアドリアン六世を擧げて法王となしたり、これよりイタリイは六世の管理下にあることゝなれり。

フランシス一世は自ら兵に將として戦へば從來の失敗を恢復し得べきことゝ信じ、將に二萬五千の兵を提げてアルプスを過ぎんとしたり、時恰もボルボンのマスタブル叛を企て、佛國は危急存亡の機に際し居たりき。コンスタブルは封建侯中最後のものにして、フランス王國中最も勢力を有し、且つ王の良將たりき。始め王の母サウヱイのルイイスは王の己に従順なるに乗じ、コンスタブルに對し不條理の行爲をなしたれば、コンスタブルは之を王の所爲なりとし、佛國に反して復讐せんが爲めにかく反逆を謀れり。コンスタブルは皇帝チャアルス八世、英王及び自己の間にフランス王國を分割すべき秘密條約を結び、これによりてアルレスの舊王國を再興せんと望めり。フランシス一世は密約の報に接せしかど、漠然として未だ其の實否を確め得ざれば、モリンスにコンスタブルを索めて自白せしめんとしたり。ボルボンは斷乎として之を斥けたりしも、陰謀の發覺を悟りて遁逃

したり。ヘンリイ八世は、前年已にフランスに宣戰を布告し居りしが、今や大軍をカライスに上陸せしめ、スペイン軍は、ベリオンを攻撃し、又一萬二千の帝軍は、ジャンペインに侵入しつゝあるあり。フランシスは自ら出陣する能はざりき。ピカルディの英軍に對してラトレモイルを送れり、ラトレモイルは作戰計畫巧みにして、敵を抑制しつゝ、少數の兵を以て遂に之れを撃退せり。ロウトレックはスペイン軍を、ガイスはゼルマン軍を支へたり。ボンニヴェーはイタリイを恢復せんとして交戦したれども、機略の才に乏しくして戦利あらず、ピアグラッソに於て重傷を蒙り、ベヤアドに全軍の指揮を依托したり。ベヤアドもまた退軍中不幸にして傷きて起つ能はず、一樹下に倒れたり、コンスタブル進撃して此處に至り、ベヤアドの倒れたるを見、大に彼を惜みて慰めたりしが、ベヤアドはコンスタブルに答ふるに、安んぞ予は君が同情の詞を聞くを須んや、予は此處に死するも猶名譽の人たるを失はず、然るに予は却つて君が君王に背き、國を欺き誓を破りたる行爲を哀むものなりとの言を以てしたりと(二十四年百)。

慘憺たる戦捷の後、ボルボンはプロヴェンスに侵入せり、然れどもチャアルス五

世はボルボンに信ぜず、遂にペスカラ遠征軍の司令長官たらしめたり。以前の秘密條約に基く條件一も實行せられざるを以て、ボルボンは家臣に檄を發したれども一人の之に應ずるものなく、マルセイユ市民の來りて其の市を與ふるならんと思惟したりし豫想も反し、却つて頑固の抵抗を蒙るに至れり。フランス一世は大軍を率ゐて來れり。帝國は戰利あらず、列を亂して退却し、ミラン城を棄て、遠くアルプス山麓に走れり。ボルボンは各處より援軍を請へる間にペスカラはベギアに六千人を送り、アダの後方に於て防備をなすことを得たり。

フランスは進んで一撃の勞を費さずしてミランを取れり、ベギアは能く防戦せり、二世は之を包圍し、猶兵一萬を分ちてネエブルを襲はしむ。敵軍は暫く兵を息めて持久の策を講ぜり。ボルボンは忿恨遣る方なく、あらゆる手段を以て軍資を集めてゼルマンに赴き、後數週にして一萬二千のゼルマン歩兵を得て歸り、ペスカラ及びネエブル副王ラノイと同盟し、共にベギアに歸り、決死の勇將アントニオ・デ・リウアの指揮せるベギア市及び三同盟軍にてフランスを挾撃したり。フランスに勵むるに此の地を去つて他の要害の陣地を撰ばんとをもつてしたる

ものありたれども、ボンニヴェーは佛國王たる者一步も退くべきものにあらずと呼號して前後の敵に當れり。同盟軍は陣地排列中佛軍の砲撃を受け、猛火の裡に苦めり、砲兵指揮官ゼノイルラックは其の砲射を誤らず、敵陣の隊伍を破りしこと幾度なるを知らず、砲烟彈雨の間に出没し、眼に映ずるものとは劍を把れる手と甲を冠れる頭のみなりしとは、如何に砲射の甚しかりしかを想像するに餘りありと云ふべし。然るにフランスの狂勇なる自ら親兵を提けてスペイン軍に急進せんが爲め、味方の砲列の前面に出でしかば、かく有効なる砲射も之れがため其の用をなす能はざりき。此の機に乗じてスペイン軍は再び隊伍を整へ、フランスの軍に突貫し來れり。フランスは能く戦ひ、自ら劔を擧げて敵を斃せしこと七人に及びたるも、遂に降服するの止むを得ざるに至り、附隨して共に戦にありたる貴族も或は生擒せられ、或は殺戮せられたり(二十五年)。二世は其の夜母に一書を送りて曰く、予の不幸の如何にありしかを報道せん、予の有として此の世に残れるものもあるなし、さはれ只名譽と生命とは傷くるものなくして猶存在せりと(二十五年十二月三日)。

悲報の歐洲に傳はるや、フランスは其の王を併せてチャアルス五世の有に歸したりと信じ、恐慌戦慄せざるものなかりき。殊にイタリイはスペインの大勝は己れの破滅なるべきを知り、一層の恐懼を抱くに至りたり。英國のウルゼエイはチャアルスの約に反き、クレメント七世を立て、法王たらしめたるに憤怒し、王を勸めてアウスタリアとの同盟を破棄せしめたり。フランスの攝政サヴォイのルースはチャアルスに對する一般の恐懼と憤恨とに乗じ、佛國の危害を轉じて優勢の位置に恢復せんと巧みに此の好機を操縦し、オットマンのサルタン、ソウレエマンとも結びて自家の援護たらしめんとせり。然れどもオットマンとの商議は單にトルコに住する佛國民が宗教の自由を得んが爲めに納むる租税を免除せらるゝの外、何等の効果なかりき。とはいへ、此の締約は後日に緊要なる結果を生じたるものなり。

フランス一世はチャアルスが己に對するに寛容の態度を以てすべしと期せり、然るにマドリッドに於ける會見はその豫想に反したるものなりき。チャアルスは深き注意を以てフランスを監護し、長き會見を拒めり。フランスは一時太子に讓位して佛王たらしめんとまで思惟したりしも、かくては君主たりし身が遂に一個の勇士として敵の手中に空しく呻吟するの外なしと觀じ、煩悶措く能はずして病めり。彼は決心を翻して佛國に取りては全然不幸なる條約に署名せるに至れり、これ心中決して條約の承認を欲せしにあらざりしも、一時の術策として服従し、無異に敵手を遁れ、大に他日を期したればなり。此の條約によりて、バルガンディをチャアルスに讓與し、ネエブル及びセノアの支配權を抛ち、フランダイス及びアルトイスの王權を棄て、ポルボンに舊領地を與へ、皇帝の妹ポルトガルの女王ドワガールと婚儀を約せり。

**第二戰役**（一千五百二十六年）及び**カムブライ條約**。平和克復するに及

んで、フランス一世はマドリッド條約の履行を拒絶したり、始めバルガンディの代表者等はコンニャクに集會を催ふし、佛王は王國の一地方たりとも能く之れが保全に任ずべしと誓約したりしに、今やバルガンディをチャアルスに讓與せんとす、之れ王の權利にあらざるべしとの議決を發表したり。皇帝は條約破棄の罪を以てフランスを責めたりしも、一世は唯之れ口頭の戲言のみ、宜しく一戰を以て正否を

決せんと答へり。是に至りて戦は再び起りぬ。當時イタリアは帝軍の虐待を受け居たれば、戦役の起るや狂奔してフランスの軍に投じたり。法王クレメント七世の相ギベルティは此の戦を單に一個の復讐的問題の解決にあらず、實にイタリアの救助か或は不幸奴隸となりて滅亡するかの大事を解決すべきものとなしき。他の或者はイタリアにしてフランスと同盟を締結するは全然イタリアの利益にしてフランス人を愛するの故にあらずとせり。是より先き英王ヘンリー八世は同盟保護の名によりて、法王、ヴェニス、フロレンス、ミラン及びスウヰツル人と結びたり。

何れの同盟にも免れざるが如く、一致と精力とはイタリア獨立の同盟にもまた不十分なりき。同盟の將アルビノ侯は、スフォルザを救はざりしかば、ミランに於て敵に壓倒せられ、またセノアを威嚇しつゝありし法王の艦隊を援助せんとはせず、自らクレモナを征服して他を顧みざりき。ボルボン侯は一萬乃至一萬五千のゼルマン兵及びデヨルデ・フロレンスバルグの熱心なる宗教改革者の黨與を得、進んでミランを劫掠し、今や將にフロレンス若くはロオマを呑噬の才にかけんとし

つゝあり。殊にスロンズバルグはロオマを目指し、彼が首に纏へる黄金の鎖は法王統首の用に供せんと誓ひたり。チャアルス五世はイタリアに對し、かくまで極慘の手段に出づるを歎ばざりしかば、ボルボンに軍資を給せず、また司令權をも與へざりき。さはれ此等の貪婪なる團體は何事にも耳傾くることなく、或は其の將を殺し、或はボルボンを嚇迫し、急進してアペナインを越へたり。イタリアはタスカニイを保護せんとして大に防備を嚴にしたり。ボルボンは心中一大計畫を夢想し、ロオマに進軍せり、ロオマは城門を閉ぢて之を防禦しぬ。ボルボンは攻撃中不幸にして戦死したり、然れども兵士は城門を破り、ボルボンのために極めて残酷なる復讐をなしたり。ロオマは一時間を支ふること能はずして陥落し、(五月)奪掠九ヶ月の久しきに亘りたりしが、一種の恐怖すべき流行病發生して、匪徒の多數の爲めに斃れしかば、悲劇は終を告ぐるに至りぬ。劫掠に逢ひたるロオマの慘境たる光影は、ゴス及びヴァジナルスの時よりも更に甚しく、尼僧は姦せられ、祭壇は強奪せられ、墳塔は汚辱せられ、ヴァチカン文庫は剽掠せられ、ミカエル・アンゼロの傑作もまた悉く破碎の悲運に逢ひぬ。



あらゆる基督教國民の中蠻民に對して奮然懲罰の師を起さんと企てたるものあり、是れをフランシス一世となす。フランシスは日頃に似ず、遅々として事を處理し居たりしが、遂に斷乎としてイタリイに優勢なる一軍隊を派遣したり。司令官ロウトレックはミランを回收し、陸路進んでネエブルを圍み、海上よりはドリリア之れを封鎖したり。當時若しフランシス一世の計策に錯誤なかりせば、イタリイに於けるスベインの勢力は消滅したりしならんに、一世はゼノアに信を措かず、別に一大海港をサヴォナに設けてゼノアと競争せしめんとしたり。かゝる計畫あるを悟りて、ゼノア人アンドリュートリアは一世の行動に反抗して苦言したりしと雖も、一世之れを聽かざりしかば、艦隊は擧つて皇帝の軍に投ぜり。海上の封鎖解けたれば、ネエブルは再び佛軍より奪はれたり。ロウトレックの軍は糧食盡きて日に飢餓に迫り、彼また熱病に罹つて死し、殘兵はアヴェルサに於て捕獲せられたり。(一千五百一八年)セントポール伯の指揮せるフランスの別軍も翌年ランドリアノに於て敗潰し、佛國は遂に半島を失ふに至りしを以て、これより半島一帯悉くアウスタリアの勢力下に屈服せらるゝに至りぬ。

皇帝は部下將師の戰捷と競争者が失敗との結果、イタリイを悉く彼の掌中に收めたり。帝は自らボログナに至り、法王クレメント七世を召致して條項を制定せり、是はヴェニスは舊領土を恢復し、マントア侯の如くアララ及びミラン兩侯は帝國の臣僚たることを承認すべく、またサヴォイ及びモンテフェラットはフランスの同盟を脱すること等なりき。諸項を規定したる後、法王はチャアルス五世の頭上にイタリイ及び帝國の王冠を捧げたり。(一千五百一十年)唯ラロレンスのみイタリイの服従に反抗したりしが、全一ヶ年の後遂に城門を開放して帝軍を迎ふるの止むを得ざるに至り、メジシ家を再興し、爾後スベインの保護によりて君主たることを得たり。

チャアルス五世は今やフランスを攻撃すべく準備せしが、形勢一變遂にフランシス二世と和を講ずるの必要起れり、是は宗教上の戰亂將にセルマンに破裂せんとし、ソウレマニは勇猛なるジャニサリを率ゐてヴェンナ城下に迫らんとし、ヘンリイ八世またアウスタリアとの同盟を破棄するありて、容易に兵を起すの餘力を存せざればなり。是に至りてカムブライ條約成立したり、條約はマドリッドのそ

れよりもフランスに取りては稍、利益あるものの如し、即ち帝はバルガンディの権利を棄て、佛王はネエブルに野心を絶ち、スフォルザをミラン侯たらしめ、且つフランス及びアルトイスの君權と共にターネエー及びヘスデンの地を讓與する等にて落着したり(一千九百五年)。

### 第三章 佛奧兩家の葛藤第二期 英土の干渉

一千九百二十九年—  
四十四年—

フランス同盟の新組織 フランス及びバルガンディ兩家の葛藤は、一千四百十九年モンテロウの橋上に於てジョン・セフ・アレスの暗殺によりて起り、チャアルス六世、七世及びルイ十一世に至りてフランス王國に多大なる危害を生ぜしめたり。葛藤はチャアルス・セボオルドの死後に至りて鎮靜したりしも、バルガンディ宗家はアウスタリア・スペイン兩家結合の新系統となりぬ。恚んで其の子孫は領土を分割して各々自營の策に汲々たりし間に、フランスの諸王は外國征服の師を起すことを得たり、これ實にイタリア遠征の第一期なり(一千四百九十六年—)。チャ

アルス八世明敏機智の資を有し、第二のシヤ、アレマンたらんと志を抱き、再びバルガンディ家を横領せしより新らしき紛擾は發芽せるなり。始めバルガンディをフランスに致し、次にフランダーズ及びアルトイスの主權をフランスより奪ひ、イタリアに對する野心を挫きてアウスタリア家支配するに至りぬ。これよりアドールよりムメに至る佛國の境土はチャアルス五世に結合せられたるスペイン、イタリア、フランチ・コムテ、セルマン及びネザーランド諸地の環繞する所となりて、無謀に國境を出ること能はざるに至りたり。かく恐るべき四隣の敵地を破らんにも、フランスの武力ペリアの一敗以來獨力之れに當ること能はざれば、此の際フランスは必要の方策として帝國の大望に恐怖を抱ける諸國と同盟を組成するの外なきに至れり。

佛國の敗衄はフランシス一世をして古代武士の勇壯的動作を演ずるの好奇心を消滅するに至らしめたり。今や一世は武人的勇氣の政事上に好果を齎すべきものにあらざることを見破り、進んで外交に歩を移し、同盟の價値を認めて之を歡迎するに至れり、而して同盟者としては一世之を取捨撰擇するの暇なく、ジズメチ

ク派の英王とも、セルマンの新教徒とも、或は嫌悪すべきオットマンとにても猶避くる所にあらず。ヘンリー八世自ら謂へらく、予の助くるものは皆一國の君主たるべしと、然るも援助を與ふるに最終の結果を見るまでは助力を竭さざりき。八世は實にエウロパの主權を争へる二大競争者の間に介して權力の平衡を保つことを得べかりしも、性質放縱殘忍にして常に感情に支配せられ、他との同盟を確守すること能はざりき。ルイ十二世の時フランスに對抗して一大同盟を組成せしことありしが、マリグナノの大勝利以後嫉妬の情にかられ、チャアルス五世戴冠の後、は寧ろ彼の勁敵フランス一世に心を傾くるに至りしも、フィルド・オブ・セ・クロス・オブ・ゴールドの會見に於てフランスの働作態度は王の自負心を傷け、同盟不成立に終らしめたり。一千五百二十一年王はチャアルス五世と條約を締結し、數月の後フランスに對して戰を宣布したり。フランスはスコットランド及びアイerlandの叛徒と同盟して之れに反抗しぬ。一千五百二十三年英軍進んでオイスに至り、佛軍ベキアに敗れ、チャアルス五世の勢權頓に増加するや、ヘンリー八世は佛國の攝政と商議して、サヴォイのルーイスは如何なる條件にても佛國の領土は

寸尺もチャアルス五世に分割すべからずとの條項を有せる一條約を締結せしめたり。王はまた英國の保全は歐洲の獨立を擔保するものなるを自覺したり。フランス一世捕虜の身を脱して歸國し、母の協約したる英王との盟約に基き、チャアルスを欺きて約款を履行せざりき、然れどもヘンリーは兩雄の戰鬪に干與せず、唯フランスを援けたるの行動を以てチャアルス五世を驚かしめたるに満足し、進んでフランス一世と行動を同じくすることを止め、局外中立の位置に立ちたり、しかも内心フランスの勝利を冀ひしは疑なき事實なり。如上の行爲はよりてもヘンリー八世が如何に感情の人たるやを知るに足らん。

此の時に當り他に新なる一事件を生じ、ヘンリー八世の頭腦を惱ましめたることあり、チャアルス五世の伯母なる王の先妻離婚問題之れなり。一千五百二十九年此の問題を佛國民に諮問せしに、國民凡て反對の態度に出てざりき、此等の關係によりて數年間は英佛の交情日に接近しつゝありしが、戰破裂したるに至り、再び之れと分離せんとするに至りたり。

翻つてオットマンとの同盟は、英國とのそれとは大に趣を異にしたるものあり、當

時のオットマンはサルタンとして有名なるソウレエマン一世を戴き居れり。一世は父セリムの如く武勇を好み、技藝を愛し、文學を奨励し、また法律立案者にして、コンクエロア(勝利者)、マグニフシエント(豪邁)、及びレジネレエトア(立法者)等の異名を有したる人なり。賢主統御すと雖もオットマン人が異教徒に對する行爲は實に殘忍酷薄の蠻民たるを失はざりき。歐洲國民の間に伍して政治上に干與することには、ソウレエマン治世の間に起り、實に歐洲の運命に必要な重任を負ふに至れるなり。歐洲の政治的行動にオットマン人を誘致せしものは、フランス一世なり、基督教の敵國と關係を結びたるは罪惡の甚だしきものなりとて、歐洲一般の非難を受け、一世また心中大に恥づる所ありたるも、日に權力増大を致し、野心また勃興せるアウスタリア家に比してオットマン人の危害は遙に及ばざる所多かりしならん。縱令フランス一世がオットマンとの關係を非難するものあるも、チャアルス五世また已にこれに同盟を欲し、密に勧誘し居たりしは事實なりき。東方アジアに在る基督教民及び佛國旗を翻して航行する商人等は皆佛國領事の保護下にありて生命財産の安泰及び宗教の自由を得しを見れば、佛國がオットマン人との同盟によ

りて宗教の危害として見るべきものなし、實に然り、宗教は何等の影響をも蒙らざりき、そはソウレエマンが基督教民に對する大勝利は一千五百三十四年に於て佛王と結びたる條約締結以前に屬すれば、佛國との同盟によりて慘劇の始まりたるには非ずと知るべし。かの慘劇を再説すれば、ソウレエマンは一千五百二十一年に十二回の攻撃の後ハンガリーの要塞ベルグレエドを奪ひ、翌二十二年に兵一萬二千と戦艦四百隻を率ゐてロウドを取り、二十六年には、自らピイターワアデンの主となり、モハツズの大捷を獲、また彼は二十萬の兵を率ゐてダニユウブ河を通過し、ハンガリー軍を破り、ルイ二世之に戦死せる等の事實なりとす。

ハンガリーの王冠はルイ二世の義弟なるアウスタリアのフェルヂナンドに歸したり。然るにフェルヂナンドはチャアルス五世の弟なれば、ソウレエマンはマギヤア族のジョンザポリを援けてハンガリーの王權を奪はんとせり。ハンガリー全土はオットマン人のために蹂躪せらるゝ所となり、ブダまた陥りたり(一千九百)。ザポリは恭順にして臣下となり、モルダヴァの君主またかくなしたれば、ソウレエマンはダニユウブに於て己を遮るものなきを見、アウスタリアに侵入してヴェンナを

包圍せり。カムブライ條約はオットマン人がヴキエンナに進軍しつゝありし間に結ばれしにて、時に一千五百二十九年八月三日、このヴキエンナに入りしは九月二十六日なりとす。此の二ケの日附によりてツリ、チイ、オブレ、デイス(貴婦人條約)の調印せられたる所以を知るに難からず。ヴキエンナは二萬の守兵を有せり、之れイタリイ戰役に従軍せしものにして、勇猛なるサルム伯は同地の知事たり、オットマン二十回の襲撃に逢ひしもなほ能く撃退したりしはこれありしが故なり。サルタンは已むを得ず退却するに至りぬ。

後二年サルタンはスラヴォニアを征服し、一千五百三十二年彼は再び三十萬の兵を率ゐてハンガリイに現はれたり。スチリアの一小寨ガンスは彼の進軍を支へて一月を保ち得たり。ガンスの包圍中サルタンは始めてフランシス一世よりの使節を迎へたり。是に於てサルタンはゼルマンに侵入せんことを企てたりしが、チャアルス五世已に十五萬の兵を集めて防禦の準備をなし居たりぬ。異教徒征討の師として、かく歐洲教民の集合して優勢の兵力を得しは未曾有なりといふべし。新教徒もロオマ教も各自の怨恨を放棄し來りて、サルタン討伐の軍に投じ、フラン

シス一世もライン河、或はイタリイに敵を牽制してオットマンに助力せざりき。兩軍相對すること六週日、未だ兵火を交ゆるに至らずしてサルタンは己が虚に乗じてスペイン艦隊ダアタネルス海峡を通過し、コンスタンチノオブルを威嚇せんとするの報に接し、蒼皇兵を提げて歸國したり(一千五百三十二年)。

一千五百四十三年前までは、フランシス一世とソウレエマンとは唯秘密條約にのみ止め、一千五百三十二年所謂侵略條約を締結して、佛國はアジアにある諸靈地の保護權を得、レヴァントに工場を建築するの特權及びフランス國旗下に自由に商業をなすことの權利を受け居たりき。此の如きは同盟條約中の公然發表すべき條項なりしが、窺かにサルタンはネエブルを攻撃することを約し、佛王はメラン襲撃を約せり。同時に王はルウサー派の諸貴族と協商するに至れり、蓋しルウサー派の諸貴族はスマルカルド同盟を作りて先にチャアルスに反抗し居たりしなり。法王は此の條約に心平なる能はず、フランシス一世が法王の姪カザリン・デ・メジシを太子に娶さんと申込みたるを拒みたり。幾何もなくして法王死せしと雖もカザリンの婚儀破談の爲め形勢穩ならず、危機將に至らんとしたりしが、當時アウ

スタリア家はネエブルを掠め、更にミランを渴望するあるを惡み、法王朝の政略はフランスに好意を表するの狀態を現するに至れり。當時ロオマに於ける宗教上の利害は政治上のそれよりも勢力軽く、セント・ピイター法廳に於てすら此の二問題の利益得失は相似の形勢を現せり。フランスがオットマンと同盟するや、國民の氣概は二問題に對して思想上極端の傾向を持せしも、王が公言したる「群狼來りて家畜の生命を奪はんとせば、予は犬を放つの權力を有すること慥かなり」との證言を得て、人心稍鎮撫することを得たり。これ實に社會問題と共に國家的利益問題の發生したるものにして、國家問題が宗教問題に先立つべきものなることを見、同時に中世紀の眞に滅亡せることを證するものといふべし。

一千五百三十六年フランス一世は、長女をスコットランド王に娶はして同盟を締結し、王女の死後ローレンのメリイと再婚せしめて和親を繼續し、一千五百四十年デムマルクと初めて條約を結び、かくして周圍の小邦に同盟を組成せしめ、以て世界の主權を掌握せんとするチャアルス五世に對抗せんとしたり。また同時に國民軍を編成して四萬二千人を得、スウヰツル及びセルマンの雇兵に依頼する

ことなきに至れり。

チュニス及びアルギヤースに於けるチャアルス五世 フランスとの第三戰役(一千五百三十六年)。フランス一世ルウサアの徒及び異教徒と同盟を結ぶや、チャアルスは花々しく異教徒に逆つて對抗したりしと雖も、表面のみ基督教保護者にして實は自家の名譽と利益との爲めなること疑を容れず。オットマンの海軍は有名なるカイレッティンの指揮によりて恐るべき進歩をなし、絶えず地中海を横行しつゝあり、この時サルタンはペルシアのトゥリス及びバグダッドを奪ひしも(一千五百四十四年)翌年之を失ひしが、カイレッティン提督はチュニス、モウレエ及びハッサンを國境外に驅逐しつゝありたり。以前ゲンセリックの下にカルセエチとなり、アグラピテスの下にヒセルタたりしアルギヤース及びチュニスは當時海賊集合所となりし爲め、スペイン及びイタリアの海岸一帯は危害甚だしかりき。海賊の巢窟に向つてチャアルス五世は二度の遠征を艦裝したり。始め四百の戰艦を率ゐたるドリリアはチュニス灣口に於てラ・ゴレッタを奪ひ二萬の捕虜を解放したり(一千五百三十五年)。然るも不幸にして六年の後アルギヤースにて颶風に逢ひ、戰艦

の多くを失ひ、漸く殘艦を修理して歸ることを得たり(一千五百四十年)。チャアルスはロオドの武士にマルタ島を讓與し、能く基督教民の商權を保護せしめたり(一千五百三十年)。此の勇猛なる民兵隊は専心一意地中海の保安に従事し、多大なる効果を收めたりしが、カイレッティンの勁敵なる海賊ドラゴーがドリッポリの主となることを防阻すること能はざりき(一千五百五十年)。サルタンは已にエヂプトの管轄權を有し、且つババライ諸州の主權を掌握してアフリカ北海岸一帯に堅固なる基礎を樹立したり。カムプライの條約はチャアルスの惡計によりて破裂したり。チャアルス五世はミラン侯を教唆して國際法律を破り、佛國公使マルギールを捕へて獄に投じ、之れを斬に處したり。フランシスはミラン侯の死後此の暴戾に復讐せんがためアルプスを横斷すべく準備をなせり(一千五百三十五年)。一世はミランの主權を要求し、戰捷を容易ならしめんためサヴォイ侯の領地を奪へり。蓋し此のサヴォイ家はアルプスの要害に位置し、ルイ十一世の代より佛國に忠節を盡し、アルプス山外に於ける佛軍の功績に大なる援助となり居りたりしなり。然るに一千五百二十一年サヴォイ侯チャアルス三世とチャアルス五世の義妹との婚儀なりてより、佛國に對する交

情日に疎遠となり、ペピアの役カムプライの條約後は全く讎敵の態度に變ぜり。さればフランシス一世はイタリアの二衝路サヴォイ及びビードモンドの主力を握り、半島に於けるスペインの主權を抑制したり。此の時チャアルス未だ兵備整はざりしかば巧にフランシスを操縱し、其の間に兵を徵集したり。戰鬪準備成るや直に假面を脱し、ロオマ僧正會議に於て各基督教國派遣大使の面前に於てフランシス一世の罪惡を鳴し、異教徒と和親を結びしを太く非難したり(四月五日)。フランシス一世は軍資の缺乏により止むを得ず自家を保護するの外敢て抵抗するの力なく、加ふるに將帥の資なきサルツウ侯をビードモンドの防禦に任せしこと極めて輕舉なりしといふべし。あらゆる城砦悉く帝軍に降りたれば、チャアルスは六万の兵勇を提げてフロエンスに進入したり。チャアルスは一戰にして佛國を征服し得べしと輕信し、部下の將士に豫め官爵を授與し、歴史家ハアローキヨギオをして筆墨を準備せしめ、フランス征服史を作らしめんとせり。蓋し彼は史家の爲めに進軍しつゝありと公言せしほどに自惚せりき。平素自裁力に富めるチャアルスが此の如き殆んど沒常識の行爲ありしとは何人も信ずること能はざ

るべし。モントモレンシーはフランシスの命を受けて防戦すべかりしも、優勢なるスペイン軍に對して戦を交へざりしかば、プロエンス遂に敵の馬蹄にかけられ、アルレス及びマルセエーユ城を除くの外悉く敵の侵す所となり、井は埋められ、工場倉庫等の建築物は悉く烏有に歸したり。住民は難を避けて山林に遁逃しき。皇帝は荒敗せる市に駐營すること二ヶ月の後、マルセエーユを攻て敗れしも、アルレスを破り貴族官吏僧侶等は悉く難を避けたり。チャアルスはプロエンス王たらんことをも望めり。更に進んでアピグノンに至りしが、農民の蜂起に逢ひ、また赤痢に襲はれ、佛國征服の大軍を起したるチャアルスも僅に殘兵を收めて歸ることを得しのみ(一千五百三十九年九月)。帝は急にイタリイを去り、敗跡の跡を蔽はんがためスペインに進めり。

フランシス一世は愚なる儀式によりて戦を始めたり。チャアルスをパリ國會に召致して重罪人たるの宣告を與へたることを擬し、アルトイス及びフランダースの采邑地を奪へり。かゝる行動は唯不要の戦に終り、しかも兩軍等しく疲勞し、遂に北境に於ける十ヶ月の休戦を締約しぬ。南方にてはフランシス、ビードモン

ドを恢復せり、然るにソウレエマンはその帝國の極端なるシヨルデア及びアルバニアの諸侯を征服し(三千七百一十七年)、エッセクに於てアウスタリイ軍を粉碎し、一方には提督カイレッディン、ネエブル王國の海岸を劫掠したり。イタリイにてはオットマンの同盟者フランス王に對する怨恨の聲四方より起れり。法王は自ら輿論の吹聴者となり、兩競争者を強ひて己を仲裁者たらしめたり、是に於て彼等は私憤を抑へて遂にニイスに於て十年間の休戦を約するに至り、二雄は各自の征略地をば保留することとなりたり。サヴォイ侯は此の條約の犠牲となりぬ(三千五百一十八年)。

ソウレエマンは容易に犠牲とはならざりき。アウスタリイのフェルデナンド及びトランシルヴァニアのザポリ互にハンガリイの主權を争ひしが(三千五百一十六年)、ウエイッテン條約によりて王國を分割したり。然るにザポリの子セルマン人に嚇かされ居たるにより、サルタンは其の權利を保護するの口實により、セルマン人を擊退してブダを回復し、後には殆んどハンガリイ全土を奪へり(四百一十五年)。三年前サルタンはキーマンを征服し、またポルトガル人に對して印度のマッサルマン援護の艦隊を紅海に艦裝するに至り、サルタンの國旗は、ローン河口よりインドス河口に至る



まで翻へらざる所なく、其の権力はコウカサスよりアフリカ・アトラスに至るまで普及することとなりぬ。

ニイス休戦締結後、チャアルス五世、フランシス一世はアイグスモルテスに於て會見せり。モントモレンシーは奸智にして、外面嚴格の風を装へども、衷心非望の野心を懷抱し、極めて貪慾の臣なりしが、王に勸むるにミランを取るの唯一方策はチャアルスと確固たる同盟を組成するにあるを以てせり。然れどもチャアルスは如何に高價の報酬を以てするもミランを讓與することを肯んぜざりき。當時フランシスが充分の厚情を以て五世を遇し、毫も反抗的行爲に出でざりしは實に幸福なりしといふべく、現にフランシスの軍はイタリイ及びシシリイに破れ、スペイン議會は王の軍資を拒みたる折柄なればなり。かゝる困難の鎮定せらるゝや否や、フランシスは求めて新らしき一危害を蒙れり。勢力あるゲント市五世に叛して佛國に附隨せんとを申込みたりしに、フランシスは無用のミランにのみ心酔し、有利なるフランダー人の申請を拒絶したるのみか、王は不信にも申込書をチャアルスに示し、之れが討伐には佛國を經由すべしと誘ひ、却つてチャアルスを歓迎

したり。かくして王はチャアルスの歡心を買ひ、ミラン讓與の口約を得しかば、最早希望は達せらるべしと信じたりき、然るにゲントを失ふのみならず、ミランを得ることも能はざるに至りぬ。

フレミングの降服後、チャアルス五世は口約あるを知らずとなし、若し之れありとするも正式の契約書なきは無効たるべしとて、ミランの主權を其の子フィリップに讓るべく公布したり。フランシスは大に欺かれたるを恥ぢ、更に戰を起さんと決心せり。此の戰機の口實は幾もなくして來りぬ。

**第四戰役。** フランシス、チャアルスに欺かるゝ所となり、忿恨措く能はず、二人の密使をソウレエマンに遣はして援助を乞へり。密使はミランの大守デルガストのために暗殺せられたり(一四一五年)。デルガストは密使が佛土同盟の契約書を齎らしたらんと信じたりしが、幸に書簡はビードモンドに留めありき。數ヶ月の後、チャアルスはアルギヤースの海賊を攻撃して全敗に歸したること已に前述の如し。

かゝる企圖と反抗とはフランシス一世をして戰鬪準備を急に促すに至らしめ

たり(三十五年)。王の女婿スコットランド王ゼエムス五世の助力を藉り、スウィイデン及びデムマルクと契約し、フランスはスカンデナヴィアンと結合の新同盟を組織したり。王はルウシロンネザールランド及びイタリアを攻撃せんとて五個の軍隊を立所に編成したれども、苦心の甲斐なく兵備は成効と相伴ふこと能はざりき。一千五百四十二年の役は効果なく、却つて有益なる一同盟國を失へり。そは始めヘンリー八世、スコットランド王を自宗に導かんとせしかど、ゼエムス之れを拒絶せしのみか兵を以てヘンリーを脅嚇し、自ら英國に侵入せんとせり、然るに國內の貴族已にカルギンの宗教改革に心を寄せ、王の出師に當り之を廢位したるとなり。ゼエムスは廢位後幾何もなくして死せり、時恰もロウレエンのメリイ一女を生み、メリイステアートと稱せり。翌年ヘンリーはチャアルス五世と攻戰同盟を組成し、二王直ちに進んで佛國に入り之れを分割せんとしたり。皇帝はフランスの同盟たるクリューズ侯を降せしも、北境の戰に利あらずし、ランドレシースを圍みたりしも、抜くこと能はざりき。其の間にソウレエマンは東方アウスタリーの領土を攻撃し、曩にハンガリーの侵略せし地を恢復してその主權を握り、進んでアウス

タリイに侵入し、フランスの艦隊と共にニイスを劫掠したり。市は陥落せり、城砦は未だし。オットマン人はツウロンに於て冬籠りし(四十五年)。

次の戦役は名譽ある戦捷を持來りぬ。フランスはマリグラノを煽動して帝に叛せしめられたれば、デルガストも之を救はんとて市に近き來りたり。將師士卒は云ふも更なり、頭領ドエンギンは弱冠の身を以てスペイン人の横暴に對して熱心反抗せんとしたり。然れどもフランスは嚴命を下して未だ戦役に走るの危険を許さざりき。フランスは好時機に會せり。そはマリグラノの敵愾心は遂に抑制する能はず、ドエンギン侯はモントラックを使として敵を攻撃せんことを王に請はしむ。王は許可せり、宿憤は狂喜と化して迸出し、マリグラノの名譽を發現するの日は來れり。老若悉く起つて軍に投じ、政廳の官吏もまた出でて軍に加はり、勇氣勃發ドエンギンに軍資を齎らして兵士給與の援助をなせり。武勇の戦闘中佛軍及びスウエール人の精兵來り援け、大勝を博するを得たり。帝軍敗績一萬二千の屍大砲及輜重を残して退きしが、佛軍の戦死者は僅に二百人に過ぎざりしといふ(千五百四年)。

然れどもフランスは歐羅巴の半部を敵として戦はざるを得ざるの形勢となりミランに侵入するの暇なく、マリグナノの戦捷及びシャンペイン防禦のため一萬二千の精兵をビードモンドの軍より分遣するの必要に迫れり。ヘンリー八世は當時已にカライスに上陸し、ブウロンを包圍しつゝありき。チャアルス五世はシャンペインに進出し、セント・デジャアを取れり。帝軍進んでシャトー・シーリイに達するの報傳はるや、パリ爲めに震動し、市民の財産を携へてオルレンに移住するもの夥しかりき。フランス一世叫んで曰く、噫神よ、予の戴ける王冠は神の手づから授け賜ひしものなりと信ぜしに、何んぞ計らん、こは多大なる勞費を要するものなりしとはと。幸に敵營糧食窮乏を告げ、次で病疫の襲ふ所となりて大に困憊せるに、英軍また固くブウロンに據りて、同盟軍に合せず、かゝりし程にセルマンのルウサアの徒の勢力増大を致すを防がんがため、チャアルスは退軍するに決し、一時虎口を脱するを得たりき。

クレスビーに於て平和の約なりぬ。皇帝及び王は各自の征服地を交換し、フランスはサヴォイとビードモンドを領し、またチャアルスはフランスの末子にミランの主權を與ふることを約せしが、幼王は死せり。ヘンリー八世唯孤立の位置に残りたれども猶退軍を峻拒したりしが、一千五百四十六年六月に至り、遂に兵を解き、ブウロンに換ふるに二百萬フランを八ヶ年に支拂はるべく約して歸國したりぬ。

フランス一世は最後の條約を見ること僅に數ヶ月にして死し(七年三月三十日)、王子ヘンリー二世位を襲げり。

#### 第四章 佛墺兩家葛藤の第三期 一千五百四十七年—

チャアルス五世の最上權 フランスとの第五戰役(七年—五年)

チャアルスはフランス一世の死によりて利益する所多かりしは謂ふまでもなし、一世の相續者ヘンリー二世またセルマンのプロテスタント(新教徒)を壓服するに國情の許さざる所ありたれば、新教徒は思ふが儘に驥足を伸張することを得たり。ポヘミアのカアデンに於て新教徒と羅馬教徒との條約成立(三十四年)してより、マンスタアのアナバプチスト(基督教の一派)の叛亂及びフランスに對する

チャアルス五世の戦役はゼルマンを渦中に投ずるとなかりき。然れどもクレスビイの條約(一千四百四十四年)以後、チャアルス五世はフランスに制肘せらるゝことなく、また一千五百四十五年ソウレエマンと五ヶ年の休戦を締結してオットマンの危害を掃ひたれば、今や新教徒の膨脹を抑制するの機會至れりと思惟したり。ブランデンブルグ、ミスニア、サリンデア及びバラチネエトは宗教改革の徒に加擔しき。一千五百四十三年コロンの大僧正は新教に心を寄せ、羅馬教の誓約を破りたるに拘らず、其の撰擧侯領地と僧正領地を固守し居たり。然れども羅馬は法王パウロ三世の治下にありて、勢力全く皇帝のそれと同じく、四十五年十二月十三日トレントの集會を開き、第一會議に於てプロテスタントと融和し難き破綻を生じ、寺法によりて罪科を課し、一萬三千人を破門したり。ルウサーは兩派交戦の發端を見ずして、永き眠に就けり(一千四百四十六年)。スマルカルドの同盟は大勢力を有せしかど、首領なくして統一を缺くに至り、次でサキソニイのモウリス陰謀を計りて皇帝に投じたれば、遂に同盟は破壊されりぬ。サキソニイ撰擧侯及びヘスの貴族(ランドグレンエツ)といふは武装してフランシス一世に援助を乞ひしが、一世の死によりて孤獨

となれり。チャアルスはムウルベルグにサキソニイ侯を破りて生擒したり(一千四百四十七年四月二十三日)。ヘスの貴族もまた帝軍を支ふること能はず、軍門に至りて降を乞へり。チャアルス五世は勝利の後殘忍貪婪の行爲を逞ふし、サキソニイ侯の領土を奪ひてモウリスに與へ、侯を終身禁獄の身となし、ラントグレンエツもまた捕はれたり。チャアルスは二人の捕虜を率ゐてゼルマンの諸市を過りて帝の武威を示し、以て市民を威服し、其の自由を奪はんと欲せり。外國兵士の群集は市の四隅に充滿し、市民の頭上には重税の課せらるゝあり、實にゼルマンの自由は剝奪せられたるに等しといふべし。

皇帝はゼルマンの新教徒になしたるが如く、イタリイのゲルフス(イタリイに於ける團體の名にもなせり。ゼノアに於てドリアスに對するフキスチの結黨は勇猛なる主領の變死によりて破れたり(一千五百四十四年七月二日)。シオンナにはスペインの守兵あり、ロムバ、アディにはピートルレイシ、ファネス暗殺せられ、相續者オクタオの勢振はず、漸くバルマ市を保つに過ぎざりき。帝軍はピアセンザに駐在し、スペインのフィリップは法王應の行動を監視せんがために至りぬ。